日高郡由良村郷土誌

全

日高郡由良村郷土誌 全

郷土誌編纂要項

明治四十三年十月三十日

第一篇 自然誌

一 位置

- 一、山岳 湖海等顯著ナル事物ニ依リテ記スルコト
- 一、郡縣ニ対スル位置

二 境界

- 一、隣接郡市町村名及其方角ヲ北ヨリ東南西ノ順ニ記ス
- 一、境界ハ何ヲ以テ成レルカ

三 面積及廣袤

- 一、総面積（方里ト段別トヲ以テ表ハス）
- 一、田面積（反別ニテ表ハス）
- 一、畑面積（ ）
- 一、山林面積（ ）
- 一、原野面積（ ）
- 一、東西及南北ノ幅員 里 町
- 一、最長最短ノ幅員

四 地勢

イ、総説

山及山脈 高原 平野 溪谷 土地ノ傾斜 河川 湖沼 海岸ノ状況等ヲ概説スル事

ロ、山及山脈

- 一、山岳 山脈等ノ名称 位置連亘ノ方向
- 一、高度（メートル） 幅員 里 町 傾斜
- 一、人事及自然ニ対スル影響
- 一、其他

ハ、河川

・水深
一、名称 位置 水源 本支流ノ關係 流長 卑町・流幅 町間・流勢 水量
舟運 水利 瀑布 水庫 溝渠 井堰ノ狀況

二、人事及自然ニ対スル影響
一、其ノ他

二、湖池沼

一、名称 位置 周圍 卑町・面積 反別・廣袤 町間・深水利 水産
二、人事及自然ニ対スル影響
一、其ノ他

木、海岸

一、出入ノ多少 海岸線ノ延長 卑町・灣岬 島 海底ノ深淺 海底ノ狀況 砂
岩 泥等

一、海岸ノ高低 廣狹等

五 地 体

一、地形變遷ニ関スル顯著ナル事項

一、地質 其土地ヲ構成スル主要ナル岩石土壤等ノ狀況
一、礦泉 温泉 冷泉

六 氣 候

一、総説

一、氣温 一ケ年中最高、最低 全年通覽 華氏

一、變化其他顯著ナル事實

一、雨量 最少ノ月 最多ノ月 全年通覽

一、風 四季ニ付各季ノ風向 風力 全年通覽

一、天氣 四季 各季ノ有様 全年通覽

一、自然及人事ニ対スル影響

一、其ノ他

七 變 災

一、顯著ナル天變地異及其ノ他ノ災害並ニ其ノ影響

一、善後策

第二編 人文誌

一、沿革 沿革圖ハ能フベクンバ成ルベク多ク入ル事

一、上古ヨリ今日マデ歴史上ノ變遷(特ニ領主 領域ノ變遷ニ主ナル事變ヲ記載ス)・
歴史年表ヲ挿入スベシ

二、大字区劃

名称 自然及人事上重要ナル事

三、戸口

一、沿革

一、総説 現在ノ概況ヲ記載ス

一、人口

十年間ノ累年比較並増加率 在籍人口(男女別)・現在人口(男女別)・密度
一、方里ニ付

一、戸数

總數 増加率 職業別(農 工 商等ニ區別ス)

一、出稼人(出入兩方面)

十年間ノ累年比較人數 職業別人數 出稼方面 出稼人ノ與フル影響

一、移住人(全 上)

一、寄留人(全 上)

四、官衙及公署

一、名称 位置 沿革等

五、經濟及財政

一、沿革

一、総説 現在ノ概況ヲ記載ス

一、歳出入額 決算表ニヨリ各款項ニ分チ十年間累年比較

一、基本財産及部落有財産 種目毎二十年間ノ累年比較及部落有財産統一ノ計圖其他管理方法

一、公債

一、毎戸租税平均負担額

一、貯蓄ノ狀況
（十年間累年比較ニヨリ國稅 縣稅 市町村稅二分ヲ其會計ニツキ算出ス）

六 生業

沿革

イ、農業

沿革 戸口 耕地 田 畑ノ各面積 自作地反別 小作地反別

産額 米 麥 柑橘 甘藷等詳細ニ記載スベシ

組合 種類及其狀況 特種ノ耕作傾向等

ロ、牧畜

沿革 牧場數 頭數 總數及種類別ニ依リ記載ス

ハ、林業

沿革 反別 國有 公有 私有 社寺有 民有

戸口 産額 總額及種類別ニ依ル・方法 販路 傾向等

ニ、鑛業

沿革 鑛區數及坪數 産額 總額及種類別ニ依ル・方法 傾向等

ホ、漁業

沿革 戸口 漁船數 日本形 西洋形二分ツ

遠洋漁業 漁場 漁撈ノ種類 船舶ノ種類

産額 總額及種類別ニヨリ且漁獲物ト製造物ト二分ツ・方法 傾向等

ヘ、工業

沿革 種別 戸口（總數及種別ニ依ル）

産額 總額及種別ニ依リ十年累計比較

原料 產地 數量 價格 各種五ヶ年累計比較
工場 會社 種類 資本 器械數 製造高 利子配當
組合 販路等ノ狀況傾向等

ト、商業

沿革 種別 戸口(總數及種別ニ依ル)

取引先 需用供給・組合 會社 資本 預金 貸付
會議所 銀行 各種勞銀 十年間比較・傾向等

チ、其他

七 教育

沿革

總說 現在ノ概況ヲ記載ス

イ、初等教育

學齡兒童數 就學歩合比較 男女別及其平均

大字ニ於ケル就學歩合比較 男女別及其平均

兒童出欠席ノ狀況 大字ニ於ケル比較 全上

學校數及學級數(尋常 高等ノ區別)

小学校二類スル各種學校及其生徒數 教育費額及村費全額ニ對スル割合 十年比較

教育費ノ戸數一戸ニ對スル割合 十年比較・傾向等

ロ、中等教育

學校名 位置 種類 生徒數 卒業生十年間累年比較

生徒卒業後ノ狀況

教育費 十年比較・傾向等

ハ、高等教育

學校名 位置 學生數 卒業生 教育費 十年比較・傾向等

ニ、實業教育

學校名 位置 科目 生徒數 卒業生徒數 十年累計比較

生徒卒業後ノ狀況 教育費 十年累計比較・傾向等
ホ、社會教育

設備 目的 方法 傾向等

八 神社

名稱 位置 祭神 社格 由緒 主ナル宝物 祭典

九 宗教

沿革 總説 現在ノ概況ヲ記載ス
寺院佛堂

名稱 位置 宗派 檀家 宝物 由緒等

神道及基督教等各宗派ノ教會所

名稱 位置 宗派 信者 沿革等 信仰ノ傾向

十 民俗

沿革 總説 現在ノ概況ヲ記載ス

氣質 風俗 習慣 犯罪

言語 長所ト短所 其ノ他

十一 衛生

沿革 總説 現在ノ概況ヲ記載スヘシ

疫病 死亡 健康狀態 種類 患者數 流行狀況・流行方面

醫師 施設 其他

十二 交通

沿革 總説 現在ノ概況ヲ記載ス

道路 車輪ノ大小 橋梁 渡船場 車馬通スル並ニ特別工事

鐵道

船舶ノ大小數 発着 航路 港灣 標識 燈台 浮標 望樓・水難救濟所等

通信機關及其狀況 運送會社

宿屋 所在 名稱 戸數 設備等

附近名所旧跡及主ナル市 邑ノ距離等

十三 各種團體

赤十字社 婦人會 同窓會 青年會 矯風會 共濟團體 農會 武德會 尚武會
在郷軍人團等ニツキ其ノ沿革 團員數 活動ノ有様等

十四 名所旧跡

總說 名稱 位置 沿革 特徵 設備 遊覽人 交通ノ便否並ニ著明ナル歌詩・文章 俳句 俗謡等

十五 貝塚 古墳 碑 遺跡 発掘物 古建築物等ノ名稱 位置 所在 由來 保存ノ狀況 等

十六 古今著名ノ人物小傳

篤行家 徳望家 政治家 學者 教育者 軍人 実業家ト事業家 医師 神官 僧侶 節婦 義僕 名門 其他著シキ人物
以上ノ人物家系 生死年月 教育境遇 事業 勢力 社會ニ対スル影響等

明治四十三年十月三十日

由良村尋常小学校訓導
由良村郷土誌編纂委員

原 胤 衛 寫之

日高郡由良村郷土誌 例言

- 一、本書ハ郷土誌編纂要項ニヨリ編輯シタルモノナリ
- 一、本書ノ統斗及諸調査表ノ如キハスヘテ同年度ノモノヲ掲ケントセシモ材料ヲ得ズ止ムヲ得ス不統一ニ揭示セリ看者之ヲ諒セヨ
- 一、本書ヲ編スルニ當リ社寺 旧家等ニツキ資料ノ蒐集ニ盡力シタルモ参考トナルモノ少ク偶々得ルモノハ何レモ断片的ノモノニテ上古ノ事柄ニツキテハ記録ノ存スルモノナキヲ以テ知ルニ由ナク其確實ナルモノ而已ヲ記載スルコト、セリ
- 一、本書記載ノ寺院ノ沿革其ノ他ノ記事中文字及文句ノ疑ハシキモノアルモ皆原文ノマ、記入セリ
- 一、本書記スル各町村ヘノ距離及村内各大字ヘノ距離并各溜池ノ周圍及幅員ノ如キハ何レモ明治九年及其後ノ調査ニ基キタルモノニテ疑ハシキ点アルモ一々實査スルノ違ナキヲ以テ同書ニヨリ記入シ置キ後日實測シ訂正セントス
- 一、本書卷末記載ノ旧家ハ何レモ中古火災ニカ、リ或ハ津浪ノ爲メ古記録ヲ流失シタルヲ以テ系譜不明ニテ記載スル事ヲ得サルハ遺憾トスル所ナリ
- 一、本書ハ農業ノ餘暇ヲ以テ成リタルモノニテ叙述ノ整齋其他ニ於テ遺憾トスル所甚ハタ多シ且ツ薄覽寡聞ナル遺漏ナシトセズ故ニ爾後閑ヲ得テ増補シ完璧ヲ期セントス

大正五年十二月

日高郡由良村郷土誌 目次

第一編 自然誌

一、位置		3
二、境界		3
三、面積		3
四、地勢		3
ア 山及山脈		4
イ 河川		4
ウ 池		5
エ 海岸		5
五、地體		5
六、氣候		5
七、變災		6

第二編 人文誌

一、沿革		7
二、大字區劃		11
三、戸口		19
四、官衙及公署		21
五、經濟及財政		34
六、生業		49
ア 農業		50
イ 蠶業		51
ウ 牧畜		52

日高郡由良村郷土誌

第一編 自然誌

一、位置

由良村ハ和歌山縣ニ属スル日高郡ノ北部ニシテ東ヨリ西南ニ狭長ナル土地ニシテ和歌山

市ヲ距ルコト拾五里。郡ノ首邑御坊町ハ南方三里拾六町ノ所ニアリ、而シテ西北方白崎

村 衣奈村 南方西内原村 西南志賀村ニ出ツルニハ何レモ山ヲ隔テ、一里内外徒歩セ

サルベ

カラズ。然ルニ西ノ一方ハ海ニ面スルヲ以テ障壁ナク、進取發展ハ自由ナルベキモ

古來交通

機關ナク甚ハダ不便ナリシカ。紀伊汽船會社設立シテ以來、一時汽船ノ定時航

海スルアリ

テ至便ナリシモ、今ヤ會社ノ解散ト共ニ昔日ノ如ク不便ノ状態トナレリ。

二、境界

東北ハ有田郡南廣村ニ、南ハ東西内原村ニ、西南ハ志賀村ニ、北ハ衣奈村 白崎村ニ何

レモ山脈ヲ隔テ、相隣ル。唯西ノ一方ハ深ク入り込ミタル由良灣ヲ控フ。

三、面積

我が由良村ハ、大字畑 中門前 卑横浜 南阿戸 網代 江ノ駒ノ九大字ヨリ成

リ、地形狭長ニシテ其幅最モ廣キ所ニテ、拾町四十八間ニ過キザレドモ、長サハ壹里十

三町

四十間餘ニ達セリ。九大字中最モ大ナルハ大字畑ニシテ、小ナルハ大字江ノ駒ナリ。

総面積ハ

壹千二百四十七町六段六畝二十三歩四合、即チ〇。八方里強ニシテ、日高郡内

一町村平均

方里一。三九方里ニ達セズ。又本郡面積五十一方里ニ比スレバ五十分ノ二

達セズ。其内田

面積二百三十一町歩、畑面積二十五町歩、山林面積九百七十四町七段七

畝歩、宅地面積

五萬六百九十三坪四合トス。

四、地勢

本村ハ東南北ノ三方ハ、峨々タル鹿ヶ背山脈ヲ以テ圍繞セラレタト、西ノ一方ノミ一灣ヲ

抱ケル海村ナリ。大宝元年 至尊御遊幸ノ處ナリ。大正五年マデ一千二百十六年ナリ。

港灣ハ水深ク南海ニ於テ有名ナル良港ニシテ、紀伊水道ノ一要地ナリ。此港ハ日ノ御崎

ノ北方凡ソ九裡ニアリ、其幅十二町 灣入三裡。而シテ蟻島(二五〇呎)ト称スル尖峯

島

ト、港門ノ南方角小浦附近ニアル廣濶ナル露出礁（一ノハヘ）アリテ、港口ヲ蔽フ。

灣頭ニハ

江ノ駒網代、阿戸、横濱アリ茲ニ暴風標アリ。此港ノ北側ニ吹井糸谷アリ、

西北ニ鍋島一

名重ネ山ヲ負ヒ、水深クシテ大艦巨船ヲ容ル、ニ足ル。故ニ暴風ノ

横濱ノ西左右岬海面ニ突出シ、其形勢譬ヘバ牛ノ双角ヲ張ルニ似タリ。由良溪川ノ小流

ハ大字畑水越ヨリ潺湲トシテ西流スルコト、一里二十四町二十七間ニシテ由良港ニ瀉注

ス。タゞ恨ラクハ河川ノ小、且ツ傾斜ノ急ナルトニヨリ舟運ノ便ナキヲ。且ツ陸上ノ交通

モ

便ナラズ。是ヲ以テ有名ナル良港アルニ拘ハラズ、土地繁榮セザルモ他日紀南紀伊

ア、山及山脈

鹿ヶ背山脈ハ概ネ砂岩、硅岩等ヨリ成リ、東西ニ連旦シ志賀村ニ駛走スルモノト、白

崎村ニ駛走スルモノトアルノミニシテ、峻峯ナク其最モ高キ所ト雖モ、海拔三百二十

三メートルトス。故ニ山水ノ美ノ賞スベキモノ鮮シ。タゞ大字中ノ白倉溪ハ□然トシテ

山聳ヘ、□然トシテ谷陥リ、危壁千仞古松倒垂、其絶景秃筆ニテ寫シ難シ。特ニ誇リ

トス

ルハ蘇ノ一新種 *Sphagnum Kiensis* Brth（城本藤太郎氏發見）及ビ我國ニテモ稀有ナ

ル植物

シタキ草ヲ、コノ溪谷ヨリ出シタリ。又同大字中産ノミスミキハ熱帶植物ニシ

テ、我國ニテ

モ産地少キ稀品ニテ、明治四十一年帝國理科大學教授牧野富太郎先生ノ

需ニ應ジ、余ノ

寄贈シタルモノ帝國大學校ノ標本トシテ、永ク保存セラル、ニ至リタル

ハ我郷ノ名譽トス。

イ、河川

本村ニ三小川アリ、最モ大ナルモノハ源ヲ鹿ヶ背山中ニ發シ、山脈ノ趨勢ニ從フテ縦

谷ヲナシテ、大字畑ヨリ西ニ向ヒ流下シ、海ニ入ルモノ之ヲ由良川トス。其流長一里

二十四町二十七間、幅八間、水深二尺トス。一ハ源ヲ由良洞ニ發シ、西流シ海ニ入ル

モ

ノ、之ヲ阿戸川トス。今一ハ江ノ駒ノ東境ヨリ發シ海ニ入ルモノ、之ヲ江ノ駒川ト

云フ。コ

ノ内大ナル由良川ト雖ドモ、地勢狹長ニ山脈ノ急斜峻險ナルヲ以テ舟運ノ便

ナシ。然レド

モ流域狹キモ、夏時ハ水量豊カナルヲ以テ、灌漑ノ利便ヲ得ルコト大ニ

シテ、本村耕地ノ

低地ニアルモノニシテ、此川ノ灌漑ヲ仰グモノ多シ。水力ノ利用ニ

至リテハ、嘗テ水車ノ設

置數ヶ所ニアリシモ、現今ハ火力ヲ用フルニ至リシヲ以テ、水

力ノ利用ハ殆ンドナク、僅ニ

阿戸川ニ一ノ水車アルノミ。

ウ、池

本村ニ於ケル灌漑用潴水池ハ、大小合計八十六個アリ、其中大ナルモノハ栗谷池 白

倉池 寺田大池 水谷池 西谷池トス。栗谷池ハ 大字畑ニアリテ、東西四十五間 南

北五十四間 周囲二百二十七間、白倉池ハ 大字中ニアリテ東西五十二間 南北百十五

間 周囲三百五十七間、寺田大池ハ 大字里ニアリ東西二百一十間 南北五十間 周囲四

十五間、水谷池ハ 大字門前ニアリテ東西七十四間 南北五十三間 周囲二百四十

西谷池ハ 大字阿戸ニアリテ東西四十五間 南北四十四間 周囲百四十九間ニシ

灌漑ノ功益大ナルモノナリ(詳細ハ 卷末ニ掲ク)

エ、海岸

由良港海岸線ノ延長ハ 一里十二町(由良村領ニシテ、深く灣入シ背面ニ鍋山アリテ

水深ク大艦巨船ヲ泊スルニ足ル。海底ニハ岩礁等危険ナク、海運 漁業等ニ於テ利便

ナルコト他ニ類例少ナシ。潮流ハ潮汐干満ノ際ニ起ル海水ノ流動ニヨリ、舟行ヲ妨ゲ

ル、コトナク至ツテ平穩ナリ。

五、地體

由良村大字里ヨリ奥ハ粘土質ナルモ、大字里ノ一部 横濱 阿戸ノ一部 網代ノ如キハ

流水ノ作用ニヨリ、砂洲ノ堆積シテ構成シタルモノニテ、砂七分 粘土三分ノ割合ナリ。

網代ノ海岸五段一步ノ如キモ、近年埋立テ築造シタルモノニテ、阿戸ノ一部中洲ノ海岸

五段五畝二十五歩モ、明治四十四年埋立テタルモノナリ。

六、氣候

由良村ハ 北海道ノ南端ニ位スル日高郡ノ一部ナルヲ以テ、氣候概ネ乾濕寒暖中和ヲ得テ、

四季愉快ナル生活ヲ營ミ得ベシト雖ドモ、冬季ニ於テハ西北風吹キ、且ツ風力甚ハタ強

ク、夏季ニ於テハ東南風吹クモ、風力ハ冬季ノ如ク強カラズ。此両風ノ轉換期ナル三月

九月ノ候ニ至レバ激烈ナル大風襲来ス。其初メハ、フィリッピン群島ノ附近ニ起リテ、

又ハ東北ニ向テ進行シ來ル。其進路ハ約十二條アリテ、此ノ中紀州沖附近ヲ通過

ル多シ。特ニ本村ニ大ナル影響ヲ加フルモノ、進路ハ、大隅ノ佐多岬ヨリ東北

シ來リテ、西牟婁郡田辺附近ニ出ヅルモノニシテ、其平均速力ハ一時間

二凡十七 八哩トス。

常ニ北

スルモノ頗

及

二一

直線ニ進行

シ

ル

ハ

二

凡

十七

八

哩

ト

ス

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

此二期ハ航海者ノ最モ注意ヲ要スベキ月ナリ。就中九月ハ稻ノ成家ニ取りテハ最モ警戒スル所ナリ。

熟期ニ相當スルヲ以テ、農

月ニシテ、最低温度ヲ示スハ二月ナリ。八月ノ平均温度ハ華

氣温ハ一ヶ年中最高温度ハ八

低温度ハ四十二度ニシテ、全年ヲ平均スレバ六十九度ナ

リトス。

雨量ノ尤モ多キ月ハ六・七・八月ニシテ、最モ少キハ十二月・二月ノ交ニシテ、毎年

六月頃梅雨ト称シ、霖雨連リニ亘リ陰鬱ナル天氣ノ續クコトアリ。サレド此雨期ハ農業

上

最モ大切ナル仕付時ナリ。又九月ノ頃ニモ往々猛雨ヲ降ラシ、洪水氾濫シ堤防ヲ破壊

スル

等、慘害ヲ被ムリタルコトアリ。即ち明治二十二年ノ水害、近クハ明治四十四年八

月ノ水害

ノ如キ是ナリ。更ニ降雪及降霜ノ狀況ヲ見ルニ、明治二十二年以來今日ニ至ルマデ、初雪ハ明治三十四

七、變 災

年十二月八日ヲ最トシ、終霜ハ明治三十五年四月十二日ヲ最モ遲シトス。嘉永六年ハ稀ナル大旱魃ニシテ、山田ノ如キハ云フニ及バス、低地ニアル池カヽリ及川カヽリノ水田ト雖ドモ、何レモ白畠トナリ稻ハ枯稿シ收穫殆ンド皆無。タゞ池尻ニテ完全ナル粃種ヲ得タル位ニテ、其慘状譬フルニ物ナキ有様ナリシト云フ。

然ルニ又翌安政元年寅十一月四・五日ノ大地震ハ、世ニ所謂安政ノ大地震ト称スルモノニシテ、本村ノ如キハ加フルニ稀有ノ海嘯アリテ、天地大ニ鳴動シ横濱・網代・阿戸・

之駒ノ如キ、海岸ニアリシ家屋ハ大部分流失セリ。元来由良村ノ内横濱ハ、日高郡ノ

北部ニ

テハ最モ殷賑ナル地方ナリシガ、此ノ震災後非常ニ衰微シタリシモ、其後漸々回復スルニ至

レリ。然ルニ明治十六年ハ古來稀ナル旱魃ニシテ、降雨セザルコト六旬餘ニ

及ビ、炎熱金ヲ

熔カス如ク。池水涸レ田面亀裂ヲ生シ爲メニ收穫皆無トナリ。農民ノ疲

弊困憊、其極ニ達シ

タルヲ以テ、其影響ヲ被ムルヤ大ナリ。其後明治二十一年九月ノ暴

風ノ爲家屋ノ倒レタルモ

ノ六十一戸。翌明治二十二年九月ハ又近古稀ナル大洪水ニテ、

門前 佃堤防及里入路堤防

ノ缺壞シタルモノ五ヶ所、此延長一百六間、田圃ノ損害ヲ蒙

タルモノ三五三間ニシテ、耕地ノ損

害モ亦莫大ナリ。斯クノ如ク瀕々水害ヲ蒙ムルハ、

山林ヲ濫伐シテ赭禿トシタルニヨルカ。

大正元年八月十三日ノ暴風ハ、午前二時四十分ヨリ四時マデ、北東ヨリ起リ東北 東南
 ・西ト殆ド有ラユル方向ヲ吹キ廻シ、コノ間沖ヨリ寄せ來ル怒濤ト衝突シ、益波浪ヲ嵩
 メタリ。蓋シ波ノ高サ同一ニテモ、干潮時二起ルト満潮時二起コルトニヨリ、沿岸ニ及
 高サニ非常ノ差アリ。從フテ被害ノ程度ニモ輕重ヲ生ス。不幸ニモ全年ノ波浪ハ滿
 十三日ニテ、最大風カト最大満潮總テ一時ニ襲來シタル爲メ、網代、横濱新田
 田川筋ハ殆ン
 ト全部 阿戸ノ沿海ノ一部等浸水シタリ。特ニ阿戸中洲ハ最モ慘状ヲ極メ、
 波濤ノ爲メ家屋
 ノ倒壞シタルモノ四戸、其他海岸ノ破壊シタル枚擧ニ違アラス。實ニ安
 政以來ノ大災變ナリ
 キ。

第二編 人文誌

一、沿革

上古ノ事ハ記録ノ傳フルモノナキヲ以テ知ルベカラザルモ、日本書紀云紀元八百六十年
 代(大正五年マテ千六百余年) 神功皇后自新羅還之向京聞忍熊王起師以待之命武内宿
 禰懷皇子(應神) 横出南海泊於紀伊水門皇后南詣紀伊國會太子於日高云々按スルニ此ニ
 紀伊水門トアルハ日高由良港ナラン

其後大寶元年 至尊由良港ニ遊幸シ給ヘリト云フ。故ニ當時既ニ土民アリタルガ如シト
 雖ドモ、確實ナルコトハ詳ナラズ。慶長年間ノ調査ニヨレバ、畑村三十六戸、中村十八
 戸、門前村十八戸、横濱、南七十三戸、阿戸二十五戸(網代、江ノ駒ヲ合シタモノ) 降ッ
 文化年中ノ記録ヲ見ルニ、畑百四戸四百二十五人、中三十四戸百二十九人、門前六十
 二百七十二人、里四十四戸百八十人、横濱百戸四百五十二人、南六十戸二百二十七
 戸百二十六戸四百五十六人、網代九十九戸四百一十一人、江ノ駒二十八戸百八十八人合
 計六百
 六十三戸二千六百六十人アリタルガ如シ。而シテ現今本村ハ日高郡ニ屬スルモ、
 郡中ノ餘戸郷タリシト云フ(本村ハ慶長 元禄ノ頃日高郡ニ屬シタリシガ、
 後海部郡トナリ
 其後明治十二年ニ至リ、郡區編制ノ際日高郡ニ編入ス。其後郷廢シ衣
 奈 由良ノ二莊トナ
 リ、由良ノ莊ハ文治ノ頃蓮華王院ノ領トナリ、其後修明門院 後鳥
 羽院皇后ノ領トナリ、

又高野山金剛峯寺ノ領トナル。降テ天正十三年豊臣秀吉ノ南伐

アルヤ、諸豪ヲ討平シテ悉

ク公邑トナシ、羽柴秀長ヲシテ大和 和泉二国ト共ニ紀伊國

ヲ守ラシメ、後慶長五年淺野

幸長ノ領地ニ属シ、元和五年淺野氏封ヲ安藝ニ移サル、ニ

及ビ徳川頼宣ノ領土トナリ、世々

相傳ヘテ凡二百五十年ヲ經タリシガ、明治二年六月和

歌山藩トシ、全四年七月藩ヲ廢シ全

十一月和歌山縣ヲ置キ、縣内ヲ八區二分チ、更ニ之

ヲ數小區二分テリ。明治十二年大小區ノ

制ヲ廢シ、郡役所ヲ置キ郡内ヲ管轄ス。全二十

二年四月町村制ノ實施セララル、ヤ、由良ノ内

ヲ合シ一村トシ由良村ト称ス。

古 文武天皇 持統天皇ナドノ御時、牟婁ニ赴カセ給フ御經歷ノ地ヲ考フルニ、有田郡

多

廣 湯淺ノ辺ヨリ、御船ニテ由良ノ港ニ到ラセ給ヘリト見ユ。扈徒ノ人ノ和歌ニ由良ヲ

ク詠セリ。ソノ道現今ノ志賀村ノ柏ヨリ、志賀谷ニ踰ユル所ナランカ。又阿戸ヨリ西

池田ニ踰ヘシナルベシ。左ニ由良港ニ関スル、和歌及漢詩ヲ掲ゲン。

全

大寶元年冬十月 太上天皇大行天皇幸紀伊國歌

全

朝開榜出而我者湯羅前釣爲海人乎見變將來

湯羅乃前塩乾爾析良志白神之磯浦箕乎敢而榜動

仲秋賞月于由良港 菊池溪琴

風拂蘭撓王露寒 洞簫警絶水雲間

杳杏々仙鶴尋何處 月白関南第一山

紀の國や由良の港にひろふてふたまさかに多に逢みてしかな

權中納言長方

玉ひろふ由良のみなとにてる月の光をそへてよする白浪

平 重時朝臣

紀の國や由良のみさきの月きよみ玉よせかへる沖津志ら浪

源 師光

前内大臣通

紀の海や由良の港に風たちて月の出しほの雲はらふなり

後小松院

きの海や由良の港の朝ほらけ霞の底に船く、らしも

安嘉門院四條

紀の國や由良の浦かせ靜にてかすむ港に春は來にけり

民部卿爲家

紀の海の由良の戸ある、わたり船われみさきよりいてかひもなし

鎌倉右大臣

うちはへて秋は來にけり紀の國や由良のみさきの蟹のうけ縄

関白

沖津かせ波ふきたて、紀の國や由良の戸わたる夕たちの雲

遊東泉寺詠楓

僧 默洲

霜薄南中紅葉稀 獨憐楓樹映禪扉

霞標近接天台色 雲錦新成織女機

且訝枝々燈火點 又看片々雨花飛

人間縱有停車賞 爭似開窓對落暉

過興國寺拜法燈國師像 僧 法霖

師去知何處高名今已傳 斷碑橫草際靈塔倚松

巔山學維摩 默雲參伽葉 禪登臨極目空盡界三千

興國寺に宿りて明かた鐘をききて 源 令綱

鷺の峰明ぬと告る鐘の音にまとふ心の闇も晴なん

同寺にゆきて花を見て 全

あかずみてくらせる花の木のまより入相の鐘の聲匂ふなり

秋日同諸子遊長谷寺座中楷公見視五瀨人山居詩用其韻賦示寺主明禪

僧 默洲

同袍秋日叩禪扉 寂寞林丘人事稀 習靜原知塵外是 論心寧比世中非 遶
簷雜樹鳴蟬乱 出岫孤雲倦鳥歸 更有瓦爐鴻漸趣 茶烟片々逐風飛

長谷寺にて

本居 宣長

山のおくにおこなふ道やたえざらむか祢の音する雪のふる音

網代の御別業のあとにて 源 令綱

よせかへる波は昔にかはらねど君をぞ志たふ由良の港に

さくら嶋といふ所にて 全

名にしをはぐ春は行くとも此島にちらで櫻の花は匂はむ

定 家

花鳥のにほひも聲もさもあらばあれ由良のみさきの春のひくらし

康 光

浪の上も道ある御代の春風に由良のみさきをわたる舟人

平 政村朝臣

紀の國や由良のみさきに日數へてかすかきりなく玉ひらふなり

左近權中將

由良の戸やなみちのすゑははるかにて有明の月にわたる舟人

宗尹朝臣

紀のうみやいくうらかけてかすむらん由良のみなどの春の曙

藤原 基雄

おひてふくかせにまかせて由良の戸のとほきも志らすよする舟人

平 師光

きの國や由良の岬の月清み玉よせかへる澳つ志ら浪

順 徳 院

櫻咲く山には春もなかりけり由良の岬の明ほの、空

兵衛内侍

秋なから木葉隠もなかりけり由良の岬の有明の月

源 朝臣令綱

玉拾ふ由良の港は長閑にも霞にくもる明ほの、空

おもはすも由良の港にやとりて

泊舟由良の港の浪枕夢もむすはてあかす夜はうし

由良の別業にて千鳥をきゝて

風寒み由良のと渡る月影に行へも志らず千鳥鳴くなり

冬の頃由良の別業へ行けるに久綱伴ひ侍りしに梅花をみて

雪の中に先さく梅を諸共にかさして千代の春もへぬべし

二、大字区劃

本村八畑 中 門前 畢 阿戸 江ノ駒 横浜 南 網代ノ九大字二區劃シ、

畑 ハ中ノ東鹿ヶ背山脈ノ分岐セル溪間ニシテ、三方ハ山脈ヲ以テ圍繞セラレタル地ニシテ、

廣漠ナル山林ヲ有スルモ、古來ノ習慣トシテ牧草ヲ得ルノ目的ニテ、年々火入ヲナセシ

モ、世ノ進歩ト共ニ木材ノ需用頓ニ増加スルニ至ルヤ、植林ノ有望ナルヲ鑑ミ、明治三

十三年二月當時ノ區長小田楠太郎氏外區會議員ノ發起ニテ植林ヲ計劃シ、全三十三年三

月ヨリ全四十四年末ニ至ル十二年間ニ、數萬本ノ植林ヲナセシ爲メ、從來ノ草山變シテ

タル森林トナルニ至レリ。道路ハ羊腸タル小路ナリシガ、明治二十二年熊野街道ヲ

字ヲ縦貫セルヲ以テ、交通上大ニ便利トナリタリシガ、全四十三年ニ至リ遂ニ

莫大ノ資ヲ投シ開鑿シタル道路モ非常ニ荒廢セリ。字ノ幅員ハ東西二十七

テ、慶長ノ頃人家三十六戸ナリシガ、逐年増殖シテ現今ハ實ニ壹百二 十一戸トナレリ。

丹生村大字山野ハモト当村大字畑ヨリ移住開拓シタルモノニテ、上古ハ畑越村ト稱シタリシガ、何時ノ頃

ヨリカ山野ト稱スルニ至リシモノナリト云。然レドモ当村及丹生村何レニモ、古記録ノ存スルモノナキヲ

以テ、詳細ナル事ハ知ルベカラズ。

畑越村ノ件ニ付郡誌編纂員森彦太郎氏ヨリ、詳報ヲ得タルニツキ爰ニ之ヲ増補ス

元禄十一年繪圖御用ニ付書上帳ニハ 山野村猪内川村 大滝川村 三ツノ川村 畑越村右四ヶ村寛永九年

内わけ村ニ成申候御免御定書本内わけ免ニ出申候ト有之『日高鑑ニハ山野四ヶ村畑越村 三ツノ川村

大滝川村 猪内川村ト有 之同書畑越村ノ高百六十八石八斗七升 此町十八町九反三畝八歩 家数四十

二軒 人数百八十三人 寺二軒 宮二社内一社真妻明神一社高土權現ト有之 此高土權現ハコシ權現ト

ムモノナラン? 南紀神社録ニハ光土神社 在 山野村 亦稱鳩串明神祀神末考ト有之 高土トイフ皆宛

テ越畑越ノ越ナルベク 權現ノ意ナルベク亦稱鳩串明神トアルハ鳩串ハ即畑越ノ転訛ナランカ然ラハ

移住ノ時畑ノ或ル社ヲ勧請シタルモノナラン 而テ畑越ナル村名ノ消滅シタルハ享保十二年天田

書ノ日高郡組々村々ノ高書ノ中ニ四百二十五石四斗三升三合山野四ヶ村 内百六十九石九斗一

川 大滝川村 猪内川村ト有之 本村ハ即チ旧ノ畑越ナラン然ラバ元禄ヨリ享保マデノ間 二三十年間ニ畑越ノ

字ニ 畑村民力 組大庄屋 合本村 三ツノ

称ヲ廢シ山野村ト称スルニ至リタルモノナラン?

當字二ハ古來溜池ノ設備ナク、只溪間ノ流水ヲ灌漑ノ用ニ供シ居タリシモ、人口ノ繁殖

ニ随伴シテ、耕地モ激増シ到底山間ノ溪水而已ニテハ、旱害ヲ蒙ルニヨリ地ヲ字ノ東北

隅ニトシ、官費ヲ以テ元和元年溜池(大正五年マテ三百余年)ヲ開鑿ス(當時ノ里正及

等不明)。之ヲ栗谷池トイフ(現今ハ耕地二十八町四段四畝二十八歩ノ灌漑ニ使用

ス。爾

來完全ナル收穫ヲ得シモ、畑及ビ荒蕪地ノ水田ニ變ズルモノ年々増加シタルニヨ

リ、時々旱

害ヲ蒙ムルヲ以テ、明治二十七年當時ノ區長小田楠太郎氏初メ區會議員等之

ヲ憂ヘ嵩置ノ

必用ヲ唱道シ、堤ノ高五尺ヲ増築セバ二倍ノ渚水ヲ得ント地主ノ賛同ヲ得、

全年工ヲ起シ

數月ニシテ成ル。其費實ニ壹千円也。爾後非常ノ久旱ニアラザレバ旱害ヲ

蒙ムルコト殆ント

ナキニ至レリ。是ヲ以テ増築ヲ徳トスルハ勿論ナリト雖ドモ、創始者ノ

位置ノ撰定及ヒ苦心

シテ、拮据經營セラレタル効績ハ莫大ト云フベシ。タゞ惜ラクハ當時

ノ里正ノ氏名不詳ニシ

テ、其傳ヲ得ザルコトヲ。

字ノ東南ニ鹿瀨城趾アリ、余實地ニツキ踏査シタルモ草木鬱茂スルノミ、一ノ考証トス

ルモノナシ。

鹿瀨城趾ハ東西二町半 南北一町三檀ニナレリ。太平記熊野八莊司ノ一二鹿ヶ瀨莊司ト

イフアリ其傳詳ナラズ。此城ハ此人ノ築キタルナルベシ。畠山記曰永享年間南朝ノ餘類、

宇佐美新五郎 田辺六郎 田子太郎 園部太郎 新宮八郎兵衛等二千餘人鹿瀨城ニ楯籠

ル。 十

。 二千餘人籠ルトアルモ鮮詰ニセネバ此人員ノ収マリ場所ナシ 畠山左衛門持國是ヲ退治ス。永享

戊午歲九月(大正五年マテ四百七十九年) 畠山入道鹿瀨山ノ凶徒退治トシテ、同月三

州ヨリ其勢三千餘騎ヲ率ヒ出陣ナシ。紀州鳥屋城ニ入り一日休息シ爰ニテ湯川民部

少輔泰

業 野上左衛門尉安経 淺里山城守時直ヲ以テ、鹿瀨山ノ案内ヲナサシメ、先ツ

手分ヲ定メ

畠山右京亮定重 松倉主膳正満好ヲ大將トシテ、平筑後守菱木七郎左衛門尉

・ 温井若狹太

郎ト三人ヲ具シ、旗本勢ヲ合シ二千八百餘騎、湯川兵部丞光業 野上左衛

門 淺里太郎等

五百餘騎追手搦手三千餘騎、一時二城ニ寄カケタリ。爰ニ凶徒勢宇佐美

田辺ノ輩打テ出テ

双方勇戦不劣スレトモ、寄手ハ大軍城兵如何ニ戦フトイヘトモ、難叶

田辺六郎ヲ初メ田子太

郎 園部新宮モ皆討死ニ及ヒケレバ、惣勢乍チ敗走シ終ニ落城ニ

及ビケル。寄手ハ思フ儘ニ

打勝凶徒ノ首共梟首シテ早々京都へ注進ス。將軍義教公御感

賞アツテ則御書ヲ賜リケル云

紀伊名所圖繪二八楠二郎カ討死セシ湯淺城ヲコノ地ナランカトイヘリ、何レカ正識者ノ是正ヲ待ツ

字ノ南西ニ珠石山長谷寺アリ、創立年月不詳、幽邃ニシテ全山奇石多シ。状奔牛騰馬ノ如ク。其勝名四方ニ噪ク。正應四年三月宝珠一顆ヲ雨ラス、故ニ名ツクト云フ。今『雨珠記』ヲ得タレハ左ニ全文ヲ掲ケン

『雨珠記』

紀國造淑文

正應四年龍集辛卯三月十九日午時紀伊州海部郡由良莊鷲峰山寺住持心公禪師集徒衆陸座說法青冥中忽霹靂一聲於寺之東南畑村箕谷雨宝珠一顆于時有採薇男女十許輩驚雷聲見空中有赤光其勢如大笠順與光消其後有種々音或如多吹法螺或如大打鐘或吹笙如是良久有如黑雲之者零降其勢如車輪其響如波浪之起或似飛泉之落下着山腹之時即大成烟大成響國中一日行程在山埜之人民或聞其響又近邊動搖如地震應時群雉皆鳴其後彼採薇男女等求之不見登山腹見之有物陷崔嵬山腹石土之中以手欲採之太熱不得取爰有一民以鋏繫之下谷見之其形粗円而有小孔片面少平徑二寸其重如金其色青黒似鐵非鐵似石非石無知之者燼氣不止歷一日安置鷲峯山寺畢

植林碑

我畑郷有山林數百町古來委之於菟蕘而不顧郷之有志者惜之欲植樹以爲他日之計唱道大竭遂得郷人之贊同明治三十三年二月始植杉樹數千株爾後年々樹栽今也達數萬株其費實數千円矣他日此樹繁茂伐採日來必可蓄積其所得之者而爲郷之基本財産以圖自治團體之強固是發起者等之志也後之人苟體此志我郷興此樹永榮矣頃日郷人胥謀欲建一碑以表發起者之德囑余文乃勒之以示後生云

明治四十二年冬十二月

翠岳原 胤衛 撰
翠溪原 彦太郎 書

畑ヨリ四隣へノ距離

畑中央ヨリ東内原村大字原境マデ 十八町五十五間
畑中央ヨリ有田郡南廣村大字唐尾境マデ 十三町 十九間
畑中央ヨリ有田郡河ノ瀬境マデ 二十八町三十六間

大字中 ハ由良之内ノ由良之内ノ中央ニアリ、故ニ名ツクト云フ。幅員東西七町二十八間

南北十町四十八間ナリ。此字ハ天明ノ頃人家四十戸内外アリシ由ナルガ漸次減少シテ、

現今ハ僅ニ二十五戸ニ過ギズ。字ノ東北ニ溜池アリ白倉池トイフ。當字ハ耕地ニ比例シ

テ、溜池ノ設備不完全ナリシ爲メ、此年旱害ヲ蒙レリ。中ニモ天和年中ハ久旱ノ爲メ、

村民

非常ニ困憊ノ極ニ達セリ。時ノ里正原楠右衛門直榮之ヲ憂ヒ、白倉ハ溜池ヲ設ケル

ニハ稀ナ

ル良好ノ地ナルヲ以テ、元禄四年官許ヲ得土木ノ工ヲ起シ、二個ノ池ヲ合併シ

新ニ池塘ヲ下

位ニ築ク。現今ノ堤塘是ナリ(工費及延人員等不詳。故ニ今尚ホ池ノ中

央ニ上古ノ堤防ノ

舊跡アリ(之ヲ古堤トイフ)。爾後旱害ニカ、ルコト少ナカリシガ、星

霜ヲ經ルニ從ヒ畑ノ田

ニ變換スネモノ、或ハ原野ノ開拓セラル、モノ遂次増加シタルヲ以

テ、往々旱害ヲ蒙ルニ至

ル。是ヲ以テ文久年中時ノ里正原幸二郎具治之ヲ憂ヘ、該池

ニ嵩置ヲナサバ、十分ノ瀦水ヲ

爲スヲ得テ之ヲ救済スルヲ得ント、地主ト協議ノ上賛同

ヲ得テ、文久二年工事ニ着手シ翌年

春竣成(工費幾許金ヲ要セシヤ不明ナルモ、中村ニ

テ一定ノ負擔ノ外寄附金ヲ募集シタルモ

尚不足ヲ告グルヲ以テ、該池床米ヲ四石ト定メ

之ヲ十三貫五百二十三匁ニ賣却シテ其不

足ヲ充當セリ。是ヲ以テ現今ニ至ルモ年々池

床米トシテ四石ツ、要ス)セルモノニシテ、現今

ハ二十五町九段余歩ノ灌漑ニ使用ス。爾

後稀有ノ旱魃ニアラザレバ、十分ノ收穫ヲ得ルコト

ナレリ(元禄四年ヨリ大正五年マデ

二百二十餘年。

白倉池碑

紀州日高郡中郷有瀦水曰白倉池其當旱天水量小而不足給農田郷民以爲憂焉元禄四年原

楠右衛門直榮雖加工増水量末

池床賣り渡し證文

永代賣り渡し申證文ノ事

右ハ当村白倉池御普請致候處田人中入用難凌候間本行之通床米賣渡代銀髓ニ受取申候処実正也然ル上ハ

只今ヨリ永代本行米無相違相渡可申候尤モ此池ニ付永代御普請並用水溝井セキニ至ル迄修理破損有之

候共永代其元へ少シモ難儀懸申間敷候若障儀出來候節ハ此印形人ハ申スニ及ハズ田人中罷出屹度埒明可

申候爲後日一札如件

文久三年亥十二月 志賀組中村頭百姓惣代 楠左衛門 小兵衛 新三郎 平助 作藏

文吉 文平 新右衛門 久兵衛 善兵衛
中村庄屋 幸次郎
中村肝煎 徳兵衛

小中村 傳太郎殿
右之通り相違無之候 以上

川瀬六之右衛門

此池床米ハ明治十七年頃中井茂助総代今ノ区長ノ時代ニ、原谷楠本恒助ノ周旋ニテ、金參百円ニテ買戻ス事ニ談判整ヒ、田人池掛リノ事ヨリ集金シテアリシハ、同氏ト崎山次郎右衛門ト協議ノ上其金ヲ他ニ流用シタルニヨリ、之ヲ買戻事不能トナリタリ。其後コノコト発覚シタリ。当時米價低落從フテ地價暴落セシヲ以テ、中井茂助ハ反金參十円ニテ池床ニテ約七反斗リ、田地ヲ手放シ之ヲ補充シタルモ、之力爲メ買戻シノ機会失シ、又元ノ如ク年々四石ツ、納メネハナラヌ事トナリシニ、元ノ約束通り

中井

能支旱魃原幸次郎深憾之文久二年大起工増其嵩以猪多量之水除旱害之憂云幸次郎諱具治其先出於正五位千葉之介常胤後裔原美濃守虎胤家世里正性温厚憐下撫恤善至楠右衛門實其曾祖父也今茲戊申中郷之有志憂其功績之湮滅欲勤碑以傳後世請余撰文因録其梗概係以銘曰

漾々其水 農田共通
一郷仰徳 千歲垂功

明治四十一年歲在戊申夏五月上浣

北溟多田英稱清撰并書

中ヨリ四隣へノ距離

中ヨリ東内原村大字原谷マテ

十五町五十四間

中ヨリ衣奈村大字衣奈マテ

三十五町 十一間

中ヨリ横濱マテ

十五町二十 間

大字門前 ハモト大工ノ住居セルヨリ、大工村ト称シタリシガ、大工左近右衛門、大工左

近兵衛等ノ名アリ。今尚字中ニ世々大工ヲ職トスル家アルハ、其子孫ナランカ。然レト

モ其傳ヲ得サルヲ惜ム。興國寺ノ大門(明治二十二年ノ暴風ノ爲メ倒レ、現今ハ礎石ノ

ミ)ノ建立シテヨリ門ノ前ニ富ル故ニ門前ニ改メタルモノナリト云フ。幅員ハ東西五町 四間

南北十町十間ニシテ、慶長ノ頃ハ人家十八戸ナリシガ、現今ハ増殖シテ六十五戸 トナレリ。

佃ハ文化二年ノ時代ニハ、農業ヲ営ム市郎兵衛 同ジク平次郎ト云フ二戸ナリシガ、其

後年月ヲ經過スルニ從ヒテダシク人口モ増加シテ、現今ニテ八十戸ヲ算スルニ至レリ。

字ノ南山ノ麓字カウタイト云フ處ニ古城跡アリ。由良庄左衛門ノ居城トイヒ傳フ。天正ノ頃ノ人ナリトゾ。横濱八幡宮永仁四年ノ棟札ニ、奉行左衛門ノ尉源佐能トイフアリ。

又興國寺ノ縁起ニ此ノ莊ハ、後鳥羽院ノ皇后修明門院御領也。御代官伊王左衛門能茂入道西蓮トアリ、意フニ由良庄左衛門ハ其子孫ナランカ。

字ノ乾ニ興國寺アリ、安貞元年（大正五年マテ六百九十一年）ノ草創ニシテ、無人空曠ノ地ニシテ平坦。南ニ向フテ關ク崇嶺四圍以テ外郭トシ、山勢水流奇絶ト謂フベシ。末尾ニ其沿革等ヲ録セン。

興國寺ノ西方ニ溜池アリ、水谷池ト云フ。何年ノ開鑿ニ係ルカ不詳ナリ。該池カ、リ耕地ハ拾三町八段歩ニシテ、近年時々旱害ニカ、ルヲ以テ増築ノ必要ヲ感シ、地主協議ノ上繼續事業トシテ、七尺増築スルコトニ一決シ、小山儀助・小山孫七ノ二氏ヲ選舉シ、池増築ノ事ヲ委任シ、明治十六年エヲ起シ全二十六年竣成セリ。之ニ要セシ延人員七千五百四十人・工費九百四円八十錢ナリ。此ノ長年月ノ間小山氏等拮据經營劃策、其ノ宜シキヲ得テ完全ニ成効スルヲ得タリ。故ニ爾後旱害ヲ蒙ムルコト鮮ク、十分ノ收穫ヲ得ルニ至レリ。舊記ニヨレバ享和二年（大正五年マデ百十五年ナリ）戊歲五月十一日ノ大雨ノ爲メ、池塘缺壞シ慘状ヲ極メタリト。同所耕地ノ字名ニス山坪トイフモノアルハ、池塘缺壞シテ土砂山積セルヲ以テ、記念ノ爲メ字名トセシモノナリト。故ニ現今ニテモ縦ヒ插苗終了ストモ、五月十一日ニ限り毛付休ミヲシタルコトナシトイフ。

門前ヨリ四隣ヘノ距離

三十三町 九間

全 原谷塚マテ

全 横濱マデ

門前ヨリ畑ヘ

三十三町 九間
十五町五十四間
十四町四十間
二十一町 三間

大字里

八村ノ西端ニアリテ、南北八山ヲ負ヒ、西ニ由良灣ヲ控ヘタル地ニシテ、字ノ内

更ニ三ツニ分ル。横浜 畢 南トイフ。其幅員東西八町 南北五町ニシテ、慶長ノ頃戸 数七

十三アリシトイフ。八幡神社 村役場 巡查駐在所 御坊区裁判所由良出張所 由良郵便電信局 由良村尋常高等小学校ハ此字ノ内横浜ニアリ。

八幡神社西南二ハ第六大区一小区(志賀 高家 池田 由良 衣奈 白崎 柏ハ一小区ナリ)ノ区役所ヲ設置(今ノ由良村尋常高等小学校々地ナリ)。区长ハ原谷村楠本又助 氏就任シ、区内ノ行政事務ヲ執レリ。其ノ後大小区制廃止セラレ、明治二十二年町村制 実施由良之内ヲ合シ、由良村ト称スルニ至レル由緒アル史蹟ナリ(?)。

里ノ東南隅ニ溜池アリ寺田池トイフ。何年頃開鑿シタルモノナリヤ不明ナルモ、今ヨリ八十余年前天保ノ頃六尺ノ嵩置ヲナシタルモノナリ。該池力、リ耕地ハ二十七町三畝ニ

十二歩ニシテ、耕地ニ比シ水量少キヲ以テ旱害ヲ蒙ルコト屢々ナリキ。区长寺田玄太郎 氏之ヲ憂ヒ嵩置ノ計劃ヲナシ、地主ノ協賛ヲ得テ明治三十九年エヲ起シ、爾後年々繼續 シテ修築スルコト八ヶ年、經費二千七百餘円ヲ要セリ。大正二年ニ至リ耕地整理法ニヨ リ請願シテ縣ノ補助ヲ仰ギ、經營スルコト、ナリ大正四年之ヲ竣成セリ。是ヲ以テ十分 瀧水スルコトヲ得ルヲ以テ從來ノ如ク旱害ヲ蒙ルコトナキニ至ラン。字ノ東南ニ古城趾 アリ、記録ノ存スルモノナキヲ以テ不明ナリ。

小坊師峯 城力峯

崎山飛驒守家政廣莊中野村ニ居城ス 子四人一門三十四人家土若干アリ 大永二年九月十八日三好義長阿波淡路ノ兵ヲ率テ當國ヲ攻ムルトキ 郡中由良莊横浜へ着シ門前村ニ押寄セ 郷土寺田

西川 原 玉井等ノ諸士ヲ討シ 興國寺領百姓數百人ニ命シ 池田ノ山小坊師峯ト云フ所ノ樹木ヲ

伐リ拂テ城郭トス 家政之ヲ防カントテ一族郎徒ヲ率テ 原谷村ノ東鞍ノ多和長尾トイフ所ニ城ヲ

築キ義長之ヲ攻ム 數日ノ合戦ニ三男家時討死シ一族多ク討タル 家政四男吉國ヲ率テ十月七日ノ

夜城ヲ出テ熊野路ニ落チ長尾落城ス 義長阿波ニ帰陣シテ小坊師峯ハ其子義繼ニ守ラシム 畠山高

國ノ由ヲ聞テ河内國ヨリ來リ 湯川氏及本國ノ旗本ヲ率テ小坊師カ嶺ヲ落シ 三好氏ヲ西海ニ退

リ 其後家政ハ湯川ノ麾下トナリ廣莊ニ歸住シ 更ニ萩原村ノ東光寺ニ移ルト云(風土記

里ヨリ四隣へノ距離

里ヨリ畑へ 一里 十七町五十三間

全 白崎村大字吹井マデ 二十四町四十四間

全 西内原村大字池田マデ 二十八町四十四間

全 東内原村大字原谷マデ 二十三町四十五間三尺

大字阿戸 ハ上古安都ト書キシ由ナルガ、何時ノ頃ヨリ文字ヲ改メタリヤ不明ナリ。口碑

ニヨレバ往古ハ住民僅ニ六戸アリシノミト。此地三方鹿ヶ瀬山脈ノ支脈ヲ以テ圍繞シ、南

ハ由良洞ヲ隔テ、西内原村ニ連リ、西ハ由良灣ニ向ヘル地ニシテ、東西十二町、南北十町
ナリ。字ノ西南ニ櫻島アリ、法燈國師唐ヨリ帰朝ノ日、杭州ト云フ所ニ錫杖ト袈裟トヲ
忘レ

シニ、錫杖ハ龍ト化シテ萬里ノ波濤ニ游泳シ、袈裟ハ靈龜ノ背ニ負ヒテ此島ニ來レリ
ト云フ。
興國寺ニ於テ
龜ノ故事ヲイヒ傳ヘ年フル松ノ生ヒタル島ナリ。明治ノ初年マデハ旱魃ノトキハ
雨乞ノ祈禱ヲナシ、此島ニテ式ヲナス古例ナリシモ今ハ其事ナシ。近年竹
内藤三郎氏(横濱

ノ出身在大阪ノ人 此島ノ上部ノ山ヲ開鑿シ、多數ノ櫻樹等ヲ栽植セ
リ。蓋シ將來由良村ノ
公園トナス計劃ナリト。

阿戸ノ内網代ハ横濱ノ西北ニ接シ、北ニ山ヲ負ヒ南ハ海ニ面スル地ニシテ、初メ阿戸ヨリ
僅カニ三戸移住シタル由ナレトモ、何レノ時代ナリヤ詳ナラス。傳説ニヨレハ應永年中

(大正五年マデ五百余年) 山名修理大夫義理等名草郡大野落城ノ後、由良ノ内網代ニ來
住スト。降テ慶長六年 大正五年マデ三百十四年^六ノ檢地帳ニヨレハ、人家二十五戸
アリシ

モノ、如シ。元和ノ頃徳川頼宣本國ニ封ヲ受クルヤ、當地ノ風景佳ナル地ヲトシ、
ヲ建テ賜ヒシト云フ、磯山御殿是ナリ。其後漁ノ神 惠比須小祠^六ヲ鎮メ奉リシ
ガ、明治四

十三年神社合祀ノ際此小祠モ今ハ横濱八幡社(合祀サレタ、其趾ヲ存スルノ
ミ。
大字阿戸西谷池ハ阿戸ニテ最モ大ナル池、何年ノ頃開鑿シタルモノナリヤ詳ナラズナ

ルモ、往々旱害ニカ、ルヲ以テ慶應元年庄屋濱崎庄藏氏之ヲ憂ヒ、有志ト協議シ堤ノ高
三尺五寸増築スルコトニ決議シ、同年エヲ起シ數月ニシテ竣成シタリ(之二要シタル延
人
員千二百人、工費三百円ナリ)。未ダ十分トハ云フベカラサルモ、稍旱害ノ度ヲ輕減セ
リ。

阿戸ヨリ四隣ヘノ距離

- 阿戸ヨリ西内原村大字池田マデ 二十九町四十四間
- 全 白崎村大字吹井マデ 二十六町四十五間
- 全 畑マデ 一里二十二町五十三間

江ノ駒 ハソノクマニ隠レタル里ナレハ、古文書ニ江ノ隈ト見ヘタルガ正シキヲ、イツノ頃

ヨリカ言葉ヲ訛リ文字ヲ書キカヘケン詳ナラス。當字ハ三方山ヲ以テ圍繞セラレタル地

ニシテ、東北八山ヲ隔テ、衣奈村ニ、北八永井坂ヲ隔テ、白崎村大字吹井ニ連リ、西八茫
 ル海ニ瀕ス。幅員八東西六町三十間 南北六町六間ナリ。当字ハモト阿戸ノ支郷ナ
 録ノ存スルモノナキヲ以テ詳ナラズ。 レトモ、記

江ノ駒ヨリ四隣ノ距離

- 江ノ駒ヨリ白崎村大字吹井へ 十七町 二間
- 全 衣奈村大字衣奈マデ 三十五町 六間
- 全 阿戸マデ 十三町四十五間
- 江ノ駒ヨリ畑マデ 一里二十六町二十一間

三、戸口

戸口等ノ沿革ヲ詳細ニ記セント欲シ、社寺等ニツキ古記録ノ閲覧ヲ願ヒタルモ、火災ニ
 カ、リ、或ハ津浪ニテ記録ヲ流失シテ、文献ノ徴スベキモノナキヲ以テ知ル可ラザルモ、
 紀元八百六十年代、武内宿禰由良港ニ泊スト云フ記事ヨリ考フル時ハ、此時代既ニ村落
 シタル者ナランモ詳ナラズ。慶長ノ頃ニ戸數百七十余戸、降テ文化年中ニハ戸數六
 戸、人口二千六百六十人アリタルモノ、如シ。茲ニ明治時代最近ノ調査ヲ擧ケ 其概要ヲ示サ
 ン。

最近五年間戸數人口比較表

年 度	戸 數	人 口	内男子	内女子	平均一戸ニ付
明治四十二年	六三〇	三七二九	一八五八	一八七一	五.九
全 四十四年	六五〇	三八一九	一九一三	一九〇六	五.九
全 四十四年	六六一	三四八四	一七六五	一七一八	五.二六
大正 元年	六四五	三五一八	一七八三	一七三五	五.四六
大正 二年	六四八	三六六〇	一七二三	一六三七	五.一八

文化年中現在人口二千六百六十人ヲ、大正二年現在人口三千三百六十人ニ比スレバ、僅
 々七百人ヲ増加スルノミ。又大正二年現在人口三千三百六十人ヲ、五年前即チ明治四十
 二年ノ三千七百二十九人ニ比スレバ、却テ三百六十九人ノ減少ヲ見ル。又戸數ヲ見ルニ
 文化年中ノ六百六十三戸ヲ、大正二年六百四十八戸ニ比スレバ、却テ十五戸ヲ減少セリ。

又大正二年現在戸數六百四十八戸ヲ、明治四十二年ノ六百三十戸ニ比較スレバ、僅々十戸ヲ増加スルノミ。

之ヲ職業別ニスレバ、三百三十三戸ハ本業農家ニシテ、百九戸ハ專業漁業、十戸ハ工業專業家、七十一戸ハ商業專業家、百二十五戸ハ農商兼業、農漁兼業及庶業トス。

出稼人ニシテ外國ニ渡航シタルモノ五十七人ニテ、其方面ハ加奈陀・布哇・合衆國等ニシテ、右ノ内女子ハ六人ナリ。

其職業ハ商八人・工一人・鐵道工夫二人・其他ハ總テ労働ニ従事スルモノニシテ、大正三年内ノ送金高ハ三千八百七十九円九十五錢 此人員二十一人ナリ。最モコハ郵便爲替ニ依ルモノ、ミニシテ、銀行爲替ニ依ルモノ及渡航者ノ携帶シテ歸國シタルモノモアレ

細ナルコトハ不分明ナリ。出寄留ハ男四百八十一人・女四百十二人・計八百九十人ニシテ、主トシテ京阪地方ニ出テ商業ヲ営ムモノ。或ハ織工トナルモノ。下女奉公 ヲナスモノ。其他労働ヲ業トスルモノ等トス。入寄留人ハ男八十一人・女六十五人計

百四十六人ニシテ、大部分ハ労働ニ従事セリ。

出寄留表

年 度	他府縣出寄留		他都市出寄留		他町村出寄留		陸海軍人在營艦者		合 計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
明治四十二年	一四〇	一〇〇	二〇	五	三〇	八	二二	二	一一三

入寄留人表

年 度	他府縣出寄留		他都市出寄留		他町村出寄留		陸海軍人在營艦者		合 計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
全 四十四年	一四二	一〇二	一五	一〇	二五	八	三二	二	一一〇
全 四十四年	一二一	一六二	八一	七七	一二	二八	二四	二	二六七
大正 元年	一三二	一七〇	八五	七九	二八	一六	二五	二	二六五
全 四十四年	二二五	二五四	八一	九二	五二	四五	三四	三	四二五

年 度	他府縣入寄留		他都市入寄留		他町村入寄留		合 計
	男	女	男	女	男	女	
明治四十二年	七	三	一五	一八	三〇	二五	五二
全 四十四年	一〇	五	二〇	一五	三〇	二八	六〇

全	四十四年	一	四	七	五	二八	二一	三六	三〇
大正	元年	五	九	七	五	二八	二一	四〇	三五
全	二年	一六	一一	二四	二三	四一	三一	八一	六五

現今外國二渡航シアル男女五十七人ノ内、五十二人ハ合衆国ニ、五人ハ布哇ニアリ。本村ニテ始メテ渡航シタルモノハ、明治十八年大字門前岡常吉氏ヲ以テ嚆矢トス。爾來逐年増加シタリシガ、近年排日熱ノ爲メ渡航手續至難ナル爲メ、呼ヒ寄セ等ノ外渡航スルモノナシ。

四、官衙公署

明治初年頃マデハ庄屋制ニシテ本村ハ志賀組ナリシガ、明治四年七月廢藩置縣、同七年日高郡第六大区一小區(志賀・高家・池田・由良・白崎・柏八小區ニ属ス)ト改称シ、區役所ヲ由良村里字北垣内六六番地(現今學校所在地)ニ設ケ、區長ニ原谷村楠本又助、戸長ニ中村原楠右衛門氏就任セリ。其後大小區制廢セラレ、ヤ、明治十二年四月畑・中門前ノ三村合併シ、中村三一四番地原新五郎氏宅ニ戸長役場ヲ置キ、畑村後藤重郎兵衛氏戸長トナル。外二里 横濱 阿戸 網代 江ノ駒ヲ合併シ、横濱ニ戸長役場ヲ置キ全村江川長兵衛氏戸長トナル。然ルニ全十五年阿戸 網代分離シ、阿戸ニ更ニ戸長 役場ヲ設ケ、全村大谷傳之丞氏戸長トナル。明治十七年里村外五ヶ村(畑 中門前 阿戸 江ノ駒 戸長役場ヲ横濱南垣内二一六番地ニ設ケ、志賀村ノ人湯森好助氏戸長トナル。)

明治二十二年四月町村制實施ニ際シ、由良村役場ヲ大字里北垣内一二二番地ニ置キ、北村楠松氏村長一、原楠右衛門氏助役ニ當選セリ。其間戸長 村長等ニ就職セルモノ左ノ如シ。

年	月	日	職名	退職年月日	氏名
明治	七年	月日不詳	一小区々長	年月日不詳	原谷 楠本 又助
全	十六年	三月三十一日	一小区戸長	明治十年四月二日	原 楠右衛門
全	十六年	三月三十一日	畑中門前戸長	全十六年月日不詳	後藤 重郎兵衛
全	十二年	月日不詳	里阿戸 江ノ駒戸長	年月日不詳	江川 長兵衛
年月日不詳			全戸長		北村 楠松
明治	十五年	十月	阿戸戸長	明治十七年三月	大谷 傳之丞
全	十七年	四月	戸長	全二十二年三月	志賀村湯森 好助

全	二十二年五月十七日	村長		北村 楠松
全	二十六年五月十七日	全	全二十六年七月九日休職	全 人
全	二十七年五月二十一日	村長代理	全二十七年五月二十日	助役 原 楠右衛門
全	四十年八月七日	村長	全四十年七月十九日	北村 楠松
全	四十三年四月十一日	全	全四十三年四月二日	後藤 重郎兵衛
全	四十四年三月十一日	全	全四十四年四月十八日	原 彦太郎
全		全		坊岡 寅之助

由良郵便電信局

郵便局ハ明治ノ始メハ由良郵便取扱所ノ名ニテ、横浜ノ中野佐兵衛氏自ラ僅力ニ書状

新聞紙等ヲ配達スルノミ。其後幾多ノ変遷ヲ經テ明治十八年五月十日ニ至リ、郵便

貯金ヲ開始シ、全二十九年七月一日小包郵便ヲ開始シ大ニ便利トナレリ。全三十四年

二月一日由良郵便電信局ト改称スルト同時ニ、電信業務ヲ開始スルニ至ル。降テ大正

三年二月六日ヨリ電話ヲ開始シタルニヨリ、通信上一層ノ便益ヲ加フルニ至レリ。

同局沿革誌ヲ掲ク。

左ニ

◎由良郵便電信局業務沿革誌

第一 局ノ改廃及移籍

明治八年十二月一日置局。里村郵便局ト称ス。全三十四年二月一日電信事務ヲ開始シ、由良等郵便電信局ト改称ス。

第二 局ノ位置

明治不詳年月日ヨリ不詳年月日マテ 里村二百四十三番地、全不詳年月日ヨリ明治十九年七月三十一日マデ由良村大字里

全 三十四年二月 一日ヨリ由良村大字里百十三番地

第三 局長

明治不詳年月日 横浜ノ中野佐兵衛氏由良郵便局取扱役申付ラル(コノ時代

ハ信書等極メテ少ナカリシ爲メ中野氏ハ自ラ集配ヲナセリ)

全 不詳年月日 里村郵便局ハ四等取扱役ニ申付ラル

全 不詳年月日 江川長兵衛由良郵便局長ニ任命セラル。全氏ハ明治二

十三年八月二十七日死亡

全 二三年八月二十七日 龜井楠太郎氏ハ由良郵便局長代理ヲ命セラル

全 二四年一月二八日 日高郡書記高岡清太郎由良郵便局長ニ任命セラル

全 三四年二月一日 高岡清太郎ハ由良郵便電信局長ニ命セラル

全 三六年九月二七日 高岡清太郎ハ依願由良郵便電信局長ヲ免セラル

全 三六年九月二七日 龜井楠太郎ハ由良郵便電信局長ニ任セラル

大正 八年二月 八日 龜井楠太郎ハ依願由良郵便電信局長ヲ免セラル

大正 八年二月 八日 原彦太郎ハ由良郵便電信局長ニ任セラル

大正十二年四月 四日 原彦太郎ハ死亡ニヨリ由良郵便電信局長ヲ免セラル

大正十二年六月 六日 原胤衛ハ由良郵便電信局長ニ任命セラル

昭和 三年九月二七日 由良郵便電信局長ヲ依願本職ヲ免セラル

昭和 三年九月二七日 原慶吉ハ由良郵便電信局長ニ任命セラル

第四 郵便区 年月不詳 左ノ各村ヲ以テ由良郵便区トス

里村 阿戸村 門前村 中村 畑村 江ノ駒浦 吹井浦 神谷浦

大引浦 小引浦 衣奈浦 三尾川浦 戸津井浦

明治二十二年四月一日ヨリ町村制施行ノ爲村名改称ニヨリ区内村名ニ異動ヲ生ス

由良村 畑村 中村 門前村 里村 阿戸村 江ノ駒浦

白崎村 吹井浦 神谷浦 大引浦

衣奈村 衣奈浦 小引浦 戸津井浦 三尾川村

明治二十五年四月一日ヨリ御坊局区内東内原村大字原谷ヲ市外ニ組替ラル

全四十四年四月二十六日ヨリ東内原村大字原谷ヲ御坊局区内ニ組替ラル

第五 市内外区劃 明治十七年九月二十五日ヨリ全二十二年四月一日マテ左ノ如シ

市内 里村 阿戸村 市外 門前村 中村 畑村 江ノ駒浦 吹井浦 神谷浦 大引浦 小引浦

衣奈浦 三尾川村

明治二十二年四月一日ヨリ町村制施行ノ爲メ、左ノ通異動ヲ生ス

市内 由良村大字里 同村大字阿戸

市外 由良村大字畑 全大字中 全大字門前 全大字江ノ駒

白崎村大字吹井 全神谷 全大引

衣奈村大字衣奈 全大字小引 全大字三尾川

明治廿五年四月一日ヨリ東内原村大字原谷ハ市外ニ組入ラル

全四十四年四月廿六日ヨリ東内原村大字原谷ハ御坊局区内トナル

第六 集配区劃

其一 市内

明治不詳年月日ニ区二分ツ、即チ左ノ如シ

第一区 由良村大字里ノ内横濱 全南 大字阿戸

一週里程二里十七町一三

第二区 小字里 一週里程 一里七町一六

合計 三里二十四町

明治年月不詳一區ニ区ノ区別ヲ廃ス、一週里程三里二十四町

全四十四年四月二十六日ヨリ、小字里ヲ市外地一區トセラル

第七 集配区劃

其二 市外

明治不詳年月日ヨリ全二六年三月三十一日マデニ区二分ツ。即チ左ノ如シ

第一区 大字畑 全中 全門前 東内原村大字原谷

三里三十五町

第二区 大字江ノ駒 白崎村大字吹井 全神谷 全大引

衣奈村大字衣奈 全小引 全三尾川

六里十三町

合計 十里二町

明治二十六年四月一日ヨリ二回集配地設定ノ爲メ、左ノ通り改正セラル

一回集配線

第一区 畑 中 門前 東内原村大字原谷

三里三十五町

第二区 衣奈村大字三尾川

二回集配線

第二区 白崎村 衣奈村(三尾川ヲ除ク

四里十六町

明治四十年十一月十六日ヨリ増回地變更ノ爲メ集配区劃ヲ左ノ通改正セラ
ル

一度集配地

第一区 東内原村大字原谷字尾寄原ヨリ衣奈村大字三尾川ニ至ル

十二里

第二区 衣奈村大字衣奈法華寺ヨリ由良村大字江ノ駒ニ至ル

四里十一町

二度集配地

第一区 衣奈村大字衣奈字曾根出ヨリ白崎村大字吹井字糸谷ニ至ル

四里三町

明治四十四年四月廿六日ヨリ郵便区劃組替及市内外区劃變更ノ爲左ノ通り
改正

一度集配地

第一区 由良村大字江ノ駒ヨリ衣奈村大字小引字戸津井ニ至ル

四里四町

第二区 由良村字大江ヨリ衣奈村大字三尾川ヲ經テ由良村大字里ニ至

ル 七里三十四町

二度集配地

第一区 白崎村大字吹井字糸谷ヨリ衣奈村大字衣奈字西出曾根出ニ至

ル 四里四町

第八 集配度数

其一 市内

明治廿一年八月一日ヨリ全廿四年九月三十日マデ集二度配二度

明治二十四年十月一日ヨリ集配等級ヲ七等ニ改メタル爲メ集三度配三度

第九 集配度数

其二 市外

明治年月不詳ヨリ全廿六年三月三十一日マデ全部一度

全二十六年四月一日ヨリ左ノ各村ヲ二回地ト定メラル

糸谷 神谷 大引 衣奈 戸津井 目的地 江ノ駒

吹井 小引 經過地

全四十年十一月十六日ヨリ左ノ通り二回地ト改正サル

衣奈ノ内曾根出 全西出 大引ノ内出島 全中出 全西出

神谷(目的地)

衣奈ノ内上出 全法華寺 全小引 全戸津井 吹井 糸谷 大田和

江ノ駒 經過地

全四十二年七月五日市外集配増回調書ヲ大阪局管理課ニ提出セシニ、集配

線路圖誤謬ノ旨ヲ以テ引換ラレ、左ノ二字ハ二回地トナル

衣奈村大字小引字戸津井 白崎村大字吹井字糸谷

第十 遞送

置局以来不詳

明治二十年三月三十一日 湯淺 由良間小線路廢止

全 年四月 一日 由良 御坊間持戻便ニ改正

全 二十三年三月三十一日 由良 御坊間持戻便廢止

全 年四月 一日 由良 御坊間交換便開施

全 廿四年四月 一日 和歌山 田辺間中線路中、湯淺 御坊線路開施

全 由良 御坊間ノ内由良 比井線路廢止

全 廿五年四月 一日 比井 由良間ノ小線路開施

全 年九月 三十日 比井 由良間小線路廢止

全 廿八年七月 一日 御坊 由良間持戻便二改正

全 三十年三月 一日 湯淺 由良間小線路開始、片便人夫送二等速度

全 年十一月二十日 湯淺 由良間小線路開始人車送

全 年十一月二十日 由良 御坊間小線路片便ノ歸便廢止

全 年五月二十一日 由良 御坊間小線路片便開始、人車送二等速度

全 年五月十六日 由良 御坊間小線路片便ヲ持戻便二改正

全 年十月十九日 湯淺 御坊間同斷

全 年十月十九日 由良 御坊間三等線路持戻便人夫送二改正

全 年十二月十五日 湯淺 御坊間同斷

全 年十二月十六日 湯淺 由良間片便廢止

全 三五年 六月三十日 淺間人夫送以一等速度小包併送

全 年七月一日 前同斷廢止

全 年七月一日 和歌山 田辺間通常道路一等線路上下各便人車送 湯

全 年七月一日 淺間人夫送 箕島 田辺間下一号及上一号八小包併送

全 年七月七日 二改正

全 年七月七日 由良 御坊間三等線路片便開始、人夫送二等速度

全 年七月七日 廢止

全 年七月十一日 湯淺 由良間三等線路片便開始、人夫送二等速度

全 年七月十一日 前同斷廢止

全 年七月十一日 和歌山 田辺間通常道路二等郵便線路順送便、上二便

全 三十七年 九月 二日 夫送

全 年九月二日 和歌山 田辺間二等線路順送上下各一号便廢止

全 年九月二日 御坊 由良間持戻便開設、人夫送二等速度

全 三十八年十二月 六日 和歌山 田辺間二等通常郵便線路順送便、湯淺 由良

間三等速度、由良 南部間二等速度二改正

- 全四十 年一月二十一日 由良発下一号八御坊発上リヲ湯浅発 下二号八由良発、上リヲ持戻ノ特別規定ヲ設ケラル
- 全 年二月 一日 由良御坊間三等通常郵便線路、往復便人夫送二等速度、御坊由良間差立之局轉換本線開設
- 全 年六月 廿五日 由良御坊間往復便差立元局ヲ轉換ス
- 全四十一 年十一月廿五日 同上(由良始点トナル)
- 第十一 小包遞送
 - 明治廿六年七月一日 和歌山 田辺間小包郵便線路開設、順送便人夫送
 - 全 廿七年十月一日 ヨリ田辺発上リ便廃止、更ニ通常郵便中線上リ一号便ト併送ニ改正
- 全 廿九年七月一日 ヨリ上下便トモ遞送方人車送リトナル
- 全三十一 年四月十五日 和歌山 田辺間小包郵便線路廃止
- 第十二 爲替
 - 明治二十三年七月十六日 開始
 - 全 二十五年七月十日 外国為替開始
 - 全 三十四年二月 一日 電報爲替開始
- 第十三 貯金
 - 明治 十八年五月十日 開始
- 第十四 小包
 - 明治廿 九年七月 一日 開始
- 第十五 電信事務
 - 明治三十四年二月 一日 開始
- 第十六 電信回線
 - 明治三十四年二月 一日 外國電報開始

改廃変更年月日	回線名	通信法	接続局所名	摘要
全三十七年七月十五日	和歌山比井	全	和歌山湯浅御坊比井	回線変更
明治三十四年二月一日	和歌山田辺	モールス単信		

第十七 電報配達区劃

明治三十四年二月一日ヨリ、同四十年八月三十一日迄ノ配達区域左ノ如シ
 由良村一円・白崎村大字吹井(直配達区内・白崎村)大字吹井ヲ除ク・衣
 奈村一円・東内原村大字原谷 西内原村大字池田・比井崎村大字志賀字柏 全
 字尾井(直配達区外)

全四十年九月一日区外志賀村大字志賀字柏 字尾井ヲ直配達区内ニ編入ス
 全年月日区外西内原村大字池田ヲ割キ、御坊局区内ニ編入ス

第十八 受取所
 第十九 郵便切手賣下人

免許年月日	廃業年月日	賣下人住所	氏名	市内外別
明治廿三年五月二十九日	明治廿五年十一月二十三日	日高郡由良村 字阿戸一九三番地	塩田 傳兵衛	市内
全二十五年三月二十八日	全三十一年十一月七日	全 八五六番地	石橋 傳吉	"
全二十六年一月二十一日		全 一九二番地	塩田 栄太郎	"
全三十一年十一月二日		全 七三〇番地	楠山 源兵衛	"
全二十三年五月二十九日	全三十六年十一月二十三日	全 大字中 二五九番地	原 幸三郎	市外
全 年 五月二十九日	全二十七年二月二十四日	日高郡白崎村大字吹井七〇番地	寺岡 善八	"
	明治廿四年一月十五日	全 大字神谷二〇九番地	岩崎 喜十郎	"
	全三十年四月三十日	全 白崎村大字大引七一八番地	川口 米太郎	"
		全 衣奈村大字小引 二八番地	中川 彦三郎	"

免許年月日	廃業年月日	賣下人住所	氏名	市内外別
明治二十五年三月二十八日	全四十四年四月二六日御坊局区内ニ組替	全 由良村大字畑 三〇一番地	後藤 良藏	"
全二十六年五月二十三日	全 全 四十一一年三月四日	全 白崎村大字大引七一八番地	川口 ミツ子	"
全二十六年二月十六日	全三十一年九月二日	全 東内原村大字原谷三七番地	寺本 弥三郎	"
全二十六年七月十三日		全 衣奈村大字小引四七三番地	西出 右衛門	"
全二十七年十月十一日	全四十四年四月二六日御坊局区内ニ組替	全 東内原村大字原谷七八三番地	楠本 恒助	"
全三十一年五月一日	全三十四年十二月十日	全 白崎村大字神谷一三八番地	中野 夕工	"
全三十四年十二月十日		全 衣奈村大字小引 二八番地	中川 種久	"
全三十四年九月三日	全四十四年四月二六日御坊局区内ニ組替	日高郡 東内原村大字原谷二二六番地	古澤 新吉	"
全三十六年十一月二十六日		全 白崎村大字神谷一三二番地	福岡 萬一郎	"
全三十八年三月十八日		全 衣奈村大字中 二五九番地	原 彦太郎	"
全三十九年十一月七日	全四十四年二月一九日ヨリ代換リ	全 由良村大字門前五二七番地	池田 豊松	"

第二二 業務統計 其一

(表をそのまま写した方が理解しがたい)

年次	局員数	所属員数	経費額	集配料額	通送料額	切手賣下高
全三九年	全	全	四七六	一五二三	二四六一	六一九一
全四十年	全	全	四七一	一四九六	二五五七	八五一四
全四十一年	全	全	四四七	一五九	二三二〇	八五八八
全四十二年	全	全	四五一	一六三	二三三四	八六三二
全四十三年	全	全	四三二	一五八五	二三四一	八六七九
全四十四年	全	全	四二一	一五一	二一三九	八二一一

年次	局員数	所属員数	経費額	集配料額	通送料額	切手賣下高
明治二十三年			三九七〇	九二〇〇	一一二〇〇	二三〇二〇七
全二十四年			五八五〇	八七〇〇	三八〇〇〇	二八一三一七
全二十五年			六六八〇	九〇〇〇	三一八〇〇	三五二二八二
全二十六年			九二八五	一一五〇〇	四〇五〇〇	四五九七三四
全二十七年			八九八五	一一九〇〇	四三六九八	五〇二九一六
全二十八年			一〇三九〇	二二一〇〇	四三二四〇	五八七六四〇
全二十九年			一〇六六〇	一三七〇〇	四〇六〇〇	六九四八七八
全三十年			一六一四〇	一五七〇〇	六一一〇〇	七五七一四
全三十一年			一三二八〇	二〇七〇〇	七五四〇〇	七七九〇六四
			一九一九〇		六二八〇〇	

年次	局員数	所属員数	経費額	集配料額	通送料額	切手賣下高
全三二年			二二一四〇	二三四〇〇	五七〇〇〇	一〇三七四七五
全三三年			二六〇四〇	二三七〇〇	七一四〇〇	一九二〇一五
全三四年	三	九	二七〇〇〇	三三〇〇〇	八五三〇〇	三三〇二五五
全三五年	"	"	五六九二〇	三九五六〇	四一〇〇〇	一七五〇九四一
全三六年	"	八	五五六六〇	三七六二〇	四九八〇〇	一七九七三五五
全三七年	"	"	四一六四〇	三六二四〇	四三九〇〇	一八六九六六〇

年次	通常郵便物配達数	小包郵便物配達数	爲替内拂金額	國內郵便	外預國金爲替額
全二十九年	八八二五五		四五二六九八六	六二一六七七二	
全二十八年	六四一四九		四六一四二二〇	四七五二五四四	
全二十七年	五三四四七		四〇一六三七四	二一〇二〇八五	
全二十六年	四六〇九〇		二九五六八一六	一五二六八五四	
全二十五年	三八三二六		二四六四八〇五	一八八六九一四	
全二十四年	三二三〇七		一六一五六〇八	六四三三七四	
全二十三年	二六八九九		六七五五〇七	四五一六〇五	
全二十二年	二四六九五			一二四七一〇〇	
全二十一年	二〇三〇二			六一二三〇〇	
全二十年	一六六五四			二七五八二〇	
全十九年	一四九四一			二四二八一〇	

年次	通常郵便物配達数	小包郵便物配達数	爲替内拂金額	國內郵便	外預國金爲替額
明治十八年	八八三二			二三一四〇〇	

第二三 業務統計 其二 畧記

年次	通常郵便物配達数	小包郵便物配達数	爲替内拂金額	國內郵便	外預國金爲替額
全四四年	"	"	五	十一月 四八八〇〇 十二月 五二二〇〇	三五六〇〇
全四三年	"	"	"	九月 四八九〇〇	三五六〇〇
全四二年	三		"	一月 四五二五〇 六月 四三〇九〇 七月 四二四七〇	三五六〇〇
全四一年	二		"	二月 四四六一〇 七月 四三九五〇	二五〇〇〇
全四〇年	"		六	七月 四三三八〇 七月 三七五六〇	二五〇〇〇
全三九年	二		"	七月 三七五八〇 七月 三七五六〇	二五〇〇〇
全三八年	"		七	二月 二六〇〇〇 一月 二六〇〇〇 十二月 二七〇〇〇	二五〇〇〇

全	三十一年	八三九六七			五三三〇二五一			三五五三一六六		
全	三十二年	八六七三六			四九九一五〇一			三五二二〇六一		
全	三十三年	八二四九一			八八二一六五〇			二八三〇一八七		
全	三十四年	八一九一一			一三七二〇九三九			二九四四〇七四	四七五〇六五	
全	三十五年	九七九一三			一七六七四二二〇			二一六四八四〇		
全	三十六年	一〇七七九六			二一〇四三四七			一八六四九六五		
全	三十七年	一〇二二九八	九〇三		一八七六六二七二			二六一七〇〇四	六二三〇	
全	三十八年	一〇六八八五	九四七		二〇九二四六七三			二八二四〇四〇		
全	三十九年	一三六八七六	一一九〇		二九三一八〇六一			三四九六八五六		
全	四十年	一四二四〇二	一三九三		二九三七四四七五			六五二六一九一		九一九四五二
全	四十一年	一六八六四〇	一六一五		三五七六〇〇〇三			九六七八七六六		三二五五四七一
全	四十二年	一六二八六九	一六六一		四一二九七四一九			九六四三六八一		二六一七五七六
全	四十三年	一五三二九六	一六四二		二九七九〇四八〇			一二二六二五六五		一一七八七〇八六
全	四十四年	一五五一五二	二〇〇三		三二八三五七〇〇			一四二九八一七一		一二五五四九五六
全	四十四年	一四七六七七	一九七三		三一八八九九〇			一六九九九一九一		? 一四〇六九四

御坊区裁判所由良出張所

御坊区裁判所由良出張所ハ、明治二十六年六月二十三日司法省令第十號ヲ以テ設置スルコトナリ、全年十月三十日由良村大字里二百番地ノ民家ヲ、無期無賃ニテ借り受

ケ廳舎トシ、同年十一月十日ヨリ開廳セリ。然ルニ同家屋ハ民家ニ修繕ヲ加ヘタルモ

ノニテ、甚ハダ不便ナルノミナラズ腐朽セルヲ以テ、地ヲ大字里百七十一番地ニトシ、廳舎ヲ新築シ、同四十三年三月十八日コノ新廳舎ニ移轉シタルモノナリ。

其間本所ニ在勤ノ書記氏名等左記ノ如シ

就任	年	月	退職	年	月	氏名	
明治二十六年	十月	一日	明治二十七年	十一月	十三日	関川 輝幸	
全	二十七年	十一月	全	二十八年	一月	三日	伊藤 達五郎
全	二十八年	一月	全	三十一年	八月	十九日	森 正教
全	三十二年	十二月	全	三十二年	十二月	二十六日	田中 直次
全	三十九年	三月	全	三十九年	三月	二十二日	矢田 政次郎
全	四十四年	一月	全	四十四年	一月	一日	野田 丑楠
全	四十四年	一月	全	四十五年	四月	十日	濱田 耕太郎
大正	元年	四月			十一日	能見 象藏	

御坊警察署由良村巡查部長派出所

明治七年御坊捕亡吏分配所設置ト同時ニ、由良村ノ里ニ出張所ヲ設置ス。同七年十二月捕亡吏ヲ警邏ト改称シ警邏出張所ト改メ、同八年七月十三日羅卒ト改メ羅卒出張所トス。同八年十二月羅卒ヲ巡查ト改称シ警察出張所ト改メ、同十年一月十八日里ノ出張所ヲ警察屯所ト改称シ、同年十月屯所ヲ分署ト改ム。里分署ハ明治十二年二月人民ノ献金ヲ以テ、大字里字宮ノ前二百四十四番地ニ敷地ヲ設定新築セリ。同二十年四月分署撤廃セラル。同二十二年ニ至リ前記旧分署廢止ト同時ニ、由良村巡查部長派出所ヲ設置セラル。分署當時ニ在リテハ署ノ所在地巡查ヲシテ担当セシメアリシ力、分署巡查部長派出所新設ト共ニ、同廳舎事務室内一部ニ由良村受持巡查駐在所ヲ併置ル。

五、經濟及財政

自治體ハ其ノ固有ノ自治行政事務ト、國家ヨリ委任セラレタル事務ヲ履行シ、生存發達ノ目的ヲ達センカ爲メニ、一定ノ經費ヲ要ス。故ニ之ヲ支辨センカ爲メニ、毎年收入

支出ノ豫算ヲ調整スルヲ要ス。我が由良村ノ町村制ノ初メテ實施セラレタル當時ノ財政歳出總額七百四十三円六十六錢六厘ニ過キサリシガ、明治四十四年ノ如キハ、一躍八十三円五十四錢六厘ノ巨額ニ達セリ。就中教育費ハ其大部分ヲ占ム。尚ホ今後ノ發達ニ伴ヒ、村歳出入益々膨張スルナラント信ス。歳入ノ主要ナル種目ハ、地價割ヲ第一トシ戸別割 雜種稅等ニシテ、歳出ノ主ナルモノハ教育費ナリトス。

明治十六年ハ古來未曾有ノ旱魃ニテ收穫皆無ナリシ爲メ、農家ノ困憊其ノ極ニ達シ、納稅及ビ肥料支拂ノ資力ニ窮シ、豪家ニツキ高利ナル借財ヲナセリ。蓋シ當時ハ現今ノ如ク金融機關完備セサルヲ以テナリ。然ルニ其後明治十九年ニ至リ地所ノ價格暴落シ、耕一段歩ニ付三十円内外、山林ノ如キハ一円内外ニテ賣買スルニ至レリ。是ニ於テ債務財ノ増加スルニ拘ハラス。地價ノ暴落シタル結果地所ヲ賣却セサルヘカラサルニ至ルモノ少ナカラサリキ。然ルニ明治二十五年頃ヨリ米價漸次騰貴シ、農家ハルヲ以テ、明治二十七八年ニ及ヒ全三十七八年ノ如キ古今未曾有ノ大戦役アリシニモ拘ハラズ格別ノ變動ナカリシ。

本村々民ハ概シテ云フトキハ農ヲ業トスルモノ最モ多ク、漁業之二次キ商工ニ至リテハ、僅ニ其一部ニ過キス。故ニ收入トシテハ米 麥等ノ農産物 林産物并ニ魚類等ニシテ、他ニ輸出スルモノハ米 麥ヲ初メトシ柑橘類 魚類 薪炭等ニシテ經濟ノ状態ハ概シテ平 静ナリ。然ルニ本年ハ米價暴落スルニモ拘ハラズ、他ノ諸物價ハ之ト反比例ニ却テ騰貴シタルモノ多ク、爲メニ農家ノ困憊甚タシ。政府ニ於テモ之ガ救濟策トシテ、米價調節案 ヲ出シタルモ格別ノ効果ナシ。今左ニ中産ノ農家ニツキ收支計算表ヲ作り左ニ掲ク。

中産農家經濟狀態調査表

一、家族 老父一・戸主 妻 男兒二・女兒一 計六

一、年齢 老父七十一・戸主四十 妻三十六 長男十六 二男十二 長女八

所有財産

一、田 六段五畝歩 時價 二千四百五十円

内 譯

一、本田 三段三畝歩 時價 千六百五十円(水 旱害ニカ、ラ又優良ノ地)

一、山田 三段二畝歩 全 八百円(山田トイフモ水 旱害ノ憂ナク山田中ニテ一等地)

一、畑 五畝歩 全 百五十円

一、宅 百二十坪 全 二百四十円

一、山林 一町歩 全 二百五十円

一、本宅建物 一棟 全 三百円

一、納屋 一棟 全 百五十円

計 三千五百四十円

一ヶ年ノ收入

一、米 七石九斗二升 本田三段三畝歩 一段二付二石四斗

一、全 五石一斗二升 山田三段二畝歩 一段二付一石六斗

計 拾三石四斗也

内飯料 五石四斗引

此七石六斗四升

此價 九十九円三十二銭 一石十三円替

一、麥 四石六斗二升

内飯料 一石八斗引

此二石八斗二升

此價 二十三円九十七錢 一石八円五十錢替

合計 百二十三円二十九錢也

一、副業ヨリ生スル収入

一、蜜柑 柿 桃 大豆 蠶 豆 蔬菜等ノ収入アレドモ、肥料及ヒ力耕費ヲ要

スルノミナラズ、大部分ハ自家用トナルモノナレハ別ニ収入ナシ。

一ヶ年ノ支出

一、地租 六円五十二錢五厘

一、村税地租割 二円九十七錢五厘

一、縣税戸別割 二円九十七錢

一、縣税地租割 六円五十五錢五厘

一、村税戸別割 十六円三十三錢

一、村農會費 一円七錢五厘

一、字協議費 三円十二錢

一、肥料 三十一円

一、魚類 五円十錢

一、食塩及油 六円五十錢

一、酒及烟草 十五円六十錢

一、薬價 三円五十錢

一、被服費 十一円五十錢

一、吉凶贈答費 四円五十錢

一、雜費 三十七円五十錢

計 百五十七円五十五錢

由良村歳入調査表

科

目

明治三五年度

全三六年度

全三七年度

全三八年度

全三九年度

第一款	財產ヨリ生スル収入					
第二款	村有土地貸付料					
	手数料	一五三〇〇	三〇九〇〇	二三八〇〇	二六三〇〇	三九七〇〇
	町村税督促手数料					
	戸籍謄本抄本手数料	一五三〇〇	三〇九〇〇	二三八〇〇	二六三〇〇	三九七〇〇
第三款	雑収入	五〇一四〇〇	四三五七九八	四七二一〇二	六〇〇〇七二	五二五三五五
	不用品拂下代金	三八〇〇	七五〇〇	三二八五七	一九五九六	二三四二五
	小學校授業料	四九六一〇〇	四二三五〇〇	四四九二四五	五八〇一七五	四八二三八〇
	校舎貸付下料	一五〇〇				
	共有地売却代金					
	行旅病死人諸費弁償金					
	豫知スベカラザル収入					
	雑収入		四七九八	三〇〇		一九五五〇
第四款	前年度繰越金	五五七一〇	二八八五八八	二一六五八一	一六一五三九	五一三一二
第五款	国庫交付金	九八四五	九五四一	一七五六四	三二一八六	三二六三三
第六款	縣稅交付金	五八八八八	七九三五七	五三八九九	五七〇七〇	七九五九〇
第七款	縣稅補助金	三〇三三	二七二九	一五六一〇〇	四七八三	
	衛生費補助					
	普通教育費補助					
	教員住宅料補助					
	土木費補助			一五六一〇〇		
第八款	寄付金	二四〇〇〇	一二〇〇〇	三二四一五八五	三六〇〇〇	三六〇〇〇
	役場費寄附	二四〇〇〇	一二〇〇〇	三二四一五八五	三六〇〇〇	三六〇〇〇
科	目	明治三五年度	全三六年度	全三七年度	全三八年度	全三九年度
第九款	教育費寄附					
	土木費寄附			三二一四五八五		
	村稅	二四五八二八〇	二五九六三二〇	二〇八五八二〇	二三八二三一〇	二五一八五四〇
	地價割	一一〇五四三〇	一一三〇八六〇	七六二七五〇	七三四八四〇	七四一五九〇
	國稅營業割	三五五九〇	四七一八〇	三三九八〇	三八八二〇	三七〇八〇
	縣稅營業割	四三五五〇	五七二〇〇	五六三五〇	五三七六〇	五三七六〇
	縣稅雜種割	一三〇三四〇	二〇五二一〇	一三四一六〇	一三〇九八〇	一四〇一〇〇
	戸別割	一〇九七七六〇	一一五四八八〇	一〇五五七九〇	一三六二〇三〇	一四八二六八〇
	所得割	四九六一〇		四二七九〇	六一八八〇	六三三三〇
第十款	村公債	八〇〇〇〇〇				

第十一款	財產ヨリ生スル收入				
	預金利子				
第十二款	國庫補助金	三九二六四五六	三四五五二三三	七六七二三五一	三三二五六五九
計					四四〇〇
					三二八五一三〇

科	目	明治四十年	全四一	全四二	全四三	全四四
第一款	財產ヨリ生スル收入					
	村有土地貸付料					
第二款	手数料	三二四〇〇	二〇二〇〇	一五六〇〇	二三二〇〇	六〇〇〇
	町村税督促手数料					
	戸籍謄本抄本手数料	三二四〇〇	二〇二〇〇	一五六〇〇	二三二〇〇	二三三〇〇
第三款	雑収入	四〇〇五八〇	三六二四五〇	四一三三八〇	一七〇九二〇	二〇九四六〇
	不用品拂下代金	一三八〇〇	一三八〇〇	一六八〇〇	一五六〇〇	一九六四〇
	小學校授業料	三八六〇〇	三四七一五〇	一六六〇八〇	一五二五〇〇	一六五〇〇〇
	校舎貸付下料			二二八五〇〇		
	村有地売却代金					
	行旅病死人諸費弁償金					
	豫知スベカラザル收入					
	雑収入	七八〇	一五〇〇		二八二〇	二四八二〇
第四款	前年度繰越金	四七八五六	一二一〇四五	五九一一九	五七一六八	一六五四八〇
第五款	國庫交付金	三八七四〇	四三四四〇	三九四七〇	四五二一〇	三五二四〇
第六款	縣稅交付金	五六一六〇	五六四五七	五五六三〇	六〇九八八	三三一九九
第七款	縣稅補助金	一九九六六		一〇二五〇	四五〇四〇	

科	目	明治四十年	全四一	全四二	全四三	全四四
	衛生費補助					
	普通教育費補助			一〇二五〇	四二二二〇	四六九〇
	教員住宅料補助			二五七五〇		
第八款	寄付金	一五三八七〇	四九一三七〇	六二二九九〇	六〇〇七七〇	
	役場費寄附	二四〇〇〇	二四〇〇〇	二五〇二五〇	二四〇〇〇	
	教育費寄附	一二九八七〇	四六七三七〇	二七二七四〇	五七六七七〇	
	土木費寄附					
第九款	村稅	二七二八一七二	四三一三六三五	四七〇二六六五	四九六四〇一五	五四六四九六五
地價割		七六七八八四	一〇五六〇四五	一〇七五五四〇	一〇五一二一五	一〇〇六一五

国稅營業割	三、八三、四〇	五、二五、四〇	五、七六、二〇	六、二五、五〇	四、九一、二〇
縣稅營業割	七、二五、九〇	八、九、九七〇	八、八四、一〇	九、四一、九〇	一、六三、七三〇
縣稅雜種割	一、八九、〇七八	二、〇五、二五〇	一、三、四五、五〇	二、一、八九〇	三、一、八四、四〇
戶別割	一、五六、九二、二〇	二、七九、四〇、八〇	三、一、四〇、九七〇	三、四七、二七、五〇	三、八七、二九、二〇
所得割	九、一〇、六〇	一、一五、七五〇	一〇、五六、五五	七、一四、二〇	五、四六、四〇
第十款 村公債		九〇〇〇〇〇			一八〇〇〇〇〇
第十一款 財産ヨリ生スル収入					
預金利子					
第十二款 国庫補助金					
計	三、四七、七、七、四四	六、三〇、八、五、九七	五、八四、二、八、五四	五、九六、七、三、一一	七、七四、三、〇、三四

由良村歳出調査表 其 一

第一款 役場費	明治三五年	全	三六年	全	三七年	全	三八年	全	三九年
第一項 給料	三、二四〇〇〇	三、九〇〇〇〇	三、六六六〇〇	三、二三三〇〇	二、七七五八〇				
書記給料	一、二〇〇〇〇	一、八六〇〇〇	一、六二六〇〇	一、一三〇〇〇	七三〇八〇				
収入役給料	一、四四〇〇〇	一、四四〇〇〇	一、四四〇〇〇	一、四四〇〇〇	一、四四〇〇〇				
使丁給料	六〇〇〇〇	六〇〇〇〇	六〇〇〇〇	六〇〇〇〇	六〇〇〇〇				
第二項 雑給	七、六六、四、七〇	四、四三、五、一五	四、二七、八、四二	四、六二、二、七〇	五、九二、五、〇〇				
旅費	一、七〇、九〇	二、一七、九〇	二、三、四、八〇	二、二七、七〇	一、七五、六〇				
報酬	三、五三、〇〇〇	二、九三、〇〇〇	二、三一〇〇〇	三、四一〇〇〇	三、四一〇〇〇				
實費弁償額	二、八〇〇〇〇	七、五〇〇〇	三、六〇〇〇	三、六〇〇〇	三、六〇〇〇				
雇書記給料	一、六〇〇〇五	五、三三、七、五	三、五三、六、二	五、八五、〇〇	五、三九、四〇				
賞與金	一、〇〇〇〇〇	三五〇	二〇〇〇	二〇〇〇	一、四四〇〇〇				
雇人料	三七五	三五〇							
慰勞金									
村長交際費									
第三項 需用費	一、五七、七、三七	一、五九、四、四〇	一、七三、二、二三	一、四五、九、一二	一、五九、三、一四				
備品費	四、一四、四、九	二、八〇〇〇九	三、九、九、二、八	三、二六、七〇	三、〇三、四、八				
消耗品費	六、六八、八、八三	八、六〇、二、一	八、六八、六、五	七〇、八、二、二	九〇、七、一、六				
賄費	一、二三、二、三五	二、六八、二、〇	二、四〇〇〇〇	二、〇一、五〇	一、九〇〇〇〇				
通信運搬費	二〇、八、五〇	一、八五、九、〇	二、二四、三、〇	二、二二、七〇	一、九二、五〇				
雜費	五三二〇								

賞與金	明治三五年	全	三六年	全	三七年	全	三八年	全	三九年
雇人料	三七五	三五〇							
慰勞金									
村長交際費									
第三項 需用費	一、五七、七、三七	一、五九、四、四〇	一、七三、二、二三	一、四五、九、一二	一、五九、三、一四				
備品費	四、一四、四、九	二、八〇〇〇九	三、九、九、二、八	三、二六、七〇	三、〇三、四、八				
消耗品費	六、六八、八、八三	八、六〇、二、一	八、六八、六、五	七〇、八、二、二	九〇、七、一、六				
賄費	一、二三、二、三五	二、六八、二、〇	二、四〇〇〇〇	二、〇一、五〇	一、九〇〇〇〇				
通信運搬費	二〇、八、五〇	一、八五、九、〇	二、二四、三、〇	二、二二、七〇	一、九二、五〇				
雜費	五三二〇								

第一項	傳染病豫防費	一〇三八〇	八四八〇	八二五〇	八一〇〇	一〇九八五
第四款	衛生費	一四三八〇	三二四八〇	一二二五〇	一一一〇〇	一五一〇五
	校舎修繕費	五六〇七	一三三五二四	三五一八六	一八一五五	二六八四二六
第四項	常時修繕費	五六〇七	一三三五二四	三五一八六	一八一五五	二六八四二六
	賄費		一〇一七〇	一〇九五〇	九五七〇	九五三〇
	雜費	四一七〇七	五二六九〇	五〇八五九	四七九五九	五五〇八四
	通信運搬費	七五〇	一七五〇	一五六〇	一四七〇	一七〇
	消耗品費	四一七〇六	五一九七八	五三五一五	四九九七六	六七九四六
	備品費	四八〇八一	六四九二	四九九七六	九一一〇五	九四七七六
第三項	需用費	一三二二四四	一八一五八〇	一六六八六〇	二〇〇〇八〇	二二八九〇六
	明治三五年					
	全三六					
	全三七					
	全三八					
	全三九					

第四項	常時修繕費	四八〇	三四九三〇	四八〇	四五四〇	七五〇
役場修繕費	四八〇	三四九三〇	四八〇	四五四〇	七五〇	
第二款	會議費	二五四八〇	二六六五〇	二四七六〇	二五八四〇	二二二二〇
	書記給料	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
	小使給料	二六八〇	三四〇〇	二七六〇	二七〇〇	六二〇
	印刷費	五〇〇	五〇〇	五〇〇	六四〇	六二〇
	消耗品費	二〇八〇〇	二〇八〇〇	二〇〇〇〇	二一〇〇〇	二〇〇〇
	雜費					
	議員實費弁償費額					一八〇〇〇
第三款	教育費					
第一項	給料	一一九八八三〇	一二二四〇〇〇	一一七〇一五〇	一二六八三四〇	一一四七一三〇
	教員給料	一一五〇八三〇	一一七六〇〇〇	一一二二一五〇	一二二〇三四〇	一一〇九九一三〇
	小使給料	四八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇
第二項	雜費	五三六八〇	六一三三四	三二三八五	三五五三〇	八八七八四
	旅費	二六九五〇	三三六九九	一五一四〇	一二九六〇	二八七七二
	教員恩給基金	一〇二二〇	一一一五〇	一一一五	一二〇七〇	一一五一一
	雇人料	七五〇	四五〇	一三〇	一〇五〇〇	三二〇〇〇
	學事獎勵費	一三七六〇	一三〇三五	一三〇	一〇五〇〇	一三五〇〇
	運動會費					
	慰勞金					
	教員手當	二〇〇〇	二〇〇〇	六〇〇〇	一〇五〇〇	一三五〇〇
	教員住宅料					
	校醫手當					

由良村歳出調査表

其二

種痘所豫防事務所借用料	七五〇	七五〇	七五〇	五〇〇	五〇〇
吏員手當					
種痘検疫及豫防醫手當	八五〇〇	五五〇〇	三五〇〇	七〇〇〇	五〇〇〇
痘苗購入費	一一三〇	二二三〇	一五〇〇	五〇〇	一二五〇
消毒藥品費			二五〇〇	一〇〇〇	三五〇
雇人費					二〇〇
鼠族検査所費					三六八五
第二項 雜給補助費		二〇〇〇〇			四一二〇
第三項傳染病院隔離病舎費	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	
避病院修繕費					
備品費					
消耗品費					
人夫賃					
雜費	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四一二〇
第五款 救助費					
貧民救助費					
行旅病死諸費					
第六款 勸業費					
害蟲驅除豫防費					
第七款 徵發物件費					
地租及諸稅	七七一六四	四五〇七七	四一四九一	六九五八〇	六三一五九
郡費負擔	一〇一六				
第九款 基本財産蓄積費	七六一四八	四五〇七七	四一四九一	六九五八〇	一六四〇〇〇
第十款 村債償還金	明治三五年 一七〇〇〇	全 三六年 三六九〇〇〇	全 三七年 二四四〇〇〇	全 三八年 三二四〇〇〇	全 三九年 三〇二七七七四
元金償却費		三〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇	
利子	一七〇〇〇	六九〇〇〇	四四〇〇〇	二四〇〇〇	
第十一款 神社費					
第十二款 豫備費					
第十三款 一時借入金償却費					
一時借入金利子					
計	二七七三〇七二	三一〇一五三〇	二六九五二二七	二八八九三四七	三〇二七七七四

書記給料	明治四〇年	全	四一年	全	四二年	全	四三年	全	四四年
小使給料									
印刷費									
消耗品費									
雜費									
議員實費弁償費額	二四〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	四八〇〇〇	
第三款 教育費									
第一項 給料	一三五〇〇〇	一六七一〇三五	一七六五五二〇	一九三〇八九〇	一八五四六七二	一八〇六六七二	一八五四六七二	一八五四六七二	
小使給料	一三〇〇〇〇	一六二三〇三五	一七一七五二〇	一八八二八九〇	一八〇六六七二	一八〇六六七二	一八〇六六七二	一八〇六六七二	
第四項 常時修繕費									
役場修繕費	一八六〇	六一六〇	六一六〇	一一二〇〇〇	六三三七五	六三三七五	六三三七五	六三三七五	
第二項 雜給	五三四六二五	五一六七六〇	五六四三二〇	五五〇四一六	六八五二〇〇	六八五二〇〇	六八五二〇〇	六八五二〇〇	
旅費	三六八二〇	四四一六〇	三三三二〇	四一六〇〇	四〇三〇〇	四〇三〇〇	四〇三〇〇	四〇三〇〇	
報酬	二九六〇〇	三四七〇〇	三四七〇〇	二九三五一六	二二七〇〇	二二七〇〇	二二七〇〇	二二七〇〇	
實費弁償額	三六〇〇〇	四〇〇〇〇	三六〇〇〇	六〇〇〇〇	一一二〇〇〇	一一二〇〇〇	一一二〇〇〇	一一二〇〇〇	
雇書記給料	一四四四〇五	八五二五〇	八四〇〇〇	一七三〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	
賞與金	二七〇〇〇	三五〇	六五〇〇〇	三八〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	
雇人料	四〇〇〇	三五〇							
慰勞金									
村長交際費									
第三項 需用費	一八六八五二	二一〇七一六	二四一二六九	二三八五九三	二六二八五四	二六二八五四	二六二八五四	二六二八五四	
備品費	三八四七五	四七九〇五	四六七九〇	四四二〇九	六〇六九五	六〇六九五	六〇六九五	六〇六九五	
消耗品費	一〇五四九七	一二〇〇八一	一三六六五九	一三二〇五四	一四六四〇九	一四六四〇九	一四六四〇九	一四六四〇九	
賄費	一六五九〇	二五八五〇	三三一〇〇	三二一九〇	三三七〇〇	三三七〇〇	三三七〇〇	三三七〇〇	
通信運搬費	二五二九〇	一五八八〇	一九二二〇	二四九二〇	二〇〇五〇	二〇〇五〇	二〇〇五〇	二〇〇五〇	
雜費	一〇〇〇	一〇〇〇	五五〇〇	五二二〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	
第四項 常時修繕費	一八六〇	六一六〇	六一六〇	一一二〇〇〇	六三三七五	六三三七五	六三三七五	六三三七五	
役場修繕費	一八六〇	六一六〇	六一六〇	一一二〇〇〇	六三三七五	六三三七五	六三三七五	六三三七五	
第二項 會議費	二六〇〇〇	三八〇〇〇	三八〇〇〇	三八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇	
第一款 役場費	三一三〇〇〇	三七二〇〇〇	四〇八〇〇〇	四三七三三五	五三六九〇〇	五三六九〇〇	五三六九〇〇	五三六九〇〇	
書記給料	一〇九〇〇〇	一六八〇〇〇	一九二〇〇〇	二一六〇〇〇	二三八九〇〇	二三八九〇〇	二三八九〇〇	二三八九〇〇	
收入役給料	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	一三九六〇〇	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	
使丁給料	六〇〇〇〇	六〇〇〇〇	七二〇〇〇	八一七三五	五四〇〇〇	五四〇〇〇	五四〇〇〇	五四〇〇〇	
明治四〇年	全	四一年	全	四二年	全	四三年	全	四四年	

書記給料	明治四〇年	全	四一年	全	四二年	全	四三年	全	四四年
小使給料									
印刷費									
消耗品費									
雜費									
議員實費弁償費額	二四〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	三六〇〇〇	四八〇〇〇	
第三款 教育費									
第一項 給料	一三五〇〇〇	一六七一〇三五	一七六五五二〇	一九三〇八九〇	一八五四六七二	一八〇六六七二	一八五四六七二	一八五四六七二	
小使給料	一三〇〇〇〇	一六二三〇三五	一七一七五二〇	一八八二八九〇	一八〇六六七二	一八〇六六七二	一八〇六六七二	一八〇六六七二	
第四項 常時修繕費									
役場修繕費	一八六〇	六一六〇	六一六〇	一一二〇〇〇	六三三七五	六三三七五	六三三七五	六三三七五	
第二項 雜給	五三四六二五	五一六七六〇	五六四三二〇	五五〇四一六	六八五二〇〇	六八五二〇〇	六八五二〇〇	六八五二〇〇	
旅費	三六八二〇	四四一六〇	三三三二〇	四一六〇〇	四〇三〇〇	四〇三〇〇	四〇三〇〇	四〇三〇〇	
報酬	二九六〇〇	三四七〇〇	三四七〇〇	二九三五一六	二二七〇〇	二二七〇〇	二二七〇〇	二二七〇〇	
實費弁償額	三六〇〇〇	四〇〇〇〇	三六〇〇〇	六〇〇〇〇	一一二〇〇〇	一一二〇〇〇	一一二〇〇〇	一一二〇〇〇	
雇書記給料	一四四四〇五	八五二五〇	八四〇〇〇	一七三〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	
賞與金	二七〇〇〇	三五〇	六五〇〇〇	三八〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	
雇人料	四〇〇〇	三五〇							
慰勞金									
村長交際費									
第三項 需用費	一八六八五二	二一〇七一六	二四一二六九	二三八五九三	二六二八五四	二六二八五四	二六二八五四	二六二八五四	
備品費	三八四七五	四七九〇五	四六七九〇	四四二〇九	六〇六九五	六〇六九五	六〇六九五	六〇六九五	
消耗品費	一〇五四九七	一二〇〇八一	一三六六五九	一三二〇五四	一四六四〇九	一四六四〇九	一四六四〇九	一四六四〇九	
賄費	一六五九〇	二五八五〇	三三一〇〇	三二一九〇	三三七〇〇	三三七〇〇	三三七〇〇	三三七〇〇	
通信運搬費	二五二九〇	一五八八〇	一九二二〇	二四九二〇	二〇〇五〇	二〇〇五〇	二〇〇五〇	二〇〇五〇	
雜費	一〇〇〇	一〇〇〇	五五〇〇	五二二〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	
第四項 常時修繕費	一八六〇	六一六〇	六一六〇	一一二〇〇〇	六三三七五	六三三七五	六三三七五	六三三七五	
役場修繕費	一八六〇	六一六〇	六一六〇	一一二〇〇〇	六三三七五	六三三七五	六三三七五	六三三七五	
第二項 會議費	二六〇〇〇	三八〇〇〇	三八〇〇〇	三八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇	四八〇〇〇	
第一款 役場費	三一三〇〇〇	三七二〇〇〇	四〇八〇〇〇	四三七三三五	五三六九〇〇	五三六九〇〇	五三六九〇〇	五三六九〇〇	
書記給料	一〇九〇〇〇	一六八〇〇〇	一九二〇〇〇	二一六〇〇〇	二三八九〇〇	二三八九〇〇	二三八九〇〇	二三八九〇〇	
收入役給料	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	一三九六〇〇	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	一四四〇〇〇	
使丁給料	六〇〇〇〇	六〇〇〇〇	七二〇〇〇	八一七三五	五四〇〇〇	五四〇〇〇	五四〇〇〇	五四〇〇〇	
明治四〇年	全	四一年	全	四二年	全	四三年	全	四四年	

第二項 雜費	旅費	一七九九〇四	一六六五九三	四四五八六三	四六五四三六	一八三二五六
	教員恩給基金	八四一二〇	七六五五〇	七六八六〇	八一〇四〇	七三〇二〇
	雇人料	一〇九一九	一四一七八	一四五〇一	一五四九六	一七五三六
	學事獎勵費	三五五〇	三七五六五	四五〇九五	三八四五〇	二五二〇〇
	運動會費	四四二一五	三〇〇	九六〇〇	三五四五〇	二五二〇〇
	慰勞金	一〇〇	三〇〇	四六〇〇	二五〇〇〇	五五〇〇〇
	教員手當	八〇〇〇	八〇〇〇	三〇三〇七	二五〇〇〇	五五〇〇〇
	教員住宅料	二三〇〇〇	三〇〇〇〇	一七五〇〇	三九九〇〇	五五〇〇〇
	校醫手當	二二〇〇〇	三〇〇〇〇	二五二〇〇〇	二六四〇〇〇	一〇〇〇〇
第三項 需用費	備品費	二八〇三六〇	四三五九八六	三五七六九七	五三三五〇七	四八七二三四
	消耗品費	一三〇七二〇	二八三四六四	二〇〇八四五	三六三一九五	二九六一〇八
	通信運搬費	六三四四五	一〇一四一五	九五六五四	八一六七二	一〇七〇六六
	雜費	六六二五	三四〇〇	八〇七五	一七九七〇	三八六五
	賄費	六八四九〇	三六七五七	三八五二五	五六〇七〇	六一八六五
	第四項 常時修繕費	一〇八〇	一〇九五〇	一四六〇〇	一四六〇〇	一八三〇〇
	校舎修繕費	八九九一五	六五〇六六	一二六五九七	五一〇〇五	四〇〇二五
	第四款 衛生費	八九九一五	六五〇六六	一二六五九七	五一〇〇五	四〇〇二五
第一項 傳染病豫防費	種痘所豫防事務所借用料	二九八〇〇	三六三〇〇	一九九二五	四三六一〇	六八八二〇
	種痘所豫防事務所借用料	二五八〇〇	三二三〇〇	一五九二五	三九六一〇	一五五五〇
	吏員手當	七五〇	五〇〇	五〇〇	一五〇〇	六〇〇
	種痘檢疫及豫防醫手當	四〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇
	種痘購入費	一〇〇〇〇	一六〇〇〇	八一〇〇	三〇三九〇	六〇〇〇
		一〇〇〇〇	一三八〇〇	三七五	五四七〇	二〇〇〇
消毒藥品費	明治四〇年			四七〇〇		四七〇〇
雇人費	全 四一年			二五〇	二五〇	二五〇
鼠族檢査所費	全 四二年			四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇
第二項 雜給補助費	全 四三年			四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇
第三項 傳染病院隔離病舎費	全 四四年	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇
避病院修繕費		四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇
備品費		四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇
消耗品費		四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇
人夫賃		四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇
雜費		四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇

由良村歳出表(臨時部)

其一

第五款	救助費					一五五〇〇
	貧民救助費					九五〇〇
	行旅病死人諸費					六〇〇〇
第六款	勸業費					
	害蟲驅除豫防費					
第七款	徵発物件費					
第八款	諸費及負擔	一三一六二七	九四七七〇	一六三六九六	一七四五七九	三〇九二三八
	地租及諸稅		一二一〇	二八八五	六八〇	
	郡費負擔	一三一六二七	九三五六〇	一六〇八一	一七三八九九	三〇九二三八
第九款	基本財産蓄積費	一四二七五六	二二〇九四二	一五四二一九	二八五六五〇	
第十款	村債償還金			三八七六〇〇	三五一六〇〇	三一六八〇〇
	元金償却費			三〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇
	利子			八七六〇〇	五一六〇〇	一六八〇〇
第十一款	神社費			五〇〇〇	五〇〇〇	七〇〇〇
第十二款	豫備費					
第十三款	一時借入金償却費		七二〇〇			
	一時借入金利子		七二〇〇			
計		三二六六九九	三八四六五二	四六八九三〇	五一二一六八一	四八七八八七

科	目	明治三五年	全三六年	全三七年	全三八年	全三九年
學校増設費		八二〇七九六	二四〇六五			
備品費			六〇五九五			
小學校地石垣改築費			七五一四			
耕地購入費				四七七五八五		
第三款	土木費					
	里道修繕補助費					
	由良橋仮架設費					
	堤防修繕費			四七七五八五		
	里道修繕費					
第四款	補助費	四四〇〇〇	四四九四八	四〇〇〇〇	六五〇〇〇	五五〇〇〇

全前每戸平均負擔額

明治三十九年度	全	四十年	全	四十一年度	全	四十二年	全	四十三年
六四七戸		六四四戸		六四一戸		六二七戸		六三三戸
四三四〇厘		四六四五		五六三〇		五四二七		九九九九

村税調

明治三十九年度	全	四十年	全	四十一年度	全	四十二年	全	四十三年
二五一八五四〇		二七二八一七二		四三一三六三五		四七〇二六六五		四九六四〇一五

全前每戸平均負擔額

明治三十九年度	全	四十年	全	四十一年度	全	四十二年	全	四十三年
六四七戸		六四四戸		六四一戸		六二七戸		六三三戸
三八六〇厘		四二三五		六七二九		七五〇〇		七八四〇

縣税調

明治三十九年度	全	四十年	全	四十一年度	全	四十二年	全	四十三年
三五八六〇〇〇		三一七九三六五		三二〇四三六〇		二九四三五一五		三二二四二七〇

全前每戸平均負擔額

明治三十九年度	全	四十年	全	四十一年度	全	四十二年	全	四十三年
六四七戸		六四四戸		六四一戸		六二七戸		六三三戸
五〇五〇厘		三九三〇		五〇〇〇		四六九五		五〇九三

本村基本財産

一、金 壹千二百四十八円三十六錢五厘

一、農工債券 二百円

一、田 二畝二十五歩

一、畑 二段九畝七歩

一、宅 百十六坪

一、山林 三百二町一段六畝二十四歩

全學校基本財産

一、金 二百六十三円二十七錢

一、農工債券 三百円

基本財産管理方法

基本財産ハ左ノ規程ニヨリ管理ス

由良村基本財産管理規程

第一條 本村基本財産ハ此規程ニヨリヨ管理スルモノトス

第二條 財産ハ左ノ區分ニ從ヒ原簿ヲ設ケ之ヲ登録スヘシ

一、基本財産

二、學校基本財産

三、基本財産ニアラザル村有不動産

第三條 基本財産及村有財産タル土地建物ハ五年以内ノ期限ヲ以テ貸與スルモノ

トス

但シ本文ノ期限ニ依リ難キ事項アルモノハ此限リアラズ

第四條 土地建物ハ其貸借期限中ト雖ドモ必要アル時ハ村會ノ議決ヲ以テ之ヲ返

還セシムル事アルベシ

第五條 土地建物ヲ貸與スル時ハ村長ハ借主ヨリ貸與期限賃金等ヲ定メ債務者

債權者又ハ保証人ノ氏名ニ記載シタル契約証書ヲ徴スベシ

保証人ハ本村ニ在住スル能力者ニシテ辨償ノ資力アル者ニ限ル

山林貸與料ハ其樹木伐採代金ノ十分ノ二以上トス

但シ特殊ノ事由ニ因リ右ニ依リ難キ場合ハ此限リニアラズ

第六條 現金ハ郵便貯金 大藏省預金 本縣農工銀行預金トシ、其高壹千円以上

ノモノハ國債証券、若クハ勸業銀行本縣農工銀行株券、又ハ永續収益ノ

見込アル不動産ニ代ヘ維持スルモノトス

但シ他ノ公共團體ニ利付ニテ貸付スルコトヲ得

第七條 國債証券若クハ勸業銀行本縣農工銀行ノ株券 債券額面壹千円ヲ越エル

時ハ、國債証券ニ對シテハ國債規則第三條ニヨリ登録ヲ受ケ、勸業債券

ハ郵便官署ニ保管預ケヲナシ、其他ハ縣金庫ノ事務ヲ取扱フ銀行ニ保護

預ケヲナシ、其証書ヲ徴シ保管スルモノトス。銀行ニ保管預ケヲ爲シタ

ル証書ハ村長ニ於テ毎年之ヲ檢閲スルモノトス

第八條 第六條但書ニ依ル貸付ハ償還期限ヲ五ヶ年以内トシ、年利五分以上トス

但償還方法確實ナリト認ムルモノ、及本文ノ期限ニ依リ難キ事情アルモノハ此限りニアラズ

貸金証書ニハ其金額貸付及償還年月日、利率、債務者、債権者ノ氏名等ヲ記載スベシ

第九條 財産ノ賣却交換、讓與等ノ處分ハ左記各號ノ一二該當スル場合ニアラサレハ之ヲ爲ス事ヲ得ス

一、負債ヲ償還スル爲メ又ハ天災地變等止ムヲ得サル支出、若シクハ本村永久ノ利益トナルベキ支出ヲ要スルニ當リ住民ノ負擔ニ堪ヘサル時

但シ基本財産ニ在テハ相當ノ期限ヲ以テ戻入方法ヲ定ムルヲ要ス

二、管理維持上損益相償ハサル時

三、寄附ヲ受ケタルモノニシテ使用ノ目的消滅シタルトキ

第十條 第三條 第五條乃至第九條ニ規程シタル土地、建物、有價証券交換讓與又ハ預入、貸付ニ就テハ村會ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス

附則

第十一條 本規程ハ發布ノ日ヨリ施行ス

六、生業

本村ハ氣候温暖ニシテ、雨量適度ナルト土地肥沃ナルヲ以テ、農ヲ以テ業トス。然レトモ上古ハ耕地ノ面積幾許アリシヤ、及ヒ其變遷ノ由来等ニツキ調査シタルモ、記録ノ存スルモノナキヲ以テ詳ナラス。明治九年本村地誌調査簿ニヨリ左ニ各大字ノ面積ヲ掲ク。

大字畑
田 六十六町三段八畝十四歩
畑 二町三段七畝十二歩
大字中

田 三十二町二畝二十三歩
畑 八段二畝 五歩

大字門前

田 四十三町五段一畝廿七歩
畑 一町四段四畝二十一步

大字里

田 四十一町三段八畝二十三歩
畑 七町二段五畝十二歩

大字阿戸

田 二十一町一段七歩
畑 三町三段七畝十九歩

大字江ノ駒

田 十四町二段四畝七歩
畑 一町三段一畝三歩

合計

田 二百十八町六段六畝十一歩
畑 十六町五段八畝十二歩

之ヲ現今ノ田二百十二町八段三畝一歩 畑二十一町二段三畝二十六歩ニ比較スル時ハ、
田地ニ於テハ五町八段三畝十歩減少シ、畑ハ四町六段五畝十四歩ヲ増セリ。斯ク田地ノ
減少セシハ山田及川端ノ田地ノ荒蕪シタルト、道路ノ敷地トナリ或ハ宅地ニ變換シタル爲
ナラン。

ア、農業

本村ハ氣候温暖ニシテ雨量適度ナルト、地味膏腴加フルニ耕地ニ灌漑スル渚水地ノ稍具
備セル爲メ、古來農ヲ以テ業トスルモノ其大部分ヲ占ム。特ニ明治四年廢藩置県ト共ニ

農民ノ土地所有權ハ確實ニ保有セラレ、明治六年地券ヲ設ケ地價百分三ヲ租トシ、府縣
村ノ公費ヲ地價ニ課シ、米納ヲ金納ニ改ム。全十一年地租二分五厘ニ改ム。政府ハ更 郡
農業ニ向ケ種々ノ保護獎勵ヲナシ、以テ生産發達ヲ謀リタル結果ト教育普及ノ結 果、農民

ノ智識ノ稍々進歩セル觀アリ。又近年社會ノ進歩ト共ニ果樹ヲ栽培スルモノ稍
 コノ世ノ進歩ト共ニ衛生ニ注意スル人多ク、需用激増ノ結果ニシテ將來最
 殊ニ本村ノ夏蜜柑ハ貯藏ニ耐ヘ、且ツ風味佳良ニシテ本場有田産以上ノ
 農業ニ從事スル戸數ハ三百三十三戸ニシテ、田段別二百十二町八段三畝歩、畑段別二十
 一町二段三畝二十六歩ナリ。而シテ何レモ一毛作地ト二毛作地トアリ。内畑ハ凡テ二毛
 以上ヲ作ルコトヲ得ルモ、果樹園ノ如キハ一毛作ナリ。今左ニ作付段別表ヲ掲ク。

一毛作段別表

畑		田	
一町八段	桑	夏作稻	冬作休
五段	茶	四十四町	
七町二段	柑橘		
五段	梅		
五段	柿		
十町五段歩	計	四十三町歩	計

二毛作段別表

畑		田	
三町五段	大豆	菜種	稻
四町二段	甘藷	蠶豆	稻
一町五段	小豆	麥	稻
一町五段	蔬菜	小麥	稻
		大麥	稻
		三町四段	蔬菜輪作
		八町	合
		百六十九町八段歩	計
		十町七段歩	計

右ノ一毛作地ハ山田又ハ沼等ニシテ菽 麥等ヲ仕付ケルトモ、收支償ハサルモノ又絶體ニ
 作付スルコトノ出來サルノ地ナリ

農家ノ戸數ト耕地

田	畑	農戸數	一戸平均段別
二百十二町八段三畝歩	二百一十二町二畝廿六歩	三百三十三	六段三畝二十七歩
三百三十三	三百三十三	六畝	十一歩

五段歩以上耕地所有戸數表

五段歩以上	一町歩以上	一町五段以上	二町以上	二町五段以上	三町以上	四町以上
八十八戸	二十三戸	十一戸	六戸	〇	三戸	四戸

主要ナル産物ハ米 麥 蠶豆等ニシテ其作付段別及ヒ輸出地等ハ左表ノ如シ

種類	作付段別	産別	消費額	輸出額	仕向地
米	二一二町八段三畝	四二五六石六斗	三三五六石六斗	一〇〇〇石	衣奈白崎湯淺熊野地方

イ、蠶業

麥	一三町二段	步	一〇三二石	一〇八〇石	五二石	衣奈 白壽 湯淺
蠶豆	四十町五段	步	四四五石五斗	一八〇石	二六五石五斗	全
菜種	六町	步	九六〇石	ノ	九六〇貫	湯淺
小麥	九町	四段	八四石六斗	六〇石	二四石六斗	全
蔬菜	九町	五段	二萬八五〇〇石	全		
大豆	三町	五段	二二石七斗五升	全		
甘藷	四町	二段	一〇五〇石	全		
小豆	一町	五段	七石五斗	全		

今ヤ時勢ノ進運ニ伴ヒ、村費モ年々増加シ其ノ負擔額ハ、町村制施行當時ト比較セバ殆

ド十倍トナレリ。尚今後一層村費ノ膨張ハ免レサルナリ。故ニ一般農家ハ米穀食料品ヲ

收納スル傍ラ、直子ニ現金ト交換シ得ベキ産物ヲ出スハ農家ノ家計上最モ便利ナル方法

リトス。而シテ養蚕ハ最モ能クコノ目的ニ副ヘルモノナルヲ以テ、明治二十三年頃ヨリ

水田變シテ桑園トスルノ盛況ナリシガ、其後米價ハ逐年騰貴スルヲ以テ桑園ハ再ビ

リ、一時盛況ニ向ヒタリシ蚕業モ衰退シ、現今ニテハ宅地ノ一隅又ハ僅少ノ畑

ノ岸 河川ノ堤防等ニ植栽シ、自家用ニ飼育スルニ過キササルナリ。由来我

ハ養蚕ニ適セルニ拘ハラズ衰退シタルハ、米價ノ影響モ一原因ナラン

蚕児ノ成熟期ニ、多數ノ人手ヲ要シ爲メニ不廉ノ勞銀ヲ支出シ

飼育シタルタメ収支償ハサルトニヨル。故ニ副業トシテ営

シ、各自ノ用途ヲ充タスヲ主トシ、剩余ノ分ハ之ヲ賣却

キハ、設備飼育ニツナガラ甚ハダ、簡單ニシテ相當ノ

宅ニ二樹フルニ桑ヲ以テスルト云フ風ニ、本村

テ莫大ナル収益ヲ得ルコト必然ノ事ト思フ。故ニ余輩ハ各戸ニ小規模ノ飼育ヲ獎勵シ本村ノ

一大産物トナサンコトヲ希望ス

最近ノ養蚕家戸數

飼養戸數	掃立枚數	收繭高	價格	上下繭平均
一五	十四枚半	十一石	五八五円	四十五円

ウ、牧畜

近年世運ノ進歩ト共ニ肉食ノ盛ニナルニ從ヒ、肉類ノ需用ノ増加ハ飼育業ノ發達ヲ促

シ、家畜ノ頭數ハ近年慨シテ増加シタルモノ、如シ。然レドモ牧畜ノ沿革ノ如キハ詳ナラズ。古來毎戸飼育スルモノニシテ、特ニ牧場ヲ設ケ飼育スルモノナシ。現今飼育スル戸數及ビ種別等左ノ如シ。

種目	飼育戸數	現在數	一年產出數
牛	一七八	一七八	二八
鶏	一八〇	六五〇	四〇〇
蜜蜂	五	十函	七〇斤
馬	九	九	

右ノ内牛ハ耕地ヲ目的トシテ飼育スルモノニシテ、乳及ヒ肉ヲ目的トスルモノナシ。從フテ和牛ヲ貴ビ雜種ヲ厭フ。馬ハ主トシテ荷物ノ運搬ニ使用ス。

エ、林業

本村ハ四圍ノ山脈起伏シ、雨量亦豊ナルト南部ハ慨シテ肥沃地ナルニモ拘ラズ、部落有林ハ悉ク牧草地ナリシガ、森林ノ人生ニ寄與スル効能ノ偉大ナルヲ悟リ鎌止メヲナシ、又ハ植林ヲナスモノ漸次増加シツ、アリ。殊ニ數年前ヨリ從來ノ如ク、牧草地ヲ焼クコト來サルニ至リタルト、部落有山林ヲ統一シ村有トシ、大正四年ヨリ植林スルコト、ナリタルバ、數十年ノ後ニハ鬱林ノ綠滴ルカ如キヲ見シ。其各種ノ段別左ノ如シ。

- 公有林 三百二町一段六畝廿四步
- 私有林 六百六十二町九畝十四步
- 社有林 六段八畝廿六步
- 寺有林 九町八段二畝六步

主要林産物ノ生産額 消費額 輸出額左ノ如シ

種類	生産額		消費額		輸出額	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
栗	一一五二〇	百六十一円			一一五二〇	百六十一円
榉	三七四四〇	六百七十六円			三七四四〇	六百七十六円
松材	二五九二〇	二百八十四円	一萬貫	百九円七十錢	一五九二〇	百七十四円三十錢
木炭	一五〇〇〇	千五百円	五萬貫	五百円		
棕櫚皮	一〇〇〇〇	三十円	一萬枚	三十円		
竹材	六〇〇束	三百三十円	六百束	三百三十円		

才、工業

本村々民ノ大部分ハ農業ニ從事スルヲ以テ大ナル工業者ナシ。タゞ精米業者 石灰製造業者 大工業者 製傘業者。石工業者 鍛冶業者 瓦製造業者 菓子製造業者等十數名アルノミ。精米業者ハ三戸ニシテ一ヶ年ノ精米高五千二百二十七石内外。石灰製造業者ハ二シテ一ヶ年ノ産額二萬俵。瓦製造業者三戸ニシテ一ヶ年ノ製造高二萬個。傘製造業者一戸ニシテ一ヶ年ノ製造高七百本。大工業者八十戸ニシテ家作修繕ノ需ニ應スルノ障子ヲ製スルモノニシテ一ヶ年ノ製造額三百本。其他ハ何レモ産額僅少ナリ。

力、商業

本村ハ狹長ナル谿谷ナルモ、西端ニ有名ナル良港ヲ控フルヲ以テ、海ニ因リテ發達スベキ運命ヲ有スルヲ以テ、村民ノ奮勵ノ度如何ニヨリ將來ノ發展期スベキナリ。然ルニ今ヤ單ニ村民ノ需用ヲ充スト、産物ノ剩餘ヲ輸出スルノミニ過ズ。而シテ商業ニ從事スル及ビ種類等ハ左ノ如シ。

有限責任畑信用購買組合	一
古着商專業	四
酒類小賣兼業	七
魚類小賣專業	十二
佛具商兼業	三
陶器商	一
肥料商	一
穀物商兼業	一
全	八
玩具商	一
材木商	三
荒物商兼業	一
青物商兼業	一
全	二
雜貨店兼業	五
旅人宿兼業	三
全	〇

キ、漁業

我が由良村ノ港灣ハ無盡藏ナル天與ノ寶庫ニシテ、其利益亦尠カラズ。然ルニ惜シムラ
 クハ從來日進月歩、文明ノ利器ヲ應用シタル方法ニ依ラサルヨリ、十分ノ漁利ヲ得ル能
 ハザリシモ、數年前ヨリ漁獲ノ方法ニツキ學理ヲ經トシ經驗ヲ緯トシ、研究シツ、アレバ
 日其功果ノ見ルベキモノアランカ。左ニ漁業者ノ戸數及ビ漁船等ヲ示ス。 他

漁業者戸數	九五
三間以上五間以下和船	一一
漁業船	八一
真鱈	三二〇〇〇貫
鰹	二〇〇〇
鯖	五〇〇〇
□	二八〇〇
	七〇〇
	四八〇〇円
	二〇〇〇
	八〇

* 水魚 地元ではハイカラと呼ぶ 鮎の稚魚

七、教 育 由良校

沿 革

現今我が國ノ普通教育機関タル普天ノ下率土ノ濱、如何ナル僻村寒地ト雖ドモ小學校舎ノ
 設備アラザルナク、樵童 漁兒ト雖ドモ文學ヲ解セザルナキモ、明治維新以前ノ中流以上

一部分ノ兒童ノミ不便極マル寺子屋、或ハ寺院ノ住職等ニツキ單ニ文字ヲ學ブノミヲ目的
 文字以外ノ智識ニ至リテハ何等得ル所ナカリシ。中流以下ノ兒童ニ在テハ學習スルモ
 尠ク、女子ノ如キハ殆ンド不就學ノ状態ナリキ。其寺子屋ノ沿革等ニツキ記録ノ
 キモ、古老ニツキ聞ク所ニヨレバ畑 中 門前合併シテ大字中字高野坊二五 ○番地茅屋ニテ、
 安政元年ヨリ明治五年マデ池田房吉氏教導セリ。其他横濱 里八池田酒 造之助氏、網代 江ノ

駒ハ乾風兵助氏、阿戸ハ濱崎庄吉氏及永原智觀氏之ヲ教導セリト云 フ。明治五年八月學制頒
 布サレテ教育ノ大方針確立シ、各地方長官ハ學校設立ノ焦眉ノ急 ナルヲ懇々訓示サレタルヲ

以テ、明治六年三月一日横濱光專寺本堂ヲ借り入レ校舎一充テ、 横濱村落小學校ト称シ、横
 濱 里 阿戸 網代 江ノ駒ノ五ヶ村ノ兒童ヲ收容シ、坂上濤 江氏ヲ教導セリ。同八年七月學區

改正ニヨリ、第二十一番中學區、第十八番小學區横濱小 學校ト改称シ、下等 上等ノ兩科各
 八級ニ編成セリ。同十年一月阿戸村分離シ、横濱小學 校ハ花岡傳助氏所有ノ酒造藏ヲ買入レ

校舎トセシモ、逐年就學兒童ノ増加ト共ニ狹隘ヲ告 ぐ、同十二年一月更ニ大字里字北垣内一

六六番地旧會議所 現今校舎ヲ買入レ之ニ轉ス。 同十五年七月由良小學校ト改稱シ、初等中等 高等ノ三科ニ編成ス。 同十七年七月阿戸 門前 中ノ三校ヲ合併シ、校舎ヲ増築シテ里小學校ト改ム。 同十八年八月更ニ由良小學校ト改稱、同二十年四月小學校令ノ改正ニヨリ、由良尋常小學校ト改稱ス。 爾來逐年隆盛 二赴キ住民向學心ノ進歩ト共ニ就學兒童ノ歩合ヲ高メ、從ツテ高等科ノ設置ヲ望ムモノ多キニ至リシカバ、同三十年ニ至リ現校舎ノ新築ニ着手シ、翌年五月二十一日竣成ト共ニ高等科ヲ併置シ、由良村尋常高等小學校ト改稱シ、同三十七年度ニ至リ農業科ヲ高等科ニ、 同三十八年度ニ於テ唱歌 裁縫ノ両科ヲ尋常科ニ加設セシガ、更ニ同四十四年度ニ至リ手 工科ヲ尋常科ニ、又其一・二學年ニ圖畫科ヲ課スルニ至レリ。

歴代校長

坂上 瀧江	明治八年三月十九日就職	退職年月不明	俸給 參円
北條 法道	不明		
藤本 邦雲	全		
阿部 秋吉	全		
赤坂 芳龍	明治十九年就職	明治二十二年十月三十日退職	
松本 円教	全 二十二年二月二十一日ヨリ	全 二十六年五月七日マデ	尋正
日置 義二郎	全 二十六年五月八日任	全 三十二年四月 轉	
大谷 房之助	全 三十三年八月十五日任	全 三十九年五月三十一日退	本正 二十円
木村 保吉	全 四十年三月三十一日任	全 四十二年三月三十一日退	本正 二十円
亀井 龜之助	全 四十二年三月三十一日任	大正 四年三月三十一日轉	本正 二十二円
生駒 國太郎	大正 四年三月三十一日任		本正 三十円

初等教育

學齡兒童數男二百五十二人 女二百二十九人 計四百八十一人ニシテ、就學歩合八男九十八人八分一厘 女九十六人五分一厘 男女平均九十七人七分ナリ(明治四十年年度) 出席歩合

男九〇・九七 女八九・八〇 平均九〇・四九。 兒童出缺席ノ狀況ハ概シテ良好ナルモ、純農ノ部落ハ農繁ノ時 其他家事ノ爲メ缺席スルモノ多シ。 又阿戸ノ内網代部落モ漁業地ルヲ以テ、男兒ノ缺席者比較的多シ。

學級數八七、即尋常科六學級 高等科一學級ナリ。

左ニ教育費年別表 兒童年別調査表 學齡兒童就學 不就學ニ関スル調査表及兒童出席歩合表等ヲ占サン。 教育費年別表

年 度	明 治 三 四 年		年 度	全 三 五 年		年 度	全 三 六 年		年 度	全 三 七 年		年 度	全 三 八 年		年 度	全 三 九 年		年 度	全 四 〇 年		年 度	全 四 一 年		
	決 算	豫 算		決 算	豫 算		決 算	豫 算		決 算	豫 算		決 算	豫 算		決 算	豫 算		決 算	豫 算		決 算	豫 算	決 算
	市町村費總額	二八七五九九六		三八八〇七九四		三六三七八八六		三三三三八六五二		三三三二一八〇		七五一〇八一二		三二五四三三七		三二七四三八九		三三三二二四六		三三三二二四六		五八〇三九四〇		五八〇三九四〇
	教育費總額	一三四〇二〇〇		二四九四五三〇		二二二一一五七		一五二六六二二		一六八五〇九八		一三〇八七四〇		一五二二一〇五		一七三七〇三〇		一九三三二四六		一九三三二四六		三〇三三七九〇		三〇三三七九〇
	教員俸給	一〇四四〇〇〇		一一四〇〇〇〇		一一五〇八三〇		一〇三二〇〇〇		九七八一五〇		九一二〇〇〇		一〇七〇四九〇		九四三一一三〇		一二二四〇〇〇		一二二四〇〇〇		一六九二〇〇〇		一六九二〇〇〇
	雜 給	二九四〇〇		三〇〇七三		五三六八〇		四六八一四		四〇九三〇		二一五三五		二二九九〇		七八四二四		一四五六三〇		一四五六三〇		四〇四一九〇		四〇四一九〇

年 度	全 四 二 年		年 度	全 四 三 年		年 度	全 四 四 年		年 度	全 四 五 年		
	決 算	豫 算		決 算	豫 算		決 算	豫 算		決 算	豫 算	
	市町村費總額	五八〇三九四〇		五七八五〇六六		四八四〇六〇		四八四〇六〇		四八四〇六〇		四八四〇六〇
	教育費總額	三〇三三七九〇		二九四八一一七		二九八〇八三八		二九八〇八三八		二九八〇八三八		二九八〇八三八
	教員俸給	一六九二〇〇〇		一四四八八二二		一五七二八九〇		一五七二八九〇		一五七二八九〇		一五七二八九〇
	雜 給	四〇四一九〇		四二七二二八		四四一四八六		四四一四八六		四四一四八六		四四一四八六

年 度	全 三 五 年		年 度	明 治 三 四 年						
	決 算	豫 算		決 算	豫 算					
	校 費	一三二二四四		二一八八〇〇		二七六四七九		一四七八〇〇		一三二二四四
	修 繕 費	五六〇七		二〇〇〇〇		二〇〇〇〇		二〇〇〇〇		五六〇七
	其 他	八六八七九六		四八〇〇〇		四八〇〇〇		四八〇〇〇		八六八七九六
	町 村 費 二 対 歩 合	〇・六〇八		〇・四六六		〇・四八二		〇・四八二		〇・六〇八

畑尋常小學校

出席歩合

年 度	男 児	女 児	平 均
明治三十四年	九一、六〇	七八、一三	八五、四四
全三十五年	九一、七八	八六、八八	八九、七六
全三十六年	九二、〇〇	九三、〇〇	九二、四三
全三十七年	九三、九六	八九、二四	九一、五五
全三十八年	九二、一六	八九、一七	九一、九三
全三十九年	九一、九八	八九、三〇	九〇、七八
全四〇年	九〇、九七	八九、八〇	九〇、四八
全四一年	九五、二四	九二、五一	九四、〇三
全四二年	九三、九〇	九二、六〇	九三、〇〇
全四三年	九四、一八	九三、五六	九三、八七

年 度	男 児	女 児	平 均	別百人中割合	百人中就學
明治三十四年	一四四	一五二	一三八	九七、三六	九二、四一
全三十五年	一四六	一三七	一四一	八六、〇一	八七、六七
全三十六年	一四一	一四九	一四〇	九四、八一	八七、六七
全三十七年	一三六	一四〇	一三八	七八、七〇	八七、六七
全三十八年	一三九	一三八	一三八	九一、四四	八八、一一
全三十九年	一四一	一四三	一四二	八四、八一	九〇、七四
全四〇年	一四〇	一四三	一四一	九一、五二	九三、九〇
全四一年	一四二	一四六	一四四	九八、五〇	九七、七一
全四二年	一六一	一五八	一五七	九七、二四	九八、三四
全四三年	一七五	一七二	一七三	九八、三九	九七、四八

明治五年八月學制頒布サレテ教育ノ大方針ヲ確立シ、各地方長官ハ學校設立ノ焦眉ノ急ナルヲ懇々訓示サレタルヲ以テ、明治八年頃畑長谷寺ノ本堂ヲ借り入レ校舎トシ、珠石小學校ト称シ畑村ノ児童ヲ收容シ、長谷寺住職釋野定哲氏之ヲ教導セリ。外ニ中村高野坊二五一番地ノ民家ヲ借り入レ校舎トシ、中村小學校ト称シ中村門前村ノ児童ヲ收容シ三宅龍太郎氏之ヲ教導セリ。同九年畑村中村門前村合併シテ中村東泉寺庫裡ヲ借り入レ校舎石山小學校ト改称シ、創立ノ當時ハ三宅龍太郎氏教導セシガ、其後吉見經英ヲ聘セリ。十七年門前村分離シ、全村字伊賀田ノ民屋ヲ借り入レ校舎トシ、温良小學校ト称シ那須郎氏之ヲ教導セシガ、同十七年ニ至リ石山小學校及温良小學校ヲ廢シ、里小學校ニ（現由良村尋常高等小學校 通學スルコト）ナリ、畑村ハ別ニ民家ヲ借り入レ校舎ニ充テ、童ヲ收容シ教育セリ。同二十三年四月二十四日由良校簡易科ヲ畑村ニ移シ、畑中ノ児童ヲ收容、同二十五年九月三十日簡易小學校ヲ廢シ、由良校分教場トナリ尋常科一・二學年生ヲ收容ス。同三十六年四月一日畑分教場ハ獨立シテ畑尋常小學校ト改称スルニ至レリ。（△△△は一五年九月開校式舉行ノ旨郡誌二見）

歴代校長氏名

釋野 定哲	代用	珠石小學校	就職年月不詳	退職年月不詳
三宅 龍太郎	全	中村小學校	全	全
那須 貞三郎	准訓	温良小學校	全	全

吉見 經英		石山小學校	全	全
古田 伊由	尋正	畑簡易科小學校	全	全
寺本 藤楠	全	由良校分教場	全	全
原 胤衛	全	畑尋常小學校	全	全
寺本 政照	全		明治三十年七月三一日就任	明治四十年十一月一八日轉
松本 円教	全		全 四十年十一月 就任	全 四一年十月三一日轉
吉信 秀治	全		全 四一年十月二七日就任	全 四二年四月一七日轉
三木 森一	全		全 四二年三月廿五日就任	全 四三年四月二日轉
薦池 秀與	全		全 四三年三月廿五日就任	全 四三年四月二日轉
			大正 元年八月三一日就任	大正 元年 九月一二日轉

村社宇佐八幡神社ハ大字里字北垣内一六九番地ニアリテ、祭神ハ應神天皇ニシテ本村ノ産土神ナリ。勸請時代詳ナラズ相傳ヘテ當社ハ往時神崎山ノ麓、鰐力淵ニ御鎮座其後武田城

ノ段ニ遷座、正治二五年ヨリ名古ノ芝ヘ・建治二年簾山ノ麓平石ニ移シ奉ル。平石ニ住吉 大

神ノ小祠アリ共ニ濱ノ宮ト詳ス。永仁四年丙申十一月網掛ニ移シ渚ノ森ト称ス、即チ現 今ノ地

ナリ。法燈國師年譜ニ建治二年十二月十七日濱宮奉遷神體於新宮之次師將願性 葛 山五郎藤

原景倫 遺付宝鏡一面納于神殿トアリ、コレ此地ニ遷宮ノ時ノ事ナラン。寶鏡今 尚ホ傳ハレリ。

法燈國師親筆ノ棟札アリ 文曰若以色見我不能見如來心即是佛即是心心佛 如此亘古亘今比

丘僧覺心 外ニ宇佐八幡宮ノ古キ額アリ、コレ亦法燈國師ノ染筆ナリト云 ヒ傳フ。

當地ハ應神天皇御由緒ノ地ナレハ、宮ヲ建シモノニテ宇佐八幡宮ト唱フルハ、社ヲ横濱ニ遷

座セシ時宇佐ノ式ヲトリシヨリ起リシナラン。永仁以降ノ棟札アリ(永仁四年 曆應三年

・應永十四年 應仁二年 明應五年 永正十五年 天文十六年 天正十一年 慶長十二年 等ナ

リ)。永仁四年ノ棟札ニ奉行左衛門尉源佐能神主坂上實綱トアリ、同社ノ境内ハ八百 五十三

坪ナリ。

故坂上濤江氏ハ坂上實綱ノ後ナリ。法燈國師年譜ニハ安貞元年西方寺 現今ノ大字門前ノ

興國寺ノコト)草創云々伊王某入道西蓮與坂上金吾宗正法名阿念、由良庄内按部任職ナリ。

捨部職内膏腴若干頃爲寺之恒産之権輿矣トアリ、所謂坂上金吾宗正トイフ人ハ、此辺ノ豪

家ニテ、願性ノ西方寺ヲ立テシ時、田邑ヲ寺ニ寄附セシナリ、意フニ實綱ハ其子孫ナルヘシ。

亦衣奈莊三尾川村坂上明神社、天授六年棟札ニ神主坂上長澄トアリ、同村里神ノ社ノ古キ 棟

札ニ、坂上長澄 坂上正澄 坂上満澄等ノ名アリ、皆同族ナルベシ。

村社國主神社ハ往古大江半三郎(末裔大江四郎市・東源太郎)末裔大阪市嶋ノ内八幡筋

竹田丈次郎・西四郎太夫(末裔中井佐助・中由三郎)末裔中井傳七・南彦次郎(末裔

不詳・北傳太夫)末裔井原傳十郎ノ六人協議ノ末、一祠ヲ建ツ。即チ國主神社是ナリ。 コノ

神ハ天ノ冬衣ノ神ノ御子ニシテ、天下ヲ經營シ民ニ農工商ノ業ヲ教ヘ、八百萬ノ神ヲ領 シ邪神

ヲ摧伏シ、仁惠ヲ給フ大國福ノ神ニシテ、智仁勇兼備ノ神ナリ。北傳太夫ハ其祠ニ 近キヲ以テ

掃除萬端ノ保護ヲナセリ。 寶物ハ寶鏡 大國主命ノ御神德ニ軸并ニ和歌 西海翁ノ筆・十五代將軍奉納金目錄法燈

國師ノ額面トス。

大字畑二里神社 祭神神功皇后アリ、土人皇后姫ノ宮トイフ、按スルニ祭神神功皇后ナル故ニ、皇后姫ノ宮トイヒ傳ヘシナラン。

大字中二白山社 祭神天照皇大神 熊野權現 白山權現・天神社 祭神菅原道眞アリ。大字門前二神明社 祭神天照皇大神アリ、享保十年六月勸請シタルモノナリトイフ。

大字里二里神社アリ 祭神詳ナラズ。

大字江ノ駒ニ牛頭天王社アリ 祭神不詳。

其他數多ノ小祠アリシガ、明治四十三年悉ク宇佐八幡宮ニ合祀セリ。例祭ハ毎年十月十七日 夏越祭禮ハ七月三十一日 合祀祭ハ毎年三月二日トス。

右神社ノ例祭ニハ屋臺三基ハ 大字阿戸 網代 横濱ヨリ持出テ、渡行式ニ從ヒ式終リテ太鼓 笛等ニヨリ、拍子ヲトリ巧妙ナル獅子舞ヲナシ、其他大字畑 中 門前ヨリハ往古ノ 甲冑ヲ着ケ武装シタルモノ騎手トナリ、母衣ヲ掛ケタル騎馬渡行式ニ從ヒ、式後競馬ノ催シアリ。

又夏越祭ニハ相撲及競馬等ノ餘興アリシモ、十數年前ヨリ右武装シタル騎馬ヲ廢セリ。其他合祀前ノ國主神社祭禮ニハ幟サシトテ、阿戸ノ海岸ニテ武人ヲ描ケル大ナル幟 ヲ持チ曲藝ヲナシ、又児童ハ青竹ヲ以テ馬ノ形ヲ作り、之ニ跨リテ海岸ニテ徒歩競争ヲナシタル事モアリ。又豊年且ツ漁業ノ好成績ノ年ニハ、網代ヨリ舞踊ノ撰手ヲ出シ太鼓 笛 カネ等ノ拍子ニテ遊技ヲ演シタルコトアリタルモ、現今ハ此等ノ餘興全ク廢セリ。

八幡神社棟札 數多アルモ其内ノ一ニヲ掲ク

一、表 梵字畧ス 宇佐八幡宮上蓋應仁二稔戊子二月十二日

奉行 地頭代 聡本 公文代 以体 納所能隆

大工 藤原木工尉 小工 藤原目等

神主 坂上弘実 生年 十二歳

伊勢坊宗禪依行 願主 敬白

裏 金輪聖皇天長地久御願円満庄内安穩五穀成就萬民快樂者也
棟札長三尺五寸 巾五寸

二、表 梵字畧ス 神功浩々聖德昭々凡有禱祈必蒙感應

奉行 當社宇佐宮上葺 永正十五年戊寅八月九日敬白

神主代 公文代 全淵

大工 地頭善甫 衛門尉

裏 有鄰謹書焉

三、表

延寶七己未歲暮春吉辰
奉再興長牀

願主 神主 惣左衛門

畑村莊屋 九郎左衛門 次良右衛門

中村莊屋 原新三郎 喜兵衛

門前村全 角左衛門 彌兵衛

里村全 次良左工門 德兵衛

橫濱村全 喜三兵衛

江ノ駒村全 五郎兵衛

由良谷中善男女人戮力造營焉
工匠 左近太夫 敬白

四、表

□*

元祿龍集壬午季春烏
願主 橫浜庄屋 善八郎 肝煎 善八郎

里 重右工門 次郎太夫

畑 八左工門 文右工門

門前 與次太夫 半三郎

中村 楠右工門 若太夫

江ノ駒 藤太夫 右近太夫 清兵衛

大工棟梁 源七

番匠 左近右工門 右近太夫 清兵衛

色即是佛々即是心
△梵字畧▽若以色是我以音聲求我是人行邪道不能見如來心佛如々亘古亘今

現住興國比丘梅龍祖芳書
神主 坂上又四郎貞則

五、表

□*

享保龍集夷則初八奠
願主 橫浜庄屋 七兵衛 肝煎 七郎兵衛

里 市郎兵衛 左兵衛

門前 市郎兵衛 善三郎

畑 新三郎 文右工門

江ノ駒 九郎左工門 又兵衛

大工棟梁 源七 番匠 左近左工門 六兵衛

裏

心即是佛々即是心
△梵字畧▽若以色見我以音聲求我是人行邪道不能是如來心佛如々亘古亘今

現住興國比丘巨海祖門書

*梵字省略されている

*梵字省略されている

六、表 奉再興當社寶永七庚寅年五月三日造營訖
神主 坂上又四郎

時大工 横浜 藤原 清兵衛
特別當職 井原元衛尉

裏 當社草創不詳何之代成焉老樹朽頽古宮荒廢因茲三縣衆徒新企再興懇祈神威庶幾榮及乎後裔譽流乎
來葉云爾時維庚寅之夏獨游溪梅春謹誌

社人 東 源太夫 左座大家 竹田半三郎
中家 竹田七工門 阿戸庄屋 庄兵衛
肝煎 市左工門 江ノ駒肝煎 長左工門
網代庄屋六郎兵衛 肝煎 介太夫

九、宗教

本村ニ於テ人民ノ信仰スル宗教ハ概シテ佛教信者多ク、其中眞宗 禪宗相半ハス。彼ノ天理教ノ如キハ僅々一部ノ村民ニヨリ信仰セラル。世人ヤ、モスレバ教義ヲ淺薄ナリトシ蔑視スルモノアレト、其實踐躬行ニ至リテハ範トスルニ足ルモノアリ。

沿革

紀元千八百八十七年後堀河天皇安貞元年葛山五郎景倫大工村 現今ノ大字門前へ、故主征夷大將軍源實朝及從二位禪尼政子ノ冥福ヲ祈ル爲メ、精舎ヲ建テ西方寺ト號シタリシガ、紀元二千年後村上天皇ノ興國元年寺號ヲ賜ヒ興國寺ト改稱ス。

紀元千九百五十年伏見天皇正應三年大字畑ニ長谷寺ヲ、紀元二千百四十五年後土御門天皇文明十七年、僧道西ト云フモノ南ニ蓮專寺ヲ、紀元二千百七十四年後柏原天皇永正十一年僧西願阿戸ニ教專寺ヲ、紀元二千二百五十八年後陽成天皇慶長二年僧明道横濱ニ光專寺ヲ、紀元二千二百八十四年後水尾天皇寛永元年僧明道江ノ駒ニ專福寺ヲ建立ス。續テ紀元二千二百九十年明正天皇ノ頃僧明導網代ニ寺ヲ建テ西光寺ト稱シタリシカ、紀元二千三百五十四年東山天皇ノ元禄七年念興寺ト改稱ス。

右ノ外大字中ノ東泉寺ハ記録ノ存スルモノナキヲ以テ詳ナラズト雖ドモ、興國寺建立前ハ淨土宗ナリシヲ、興國寺創立後法燈國師之ヲ禪宗ニ改メタルモノナリト云フヲ以テ、其創立ハ餘程古キモノナラン。又畑ニ念佛寺ト稱スル尼寺アルモ、創立ノ年月詳ナラス。

治二十八年大字中三百十四番地ニ天理教會嶋カ原教會由良港宣教所ヲ設ク。

明

十、興國寺

抑モ當寺ハ由良莊地頭葛山五郎景倫入道願性、安貞元年丁亥其故主右大臣兼征夷大將軍源實朝及從二位禪尼政子(公ノ母堂)ノ冥福追薦ノ爲メニ、精舎ヲ創建シ鷲峰山西方寺ト號シタリ。是ヨリ前藤原景倫ハ實朝公ヨリ入唐ノ命ヲ受ケ、鎮西ニ下リ博多ノ津ニテ

渡唐ノ順風ヲ待チ居タルニ、承久元年己卯正月二十七日、實朝公鶴岡ニテ薨去セラレタ

ルヲ聞キ、哀悼悲嘆ノ餘リ剃髮黒衣ノ人トナリ、直チニ高野山ニ登リ入道シテ、名ヲ願

號シ朝暮懇口ニ公ノ冥福ヲ祈ラレケルガ、二位禪尼之ヲ聞キ景倫ノ誠忠ヲ感シ、由

頭職トシ金剛三昧院ノ別當ニ補セラレタリ。願性之ヲ感戴シテ封地由良之莊ニツ

創建シタルモノニテ、始メハ眞言高野派ニ屬シタルモノ、如シ。越テ建長六年八

和尚宗ヨリ歸朝スルヤ、願性入道佃ノ代官(佃ハ當時修明門院ノ領)伊王左

蓮及坂上金吾宗政入道阿念等ト、同心戮力堂塔ヲ鼎新シ正嘉二年和尚ヲ

世トシテ禪刹ニ革ム。後村上天皇ノ朝興國元年ニ至リ寺號ヲ賜ヒ、興國

寺ト改稱ス。

後鳥羽天皇ノ尊牌ヲ祠堂ニ安シ追薦怠ルコトナシ。蓋シ所由アリ抑モ由良莊ハ修明門院

ノ御領ナリ因テ、皇后其代官伊王左衛門能茂入道西蓮ニ課セ、願性ニ就テ天皇ノ尊牌ヲ

本寺ニ降シ、一町餘歩ノ地ヲ本寺ニ寄附シ給ヒ、和尚ニ命シ冥福ヲ修セシメ玉フ

始メ和尚本寺ニ開堂スルヤ、四來ノ道俗雲ノ如ク集リ法孫簇出シ、各法幢ヲ樹テ寺ヲ開

キ、塔頭十ヶ寺ヲ始メ末派一百有餘ヲ有スルニ至ル。故ニ閩南第一禪林勅願道場日本法

燈派本山トシテ天下ニ鳴ルニ至ル。然ルニ時運一變シ天正十三年ノ兵燹ニ遇ヒ、諸堂宇

并舊記録等殆ント全部烏有ニ歸シ、僅ニ若干ノ佛像(寶物等ヲ遺スノミ)。是故ニ開祖以

ノ廢滅ヲ憂ヒ、當國西牟婁郡田辺海藏寺ノ天叔和尚ニ命シテ、本寺ノ旧跡ニツキ

興シ、開祖ノ香花ヲ護セシメ、山林八町四方ヲ寺境林トシ、且ツ寺領十三石ヲ

更ニ徳川南龍公屢本寺ニ參詣シ賜フニ、先守寄進ノ例典ヲ以テシ、傍ラ命

佛祖像ヲ修飾シ、亦資材ヲ寄セテ諸堂ヲ増築セシメラル。今ノ現存スル

建物是ナリ。

寄附セラル。シテ本尊以下ノ

ク本寺

來ニ

痛

寺門ヲ再

建物はナリ。

慶長年間天叔和尚再興以後、歴代妙心寺派ノ法系ヲ繼承シ來リ。爾來同派ノ末刹トシテ
 遇セラレタリシガ、庭田白山和尚之ヲ遺憾トシ、明治十二年頃ヨリ獨立本山鞆回ニ盡瘁
 セシモ其ノ運ニ至ラス、明治二十年十二月公然妙心寺派末寺ニ編入セラレ、同二十二年
 十月全派寺班別格地ヲ稟承ス。

因ニ當寺ニハ古代一千石餘ノ寺領アリシモノ、如シ。現今ニテモ衣奈 戸津井 小引
 大引 神谷 吹井等ヲ山内トイフハ、モト本山ノ領分内ナリシヲ以テ、カク唱ヘシモノ
 ナリト云フ。

財産及宝物ニツキ

明治十二年ノ頃ニハ水田ニ町歩以上、山林二十五町歩ヲ有セリ。又宝物トシテハ貴重ナル佛画等アリシ
 モ、獨立本山鞆回ノ訴訟ヲ起シ多額ノ費用ヲ要セシ爲メ、終ニ耕地及山林ヲ賣却セルヲ以テ、現今ニテ
 ハ寺領ノ財産ナリ又宝物中ノ貴重ナルモノハ、訴訟事件中及ヒ其ノ後ノ僧侶、之ヲ密賣セル爲メ現今藏
 スル宝物等ハ左ノ如シ

基本財産及境内坪数

- 一、基本財産 四段四畝十五歩
- 一、境内坪数 四町八反八畝二歩
- 一、境内山林 全 第四種官有地

主要ナル宝物及旧記目録

名稱	品質	数量	備考
本尊釋迦如來	木坐像	一	傳惠心僧都作
脇立四天王	木立像	四	傳聖德太子並運慶作
白衣觀世音	木坐像	一	徳川親自在院殿寄附
如意輪觀世音	全	一	徳川南龍公寄附
觀世音菩薩	木立像	一	宋理宗皇帝ノ念持佛 唐僧南岳禪師作
地藏菩薩	木立像	一	行基菩薩ノ作
開祖法燈國師	木倚榻像	一	國師生存中門弟等合力ニ成ル
全画像	絹地	一	覺惠禪師寧一山ノ讚 帝室博物館調査局鑑査状付
開祖口跳画像	全	一	當山孤山和尚ノ筆 宋ノ俊明極和尚讚 尤モ由緒アル画像ナリ
涅槃画像	紙	一	兆殿司筆
帆柱觀音画	絹地	一	唐画國師念持佛
寒山拾得画	紙	對一幅	月船筆

歷代住職氏名表

氏名	諡号	誕生	示寂	在職年数	備考
開祖 心地覺心	勅諡 法燈円明國師	承元元年	永仁六年十月十三日	四十一	九十四才
二世 孤峯覺明	全 三光國濟國師				
第二世以下慶長年間マテ記録焼失一付不明					
中興 天叔			慶長一九年十月五日	十四	
二世 雲山					
三世 鎮州					
四世 盛南紹厚			正保元年十一月十一日		
五世 関振一撥			寛文十一年十一月七日		
六世 瑞峯紹展			元禄七年九月二十五日		
七世 翠岩祖松			元禄九年七月四日		

過去帳 名称	全品質	数量 四冊	備考
宋無門和尚袈裟	麻	一肩	宋ノ現宗皇帝ヨリ賜リモノニシテ開祖法燈國師入宋ノ節無門和尚ヨリ之ヲ受ク
開祖傳來九條法衣	絹	全	京極女院一針三札ノ傳アリ
宝珠	瑠璃色	一	開祖國師ヨリ傳來
同由來記	紙	一卷	紀國造淑文筆
和歌	紙	全	聖護院常雄親王御染筆
和歌十首	全	全	華山院御染筆
誓度寺繪旨	全	七通一軸	御深草天皇 龜山天皇 御宇多天皇 後醍醐天皇ヨリ三光國師 誓渡寺住職中賜フモノ
誓渡寺領安堵証文	全	九通一軸	自正長元年至永仁元年
誓渡寺奉加狀	全	八通一軸	自永仁二年至同四年
全	全	四通一軸	明應七年
規言	全	一卷	正應六年七月十六日 開祖法燈國師眞筆
謹行規短	全	一	正應五年四月五日 法燈國師眞筆
緣起書	全	一卷一冊	卷八華山院藤原定誠公筆 冊八永正十四年當時百一世生稟和尚筆
緣起退轉記	全	一卷	天正十三年兵火後再興由來書
官符宣	全	一通	正應二年十一月二十八日付
殺生禁戒狀	全	全	正保五年徳川南龍公ヨリ下賜
安學禪師禪要法語	全	一卷	正治三年正月書
五ヶ條認可書	全	一本	明治二十年十二月本山妙心寺指令

開祖法燈円明國師畧傳

八世	梅龍祖芳			延享元年十月四日		
九世	月江紹佐			宝永五年五月十日		
十世	巨海祖門			享保十八年八月六日		
十一世	興山智穩			宝曆六年四月十三日		
十二世	堤道宗全			宝曆十二年八月二十六日		
十三世	定外劫古			安永十年二月八日		六十二
十四世	黙州祖漸			天明八年十一月十九日		四十七
十五世	環巖祖珍			文政三年四月廿九日	八	六十四
十六世	喚溪覺源			文政十三年十月六日	二十七	五十二
十七世	熊峯慈鑑			明治十四年三月四日	十八	九十二
十八世	白山慧恭	姓 庭田		明治十九年七月二十三日	三十五	七十二
十九世	石室祖琳	姓 榎本				
二十世	誠節至廉	姓 前田			十三	
二十一世	林宗祖傳	姓 林			十一	
二十二世	祖璉	姓 宮裡				

師諱ハ覺心心地ト号ス。信州神林縣ノ人ナリ。父ハ常澄氏。母戸隠觀音ヲ祈リ靈夢ニ感シテ妊娠。承元

元年丁卯降誕ス。幼少ヨリ聡明十五才出家シテ戸隠神宮院主ニ就テ、佛典儒經ヲ学ヒ十九才南郡高

野ニ遊ヒ、頗ル顕密ノ旨ニ通シ兼ネテ教外別傳ノ宗ヲ會ス。傳法院覺佛禪定院行勇、永平寺道元勝林寺

思順等悉ク当代ノ高僧大德ニシテ師ノ師家ナリ。師嘗テ入宋ノ志アリ。壇越願性入道行資ヲ賛助シ、建

長元年二月八日本邦ヲ発シ滄溟ヲ渡リ入宋、徑山癡絶道場荊山等ニ謁シ、育王天台大梅寺ノ勝地ヲ探

リ、宋ノ宝祐元年九月杭州護国寺ニ登リ、佛眼禪師無門和尚ニ參シ問答救番機縁契合シ、禪師ノ印証

リ、衣鉢ヲ授ケラル。師宋ニ留ルコト通ジテ六年ニシテ、建長六年八月帰朝スルヤ高野禪定院ニ住

テ正嘉二年願性ノ請ニ應シ本寺ニ開堂ス。師深ク林泉ノ幽致ヲ愛シ終老ノ念アリ。四集ノ道俗

徳遠近ニ風靡ス。称シテ関南第一ノ禪林ト云フ。勅命ニヨリ後鳥羽天皇ノ冥福ヲ修セシメ

条某相模國壽福寺ヲ以テ師ヲ請ス辞シテ行カス。弘安四年龜山太上天皇師ヲ召シテ

問シ玉ヒ。後宇多天皇ハ師ニ就テ戒法ヲ稟受シ玉フ。次テ勅請アリ勝林寺、今ノ京

ントシ玉ヘトモ師之ヲ固ク辞ス。弘安八年復ヒ差峩ノ皇居ニ謁ス。上皇及天皇

爾後屢々召サル。永仁六年十月十三日法ヲ孤山覺明、後出雲國雲樹寺開

船上山ニ謁シ三光國濟國師ノ號ヲ給フニ授ケ端然トシテ示寂ス。

祖トナル 親シク師資ノ義ヲ結ヒ玉フ。 都南禪寺ニ留住セシメ

ヲ教化シ、其 ヲ蒙

ヲ蒙

ヲ蒙

ヲ蒙

世壽九十有四歲塔ヲ思遠トイフ 龜山太上天皇賜フニ法燈禪師ノ号ヲ以テシ 後醍醐天皇加諡シテ円明國師ノ号ヲ賜フ

諸堂宇新築修補等ニカヲ致セシ歴代住職畧傳

中興六世瑞峯和尚諱ハ紹展在職年數未詳 徳川南龍公ヨリ本材ヲ寄進セラレ、本堂 庫裡 開山堂等ヲ改築ス。

七世 翠岩和尚諱ハ祖松在職年數未詳 鐘樓 祠堂ヲ新築ス
八世 梅龍和尚諱ハ祖芳在職中方丈ヲ修造シテ、開祖四百遠年忌ヲ嚴修ス

十一世 興山和尚諱ハ智穩本州加茂 即于浜中ノ人。十世巨海和尚二就テ得度嗣法開祖四百五十遠年忌ニ際シ庫院大門ヲ再建ス

十三世 定外和尚諱ハ却古本州田辺秋津ノ人、十一世興山和尚二就テ得度。十二世堤道和尚ノ法ヲ嗣ク。在職中開山昭堂 奥ノ院 及宝藏ヲ新築ス

十五世 環巖和尚諱ハ祖珍本州新宮ノ人。同地松巖院閑振和尚二就テ得度 天明八年十二月十四世默州和尚ノ法ヲ嗣ギ本寺ニ住ス。在職二十七年文化六年京都妙心寺ニ勅住。天顔二呎尺シテ紫袍ヲ賜フ。和尚在職中開祖五百遠年忌ニ際シ、本堂 書院ヲ改築シ其他講堂ヲ修補セラル。

時一寛政九年ナリ。
十六世 喚溪和尚諱ハ覺原本州田辺ノ人俗姓ハ榎本氏。堅田聖福寺橘州和尚二就テ得度 文化十一年十

五世環巖和尚ノ蹤ヲ襲フ。在職十有七年禪堂 鐘樓 拜所 下部屋等ヲ改築ス。
十七世 熊峯和尚諱ハ慈鑑、当莊内里邑二産ス(寺田玄太郎氏ノ祖、寛政十二年五月十五世環巖和尚

二就テ得度 天保三年四月本寺ニ住ス。在職十八年玄閑 寮舎 浴室ヲ再築ス
慶長年間再興以來歴代住職ノ努力ニ依リ、寺門ノ經營宜シキヲ得 諸堂完備シテ大ニ面目ヲ一新シタル

モ、明治維新ノ後寺領頓ニ減殺セラレ、莊田鳥有二属シ從ツテ堂宇ノ修繕スル暇ナク、爾來十余字ノ堂舎廢頽セシモ、現存スル建物ハ左ノ如シ。

本堂 七間半 拜所 七尺五寸 澄靈塔 二間 開山堂 三間 浴室 三間半 思遠塔 三間 方丈 六間
全 一間半 全 四間半 全 九間

寮舎 四間半 書院 四間半 廻廊 六間 禪堂 三間 廻廊 二間 鐘樓 三間 庫裡 十一間半
三間 五間 七尺五寸 全 七尺五寸 全 七尺五寸 全 七間半

廊下 四間半 門 一間 廊下 四間 玄関 四間半 鎮守廟 二尺五寸 龍王廟 二尺
七尺五寸 全 八尺五寸 全 五間半 四間半 一尺五寸

一尺八寸

辨天石 一尺四寸 寶卵塔石高八尺 下部屋 二間 浴室東司 二間半
右大正元年八月七日調査

十一、開山法燈國師心地覺心大和尚畧傳

御誕生ヨリ御出家時代

國師諱ハ覺心心地下號ス。法燈圓明國師ノ號ハ滅後龜山 後醍醐兩皇ヨリ賜フ所ナリ。信州神林縣ノ人、姓ハ恒氏又ハ常澄ト云フ。其母子ナキヲ常ニ愁ヘ、戸隱觀世音ニ祈願ヲ籠メ嗣子ヲ授ケ賜ハンコトヲ祈請セラレタリ。一夕觀音大士手自ラ燈ヲ燃シテ、授ケタマフ ト夢ミテ覺テ乃チ懷妊セラレントナン。

凡ソ聖人君子ノ世ニ出ツルニ方リ、種々ノ奇瑞ヲ見ルコト多シ。豈ニ不思議トセンヤ。譬ヘ

ハ佛母摩那夫人ノ白象ヲ懷クト夢ミテ釋尊ヲ降誕アラセ賜ヒシガ如シ。既ニ懷胎ノ御身ト ナ

リタマヒテ常澄氏夫妻ノ喜悅譬フルニ物ナク、只管安産ヲ祈ラレケル程ニ、人皇八十三 代土御

門ノ御宇承元元年丁卯ノ年、玉ノ如キ男児ヲ擧ゲタマヘリ。是レ心地覺心大和尚ト ナリシ人ナ

リケリ。生レナカラニシテ英氣人ニ逼リ、稍長シ物心付カセラル、ニツレ一ヲ聽 テ十ヲ知り給

ヒシゾ、實ニ梅檀ハ双葉ヨリ香シト。亦宜ナラスヤ十五歳ニシテ戸隱神宮院 主ニ就テ和漢ノ學

ヲ修メラル、ヤ、頗ル強記ニシテ殊ニ佛經ヲ愛テサセラレ、既ニ其大意 ヲ諳シ給ヒシトソ去ル程

ニ自ラ出家求道ノ念ヲ起シ、父母ニ其許諾ヲ請ハレケルモ容易ニ許 可ナカリシモ、強テ請ハレケ

ル儘ニ今ハ止ムルニ由ナク、遂ニ其志ヲ得テ十九歳ニシテ翠髮 ヲ剃リ方袍ヲ着ケ、即チ南都東

大寺ノ具足戒ヲ受ケンカ爲メニ、熊野參詣ノ道者ニ相伴ヒ 住ミ慣レシ神林ノ里ヲ後ニシテ出テ

ラレケリ。

御修行時代

同ジキ年南都ヨリ高野山ニ登リ、傳法院主覺佛阿闍梨ニ就テ密教ヲ學ヒ、更ニ金剛三昧院
(又ハ禪定院トモイフ) 住持行勇禪師(禪師ハ京都建仁寺開山千光榮西祖師ノ上足ニ謁
シテ禪戒ヲ受ケ、同時ニ服ヲ易ヘ孟ヲ受ケ給フ。又道範阿闍梨ニ就テ經軌等ヲ習ハセ給ヒ キ。
斯クシテ高野ニ留マリ刻若精勵セラレシコト、實ニ九年ニ速ビシトゾ。

國師二十九歳ノ時高野ヨリ大和國三輪山ニ到リ給フ。然ルニ鳥居ノミニシテ神殿ハ更ニ見

へズ、唯ダ竹ノ輪三重ニ縛シタル叢祠三アルノミ乃チ是レ社壇ナリ。故ニ三輪ノ大明神ト
シ奉ルト。其境域ハ老松 巨杉生ヒ茂リテ、日月ノ光モ到ラズ幽寂ノ感ニ打タレ給ヒシ
トゾ。 別業ニ僧坊アリ窓ヲ掩フ紙モ煤ケテ、黒ク垣ニ茂ル葛モイト細シ。コヽニ眞言師蓮道上人
トイヘル人アリ。之ニ就テ密宗灌頂ノ奥義ヲ究メラル。同壇ノ侶三人アリシト。

國師三十三歳ノ延應元年、高野山禪定院ノ行勇禪師ノ命ヲ承ケテ、紀綱ノ職ヲ司ラレタリ。

國師三十六歳城南深草ノ極樂寺道元和尚ニ就テ、菩薩戒ノ血脉ヲ傳授セラル。嘗テ道元禪

師入宋ノ時、天童山ノ如淨和尚ヨリ相傳ノ血脉ナリ。因ニ道元禪師ハ越ノ永平寺開山佛法

上人即承陽大師ナリ。建長元年三月二十八日博多ヨリ、宋ノ大船ニ乘テ渺々タル滄海ノ旅
程モ姜ナク、四月二十五日初テ宋ノ補陀落山ニ着キ、此處ニ數日滯留シテ長津ニ到リ、偶

本ノ覺儀 親明ノ二僧ニ遇ヒ、是ヨリ同行シテ初メ徑山ニ到ル。然ルニ此ノ頃ハ日本

船ノ往來禁制ノ旨アリタルヲ以テ、同行ノ二僧ハ明州ヨリ帰朝シ、國師タゞ一

持癡絶和尚ニ參シテ辛慘苦修スルコト二年。其後彼ノ地ニ留マリ修行、建

ニ上リ給フ。然ルニ滄海洋々タル航路中天俄ニ搔キ曇リ、疾風劇浪一

方リ、國師平生念持佛タル觀世音ノ小幡ヲ以テ櫓ノ上ニ掛ケテ、

恭敬シ給フコト數時、暁ニ到テ不思議ノ瑞相アリテ、月輪帆

ニ、船中十五夜ヨリモ明カナリ。時ニ舷外ハ一望闇昏々

ノ者一統萬死ノ中ニ一生存タリト云フ。實ニ六月

薩ノ出現シ給ヒシニテ、船中ノ衆人父母所生ノ

ト云フハ、奇特トイフモ愚カナリ。國師宋朝

ル。時ニ此風難ニ遇ヒ般若經一ニノ帙ヲ

シ、全函六百卷ニ爲シ給ヒシトゾ。 沈メテ龍宮ニ獻シ給ヒ。又後日本ニ於テ之ヲ摺リ足

是ニヨリ船頭智定方眼其一體ヲ請ヒ奉テ、船中ノ鎮護ト爲セシト云フ。國師四十三歳ヨリ

四十八歳ニ至ルマデ六年ニシテ、日本建長六年甲寅八月上旬帰朝、博多ノ津ヨリ日本ノ船

ニ移リ紀ノ港ニ着セラレタリ。夫ヨリ直ニ高野山ニ登リ給フ。一ハ願性ノ資助ニ依リ渡宋

懷ヲ遂ゲ給ヒシ其謝禮ヲ致サンガ爲メト、一ハ重テ行勇禪師ニ謁センガ爲ナリキ。

朝船中祈願ヲ籠メ給ヒシ觀音ノ小幡ハ、之ヲ帆柱ノ觀音ト稱シ當寺ノ寶物トシテ

法燈派ノ起源

之ヲ藏ス

因ニ歸

曩二安貞元年由良ノ地頭願性入道、其旧主源實朝公菩提ノ爲メ、精藍ヲ創立シテ鷲峰山西方寺ト號シ、眞言高野派ニ屬シ三十二年ヲ閱セシ。正嘉二年戊午新夕ニ諸堂ヲ建テ、又ハ

改修シテ禪刹ニ革メ、國師ヲ拜請シテ開山住持トナス。乃チ國師嗣書ヲ無門和尚ニ通シ、傳定院ノ住持ヲ辞シ、由良鷲峯ヘ遷リ給フヤ四來ノ道俗雲ノ如ク集リ、皆其德風ニ靡キタリ。特ニ國師ノ嗣法ノ徒多ク出テ、各法幢ヲ樹テ宗風ヲ闡揚セリ。故ニ閩南第一禪林ノ稱ヲ得ルニ至ル。其門葉末派百十餘寺ヲ有スル法燈派大本山トシテ、世間ニ喧傳セラル、ニ到ル。豈ニ亦國師ノ餘德ナラスヤ。

後鳥羽天皇御菩提所ノ由緒

抑モ鷲峰山興國寺ハ、人皇八十二代後鳥羽天皇ノ御菩提所ナリ。國師未夕鷲峰ニ到ラザルノ時、修明門院ヨリ御供養田一町四段歩ヲ御寄進アリ。爾來毎月二十二日御追吊ヲ修シ奉ル。

國師ノ御孝養

國師六十歲聖達上人ノ託ニ依リ、信州ニ行キ母堂ヲ省セラル。母堂モ亦國師十九歲ノ時別レテヨリ、四十三年間日夜暫クモ忘ル、時ナク、遂ニ國師ヲ尋ン爲メ國ヲ出テラル。然ルニ途中ニテ圖ラズ遭遇シ、相伴テ由良ヘ歸ラル。道中緇衣ヲ脱キ素色ノ直綴ヲ着ケテ、母堂ノ

後ヘニ扈從セラル。蓋シ中心孝ヲ致シ外儀嫌ヲ避ケ給ヒシナリ。途ニ熊野權現ニ參詣セラル、偶々峻坂ニ遇フ時ハ國師後ヨリ母堂ノ腰ヲ推シ、其歩ヲ資ケ給ヒシトゾ。鷲峰ニ着セラル、ヤ、門前西ノ谷ニ一室ヲ構ヘテ之ニ居ラシメ給ヒ。國師毎日省シテ安否ヲ問ヒ、只管孝養ノ誠ヲ致サル。母堂没後其庵室ヲ修禪寺ト爲シ、母堂ヲ開基トシテ慧日大師ノ法號ヲ奉ル。只管孝養ノ誠ヲ致

國師六十一歲四月十一日母堂慧日大師逝去セラル。仍テ墓ヲ寺東南結界ノ地ニ築キ、國師ノ外姑女弟ト、同墳ニ石浮圖三基ヲ安シ、懇口ニ進薦ヲ致サル。國師六十一歲ヨリ九十二歲ニ至ルマテ毎日跣足ニテ、其墓前ニ詣テ供物誦經等怠リ給フコトナカリキ。

如斯國師ノ慈母ニ對シ、生前死後ニ於ケル只管孝養ヲ盡シ給ヘルハ、又以テ後昆ノ模範トナスベキモノナラスヤ。

因ミニ慧日大師ヲ開基トセル修禪寺ハ、由來無檀無祿ニシテ且ツ星霜ヲ經ルニ隨ヒ、荒癡ニ付シ去リ香花ヲ供スル者モナキヲ以テ、前年興國寺ニ合併シテ慧日大師ノ位牌ヲ始メ、佛像等ハ悉ク興國寺ノ方丈ニ安置シテ、日夕ノ供養ヲナシツ、アリ。

國師御遷化

永仁六年國師九十二歳ノ四月十一日微疾アリ、飲食常ノ如クナラス。門下ノ道俗大ニ憂若

シテ日夜省問絶ヘス。幸ニシテ月末ニ至ツテ平癒シ、同二十四日西方寺ノ規法七箇條ヲ記

シテ遺誡トナシ給フ。同年十月十三日且ヨリ夕ニ至ルマテ、常ノ如ク僧俗ト應機對談アラ

レ、子ノ刻ニ到テ嚴力ニ威儀ヲ斂メ端坐寂然トシテ衆僧ヲ召シテ曰ク。我正ニ涅槃ニ

ト謂ヒ終テ遂遷化シ給ヒキ。龕ヲ停ムルコト八日ニシテ、同月二十日荼毘ニ付シ、

ヲ得ルコト無數、之ヲ思遠卯塔ノ下ニ葬ル。別ニ舍利塔ニ分納シテ後昆ニ拜セ

因ニ思遠ノ庵號ハ廬山ノ遠公ヲ思慕スルノ謂ナランカ。

◎珠石山長谷寺

大字畑千百五番地妙心寺派三等地

當寺開山法燈國師八十五才ノ正應四年三月十七日年齢十六、七ノ美女鷲峰山興國寺ニ来

リ、國師ニ戒文ヲ乞フ。國師意中ニ是レ龍女ナルコトヲ知り、三歸五戒ヲ示シ賜フ。女

ノ曰ク、三日ノ中必ラス報謝スヘシト謂ヒ了ツテ去ル。果シテ三日ノ後即チ十九日午時

國師從衆ヲ集メテ陞座說法ノ折柄、青冥中霹靂一声鷲峰ノ東南畑村箕谷ニ、宝珠一顆ヲ

ス時ニ蔽ヲ採ル男女十許輩雷声ヲ聞キ、驚テ空中ヲ見ルニ赤光アリ、其形大笠ノ如ク

シテ、光消工其ノ後種々ノ声アリ、或ハ多ク法螺ヲ吹クカ如ク、或ハ大鐘ヲ打ツ

笙吹クカ如シ。是ノ如キコトヤ、久フシテ、黒雲ノ如キモノ零降スルモノア

ク。其響波浪ノ起ルカ如シ、或ハ飛泉ノ落下スルニ似リ。近辺動揺シ

テ蔽ヲ採ル男女等之ヲ求ムレトモ見ヘス。山腹ニ登リテ之ヲ見ル

土ノ中ニ陷ル。手ヲ以テ之ヲ探ント欲スレドモ、太ダ熱クシ

鍬ヲ以テ撃チ、之ヲ谷ニ下シテ見ルニ、其ノ形粗円ニ

青黒ニテ鉄ニ似タルモ鉄ニアラス。石ニ似テ石

ヲ經テ鷲峰山寺ニ安置シ奉ル。國師之ヲ

石山長谷寺ト号ス。即チ國師ヲ開山

社ヲ建立シ鎮守トシテ祀ル。

◎開山國師寿碑宝篋印塔

始祖トス。茲ニ珠ヲ雨ラセシ女ハ辨財天神ナリトテ、一

無上ノ宝トシテ秘藏セラレタリ。其處ニ寺ヲ建テ珠

シテ少ク平ニ徑ニ寸、重サ金ノ如ク、色

ニアラス、之ヲ知ルモノナシ懦氣止マス、一日

テ地震ノ如シ。暫クシ

当寺開山法燈円明國師世壽八十五才之時在于鷺峰山興國禪寺陞座說法之次有一女子進前作礼告國師曰願爲某申授與五戒師則知是龍女授以菩薩戒女子曰無上妙法戒我今得信受三日之中可必謝此廣大之慈恩言畢没其形相正当人皇九十一代伏見院御宇正應四年三月十七日也同月十九日午刻國師宴座忽爾音樂起於空中須臾白日變更雷電震動奇物放光落於当山之峯頂響聞方四十里其地裂破岩石穿穴恰如彫成國師率大衆直詣当山顧視明珠三顆顯在石上國師得此三珠大歡喜於此前所見女子忽然出現告師曰我是龍女也此三珠自佛在世以來龍宮秘藏之如意宝珠也我今爲報前日之深恩奉獻於國師永可爲正法鎮護也又曰此山南海補陀山分境往古一夜大地震動所涌出之名山而希代之靈場也故欲令此奇瑞傳世知之自今号如意宝珠石山可建伽藍一字吾知國師尋常信仰和州長谷之觀世音矣長谷之別院在十一面觀世音小像是春日之神作而長谷觀世音同形靈像也勸請彼尊像于当山永爲本尊鑄就華鯨令鳴音於癸三時度脱六道衆生斯宝珠之所在安置辨財天應使爲鎮護此宝珠所穿之穴者宣教未世兒童透過然則諸病悉除身心安穩壽增長諸願滿足未來往生安養淨土不可疑我若妄語龍宮世界必涸渴言了没其形跡矣未曾有之奇瑞也於是速就花山院大納言師信郷具奉聞即蒙勅命宝珠一顆爲宝祚長久國家擁護深収石櫃埋藏当山普門峯頂一顆秘在鷺峰之前山以爲山門鎮護一顆収鷺峰宝库於此創建精舍於当山國師躬詣于和州長谷寺具演勅命及龍神之宣旨拜請十一面觀世音來安置本尊以此因縁号如意宝珠石山長谷寺先是國師歸朝之時從大唐將來辨財天毘沙門天大黑天之木像安置于当山爲鎮守永祈一山安寧國家吉祥也國師之在世如是不思議希有之事頗多矣里民間之競爭先後喜捨淨財明年正應五年三月鑄就華鯨掛于樓上鯨声吼山叡梵音徹大虛國師不堪歡喜住于茲三經春秋警癸四方衲子如風偃草化導遠近男女如水就下道德令人如是爲令後生知之書記其畧云爾

◎長谷寺宝物及什器

名稱	數	備考	名稱	數	備考
一、開山法燈國師像	一	木像	一、葉師如來像	一	石
一、釋迦誕生佛像	一	銅	一、地藏菩薩像	一	〃
一、本尊十一面觀音像	一	木像春日ノ神作	一、地藏菩薩像	一	木
一、韋馱天神像	一	木	一、辨財天神像	一	〃
一、辨財天神士像	一	法燈國師唐ヨリ持歸リタル	一、出山佛画像	一	乘円等
一、觀音大士像	一	紙	一、涅槃像	一	紙

一、達磨像	—	狩野主殿守定	一、開山口 <small>ぼうちょう</small> 誂像	—	—
一、白堂和尚像	—	絹	一、竹ノ画	—	明堂和尚
一、梵鐘	—	—	一、洪鐘	—	—
一、木魚	—	—	一、磬	—	—

◎瑞政山 蓮專寺 南千八百八十一番地

瑞政山蓮專寺ハ眞宗西本願寺派ニシテ、紀元二千百四十五年後土御門天皇、文明十七年僧道西ノ建立シタルモノナリ。永祿七年四月十三日織田信長ノ家臣佐久間右工門尉信盛

・同子息甚九郎信秀数多ノ郡勢ヲ引率シ來リ、興國寺ノ大門内ニアリシ四十六坊ヲ燒キ

拂ヒ、既二本坊へ攻メ寄セントセシ時当寺ノ道意ナルモノ、里村ノ田中ト云フ所ヨリ弓ヲ

以テ興國寺ノ難ヲ救ヒタリ。其時田地一ヶ所 卷物三本 紬三匹 金子十兩 行久ノ刀 兼氏ノ指副等ヲ賞與セラレタリ。境内ノ坪数百二十二坪。

◎歴代ノ住職

第一代	道西	大永	六年三月十三日	死
二代	祐道	元文	三年十月八日	—
三代	道明	永祿	三年二月二日	死
四代	道修	天正	八年四月十三日	—
五代	教信	慶長	十三年五月十九日	—
六代	道意	正保	四年五月二十日	—
七代	教祐	元禄	十年八月六日	—
八代	祐覚	宝永	七年十月七日	—
九代	道西	寛政	四年十月八日	—
十代	祐教	文政	二年五月十日	—
十一代	観道	明治	十二年十月二十五日	—
十二代	慈教	—	三三年十月十日	—

◎蓮專寺宝物

- 一、六字名号 文明年間八世慧燈大師ヨリ
- 一、阿弥陀仏立木像 元禄四年九月十日本願寺十一世寂如法主ヨリ
- 一、聖徳太子立画像 寛政七年三月本願寺十八世文如法主ヨリ
- 一、宗祖見真大師画像 享和三年三月十三日十九世本如法主ヨリ
- 一、本願寺八世慧燈大師画像 天保四年三月二十世廣如法主ヨリ

◎教專寺 大字阿戸

江南山天龍院教專寺ハ真宗西本願寺派ニシテ、紀元二千百七十四年後柏原天皇、永正十一年僧西願ノ創立シタルモノナリ。其後堂宇荒廢シタルヲ以テ文化年間僧速成之ヲ再建、現在ノ本掌 僧坊 鐘樓是ナリ。

元治元年正月六日將軍徳川慶喜公帆船ニテ御來郡、当由良港ニ御碇泊同七日午前十時網代へ御上陸、徒歩ニテ横浜ヲ經テ御來寺、終日御休息ノ上御入浴夕方御帰船ナサレタリ。當時ノ事トテ將軍ヲ見ルコト神ノ如ク。地方ノ人民雲集コノ浴湯ヲ持テ歸リ、飲用シタリト云フ、ウソノ如キ傳説ガアル。

◎歴代ノ住職

第一代	西願							
第二代	西願							
第三代	西願							
第四代	西願							
第五代	淨祐	延宝六年六月二十二日						死
第六代	聞隆	宝永四年九月二日						死
第七代	聞哲	明和三年七月十一日						死
第八代	智定	宝曆三年十月廿三日						死
第九代	玄隆	宝曆九年二月六日						死
第十代	鳳山	安永二年七月十一日						死
第十一代	智鑑	天明二年三月八日						死
第十二代	速成							死
第十三代	即住	天保八年十一月二日						死
第十四代	惠通	天保十一年五月十一日						死
第十五代	智芳	嘉永二年四月二十六日						死

◎教專寺宝物

一、本尊阿弥陀如来立像	延宝	元年十二月五日
一、見真大師御影	正徳	元年六月八日
一、慧燈大師御影	天明	二年三月二十三日
一、聖徳太子及七高僧	宝永	六年四月五日

- 一、 堪如上人御影 寛延二年八月十一日
- 一、 本如上人御影 嘉永二年七月二十九日
- 一、 明如上人御影 明治四十二年十一月十一日
- 一、 見眞大師縁起 宝永十三年三月三十日
- 一、 明如上人御詠歌御染筆 明治八年九月二十九日

◎光專寺

大字里ノ内横浜

本寺ハ眞宗本願寺派ニシテ、紀元二千二百五十八年後陽成天皇慶長三年八月、僧明道ノ開基ニシテ、本堂ハ六間四方 鐘樓ハ元禄二年一月建立シタルモノナリ。

◎光專寺宝物

- 一、 開基佛画像 慶長三年八月十三日 明道
- 一、 見眞大師画像 寛永十三年九月二十一日 妙善
- 一、 惠燈大師画像 天明二年三月二十一日 義善
- 一、 七高祖画像 宝永三年三月二十日 善積
- 一、 聖徳太子像 全
- 一、 文如上人画像 文化十年十一月二十四日 素局
- 一、 見眞大師一代記 正徳六年六月十一日 善哲

◎專福寺

大字江ノ駒

北星山專福寺ハ紀元二千二百八十四年、後水尾天皇寛永元年十二月八日僧明道ノ開基ニシテ、眞宗本願寺派ニ屬ス。其後堂宇荒廢セシヲ以テ、安政六年七月再建セリ。即于現今存スルモノナリ。

◎歴代ノ住職

第一代	第二代	第三代	第四代	第五代	第六代	第七代	第八代
明道	善應	順淨	智善	一道	超海	眞超	龍空
住職及死亡年月不詳	寛永九年十二月十日	文化十一年十一月十日	文化十三年十一月十日	文化十三年十一月十日	全化十三年二月七日	弘化三年二月廿九日	嘉永元年十月十三日
死	〃	〃	〃	住職	住職	住職	住職
				天保九年五月十六日	弘化二年九月二十四日	全化四年九月二十九日	明治十三年一月七日
				死	〃	〃	〃

九代 円諦

◎専福寺宝物

- 一、本尊阿弥陀如来木像 寛永元年十二月八日本願寺十四世良如上人ヨリ
- 一、阿弥陀如来立画像 全 七年十二月八日本願寺ヨリ
- 一、宗祖見真大師画像 文化六年本願寺十八世文如上人ヨリ
- 一、文如上人画像 全
- 一、聖德太子画像 全
- 一、七高祖画像 全

◎念興寺

大字網代

潜龍山念興寺ハ紀元二千二百九十年明正天皇寛永年間、僧明導ノ創立シタルモノニシテ、當時西光寺ト称シタリシカ、元禄七年尾張國武儀郡金山村念興寺住職祐海当寺ニ來リ、寺務ヲ執行シ寺号ヲ念興寺ト改ム。當時堂宇ヲ改築スルノ計画ヲナセシモ、時機至ラズ、再爾歲月ヲ經過シ漸ク文化四年ニ至リ再建シタリ。即于現今ノ建物是ナリ。

◎歴代ノ住職

第一代	住職年月及死亡年月不詳	死
明導	三年十一月十七日	死
了仁	元禄元年十二月七日	死
了信	元禄元年十二月七日	死
賢祐	元禄八年五月十六日	死
善随	享保六年四月十日	死
了賢	宝曆十二年四月八日	死
了扁	天明四年正月十五日	死
了覚	明和六年	死
了瑞	文化十二年正月二十一日	死
了音	天保九年正月二十五日	死
了諦	慶應二年十月二十三日	死

◎念興寺宝物

- 一、本尊阿弥陀如来木像 宝永二年四月二十六日本願寺十四世寂如上人ヨリ
- 一、阿弥陀佛立画像 大永年間
- 一、宗祖見真大師画像 宝永二年四月二十六日寂如上人ヨリ
- 一、慧燈大師画像 全

- 一、聖徳太子画像 宝永二年四月二十六日寂如上人ヨリ
- 二、本願寺十三世良如上人画像 "
- 三、六字名号一軸 大永年間
- 四、本願寺九世實如上人真筆
- 五、見眞大師繪傳四軸 正徳六年六月十一日寂如上人ヨリ
- 六、額面 華嚴鳳潭ノ書

◎東泉寺

大字中

靈巖山東泉寺ハ臨濟宗妙心寺派ニシテ興國寺末ナリ。上古八字田首二百九十三番地ニアリシカ、寛政四年十二月現今ノ位置ニ移轉。改築シタルモノニテ、其創立ハ餘程古キモノナラン。

東泉寺ノ記録ニ依レハ原三郎太夫ノ開基トアリ、然シ原氏ノ当地ニ来リシハ天正年間ナリ。然ルニ当寺ハソレ以前ヨリ存セシモノナレハ、原氏ハ一時荒廢シタルモノヲ再興セシモノナランカ。詳細ナル古記録ノ存スルモノナキヲ以テ詳ナラス。

◎歴代住職

次第不同

昌岳	宝曆二年十一月二十日	寂
中興翠岩	文禄九年七月五日	"
守山	天明四年十二月二十七日	"
玄理慧快	全七年六月十五日	"
堅堂祖確	享和四年正月四日	"
巨海祖海	慶應元年五月九日	"

◎東泉寺宝物

- 一、観音菩薩木立像 二体
- 二、大師如来木立像
- 三、涅槃像 絹地 一軸
- 四、観音画像 絹地 一軸
- 五、偉多天木像

◎念佛寺

大字畑

無量山念佛寺ハ臨濟宗妙心寺派ナリ。当寺ニハ古記録ノ存スルモノナキヲ以テ、創立年

月其他詳ナラス。現存ノ本堂及庫裡ハ慶應元年尼僧了蓮ノ改築シタルモノナリ。明治二十六年四月五日妙心寺派寺班等外地ノ資格ニ稟承ス。

◎歴代住職不詳

禪戒淨心禪者 道心者ニテ南部本庄ニ生ル長谷寺白堂和尚ノ徒 嘉永二年八月十七日死
了蓮尼首座 円覚ト号ス和歌山市ニ生ル在職三十年 明治十四年十二月五日死

◎念佛寺宝物

- 一、本尊薬師如来石像
- 一、大日如来半像
- 一、阿弥陀如来木像
- 一、觀世音木像
- 一、地藏菩薩木像
- 一、涅槃画像一軸

追記 ◎東泉寺

靈巖山東泉寺ハ臨濟宗妙心寺派ニテ興國寺末ナリ。モト淨土宗ニテ原右衛門太夫(初メ三郎太夫ト云フ)ノ開基(天正ヨリ文祿 慶長ノ間ナルモ不詳)シタルモノニテ、其後衣奈村大字三尾川

ノ寺ト交換シテ禪宗ニ改メタルモノニテ、創立當寺ハ字田首ニ九三番地ニアリシヲ、寛政四年十二月(大正五年マデ百二十五年) 現今ノ位置ニ移轉改築シタルモノナリ(因ニ當寺ニ安像淨土宗用ノモノナリ)。置ノ佛

大字中字羽助ニ庵谷トイフアリ。興國寺創立前ヨリ其處ニ眞言ノ小庵アリタルモ中古廢絶シタルモノナリト。余同山ヲ畑ニ開鑿中図ラズモ眞言宗派ニ属スル、數基ノ石碑及數尺ノ地下ヨリ奇型ノ鬼瓦其
他數個ノ壺ヲ発掘シタルモ、壺ハ何レモ発掘ノ際破碎セリ。

◎天理教嶋ヶ原教會由良港宣教所

明治二十八年十二月十二日天理教嶋ヶ原教會ノ信徒ニ加入シ、同二十九年五月一日神式

ニ復シタルニツキ、神道管長從三位子爵稲葉正邦殿ヨリ賞詞ヲ授與サレタリ。同三十五年十一月五日神道管長正三位子爵本多康穰殿ヨリ、教導職試補ヲ授與サレ、同三十八年六月十七日神道天理教嶋ヶ原教會長少教正平野檜造殿ヨリ講元ヲ命セラル。爾後逐年信徒増加スルニヨリ布教所設置ヲ出願、同三十八年十一月十六日天理教會本部ヨリ、由良

港布教所ヲ認可サレ直ニ地方廳へ出願、全三十九年五月二十八日和歌山縣知事伯爵清棲家教殿ヨリ認可サレ、全四十年九月二十三日神道管長正三位子爵本多康穰殿ヨリ權訓導

二補セラル。全四十二年一月十日天理教管長勲六等中山新治郎殿ヨリ訓導ニ補セラル。當時信徒ノ數百二十戸ニ達シタルニツキ、從來由良港布教所ナリシヲ、全四十二年二月六日ニ由良港宣教所ト改稱セリ。コノ間原新五郎ハ所長ノ任ニアタリ布教ニ從事シツ、シモ、全四十四年十二月十九日ニ死亡シタルガ養子勝藏ハ、全四十二年十二月十三日天理教會本部ヨリ授訓ヲ授與セラレ、大正元年九月十一日私立天理教特別科ニ入り、二月十四日卒業全二年六月十九日天理教管長ヨリ權訓導ニ補セラレ、全二年七月三十日全管長ヨリ天理教由良港宣教所長ヲ命ゼラレタリ。

十二、民俗

本村民俗ハ明治維新前マテハ至ツテ質朴ニシテ、神官、僧侶、醫師、里正ヲ除キテハ、中流以上ノモノト雖トモ、表付ノ下駄ヲ穿ツモノ、又日傘ヲ使用スルモノ全村ヲ通シテ一

・二名ニ過キス。其他ハ悉ク編笠又ハ竹製ノ笠ヲ用ヒタリシガ、其後漸々風俗思想共變

來シツ、アリシガ、日清、日露ノ二大戦役ヲ經テ一般ニ奢侈ニ流レ、農、商、漁、工家ノ子弟

ニテ絹服ヲ纏ヒ、帽子ヲ被リ表付ノ下駄ヲ穿ツニ至ル。又家屋ノ如キモ明治、二十二年以後茅

屋ノ瓦葺トナレルモノ甚ハタ多シ。而シテ教育ノ普及ニ至リテハ維新前マ、デハ中流以下ノモノ

ハ十中八、九ハ文盲ノモノ、而己ナリシガ政府ノ奨励ト向學心ノ發達、シタル爲メ非常ニ進歩

シタリ。然ルニ敦厚ノ美風ニ至リテハ却テ退歩シ、昔日ノ如クナ、ラサルハ誠ニ遺憾ノ極ナリ。

然レトモ純農地部落ノ人民ハ、一般ニ今尚風俗醇厚ニシテ、素朴ナリ。

之ヲ慨言スレハ我力由良村ノ人民ハ守旧ノ精神ニ富ムモ、積極的ノ精神ト公德心乏シク器

局狹小、小成ニ安ンシ新奇ニ走り物ニアキ易キ風アリテ、何事ヲナスニモ一時ニ渾身ノ精

力ヲ注クモ忽チ冷却シテ又顧ミルコトナシ。カクテハ一大事業ヲナスコト覺束ナケン、又、ハ大

空シク時間ヲ費シテ意トセサル缺点アリ。然レドモ短所アルト同時ニ又長所アリ。本村、二吾人ハ

部分農家ナルヲ以テ、人情醇厚着實ニシテ愛國心ニ富ミ一般ニ勤儉ノ美風アリ。故、二吾人ハ

コノ美風ヲ保全シ益々助長スルト同時ニ缺点ヲ醫正シ、一般ノ品性ヲ高メルコトニ勉メザル

ベカラス。

左ニ明治三十六年以降ノ犯罪者ノ統計ヲ掲ケン。

由良村民犯罪者取調表

犯罪名	明治三六年	全三七年	全三八年	全三九年	全四〇年	全四一年
銃砲火藥類取締法違反						
醫師法違反						
娼妓取締法違反						一
賭博犯						
肥料取締法違反						
贓物故買犯						
男女混浴罪						
横領罪						
官職詐訴罪						
詐偽罪						
酒造税法違反		二		一		
誣告罪						

犯罪名	明治三六年	全三七年	全三八年	全三九年	全四〇年	全四一年
殺人未遂罪	一					
漁業法取締違反						
質屋取締違反		一				
徵兵令違反						
窃盜罪		五	三	二		三六
古物商取締違反						
海軍刑法						
陸軍刑法					二	
墮胎罪						
傷害罪						
外國旅行券違反						
放火罪						一
傳染病豫防法取締違反						

犯罪名	明治四二年	全四三年	全四四年	大正元年
銃砲火藥類取締法違反			一	
醫師法違反		一		
娼妓取締法違反	一			
賭博犯	四		一六	

十三、衛生

◎ 沿革

明治十二年ヨリ衛生委員ナルモノアリシモ、人民一般ニ衛生思想乏シク時々悪疫流行シ、
 慘状ヲ極メタルコトモアリキ。然ルニ明治二十二年町村制實施ト共ニ衛生委員ヲ置キ、
 嚴密ニ各戸清潔法ヲ實行セシムルト、教育普及ノ結果人民ノ公共衛生ニ注意スルニ至リ

タルトヲ以テ、悪疫ヲ未發ニ防グ事ヲ得ルニ至レリ。然ルニ不幸ニモ大正元年八月中赤痢患
 者ヲ出シタリト雖ドモ、當局ノ周蜜ナル注意ト醫師ノ執心ニヨリ、他ニ蔓延セサリシ。又種
 痘ハ毎年之ヲ施行シ種痘醫手當及痘苗其他ノ費用ハ、悉ク村費ヲ以テ支辨ス。又小學校ニハ

犯罪名	明治四二年	全四三年	全四四年	大正元年
肥料取締法違反		三		
贓物故買犯人		一		
男女混浴罪			一	
横領罪	一			
官職詐訴罪				
詐偽罪		一		
酒造税法違反				一
誣告罪			一	
殺人未遂罪				
漁業法取締違反		二		
質屋取締違反				
徵兵令違反	五	一		
窃盜罪	二	一	三	
古物商取締違反				一
海軍刑法				
陸軍刑法				
墮胎罪			三	
傷害罪				
外國旅行券違反				
放火罪			一	
傳染病豫防法取締違反				一

校醫ヲ置キ學校衛生ノ任ニ當ラシメ、時々公衆衛生其他ノ講話ヲナシ衛生シツトアリ。殊ニ「トラホーム」ノ恐ルベキトヲ、繪画或ハ模型ニヨリ校ニテ毎日放課後校醫ノ指導ニ基キ、教師ニヨリ治療ヲ受ケツ、

上ノ智識ヲ付與
懇々説キ示シ、一方學

明治四十二年度學校兒童トラホーム患者數左ノ如シ

兒童數		トラホーム患者	
女	男	女	男
一九六	二三四	八	二〇

本村内ニテモ農家ノ住宅ハ、土地乾燥且ツ殆ド家屋ノ全部ハ南面スルヲ以テ、日光ノ照射ヨロシ。又海岸ノ地モ空氣ノ流通ヨロシク極少部分ヲ除ク外ハ、家屋清潔ニシテ排水宜シキト近年清潔法督勵ノ爲メ、悪疫ノ流行スルコトナク患者ノ數モ少シ。今左ニ本村

住民

明治四十四年中住民及患者

本村住民數		患者數
男	女	
一七六五	一七一八	三〇六
		二八八

死亡者表

年令	男女		死亡者數
	男	女	
十歳以下	七	二	九
二十歳以下	〇	一	一
三十歳以下	〇	〇	〇
四十歳以下	〇	二	二
五十歳以下	〇	〇	〇
六十歳以下	一	〇	一
七十歳以下	一	五	六
八十歳以下	三	一	四
九十歳以下	四	二	六

五十歳以上長壽者表

年令	男	女
五十歳以上	一七七	一六七
六十歳以上	一一八	一一五
七十歳以上	三五	四九
八十歳以上	一〇	一八
九十歳以上	二	一

避病舎ハ數年前大字里字北山一三三番地ニ設置シタルモ、旧校舎ノ用材ヲ以テ建築シタルモノニテ、室内狹隘ナルノミナラス設備最モ不完全ナリシガ、大正四年一月五日白崎村ト聯合シテ風光明媚ナル、大字江ノ駒永井二三番地ヲトシ、新ニ完全ナル理想的ノ隔離病舎ヲ建築セリ。之ニ要シタル經費實ニ四千四百六十六円三十八錢九厘ナリトス。

本村二ハ明治初年畑二淺井長重氏 横浜二那須周達氏 鈴木泰藏氏ノ両醫アリキ。コノ内淺井 那須ノ二氏ハ漢方ヲ主トセリ。鈴木氏ハ比較的良醫ナリシモ早逝其後良醫ナキ

ヲ恨ミタリシガ、明治二十六年八月久保田煥氏小松原ヨリ來リ開業セリ。同氏ハ和歌山 縣立甲種醫學專門學校出身ニテ全科醫ナリ。由良村尋常高等小學校々醫ヲ兼テトトラホ 治療等二ハ最モ力ヲ盡サル。其他種痘及衛生等ニ関シ熱心ニ盡力サレツヽアリ。 一六

明治四十四年十二月大字里寺田鶴松氏 京都府立醫學學校ヲ卒ヘ歸郷横濱ニ開業シ、最モ深切ニ治療ヲ施シツヽアリ。

十四、交通

交通ハ旅客 行人ノ往來ヲ便ニシ、各種ノ物貨ヲ運搬スル唯一ノ方便ナルヲ以テ、農 工商其他各種生業ノ盛衰ハ交通運輸機關ノ發達ト否トニヨルナリ。故ニ産業ヲ盛大ニ 振

興シ、商業ヲ大ニ營マント欲セハ先ツ須ラク交通ヲ完全ニセサルヘカラス。然ルニ本村 戶喜十郎氏 郡ノ北部ニ偏在シ、加フルニ道路嶮ニシテ車馬通行ノ便ナカリシガ、縣會議員瀨 等大二盡力シ、明治二十二年有田郡殿村ヨリ鹿ヶ背ヲ經テ畑ニ至リ、村中ヲ 縱貫シ阿戸ヨ

リ山腹ヲ穿テ、隧道ヲ設ケ西内原村池田ニ通スル路幅ニ間ノ熊野街道ヲ開 鑿シタルヲ以テ 交通至便トナレリ。然ルニ有田郡殿村ヨリ畑ニ至山腹ノ道路ノ迂遠ナル 爲ノ物資運搬ハ云フ 二及バズ、旅客ノ通行スルモノナク遂ニ近年廢道ノ止ムナキニ至レリ。

陸上ノ交通ハ上述ノ如ク便ナラズ。海上ニ於テモ良灣アルニモ拘ハラズ、運輸機關ノ完 備セサル爲メ甚ハタ不便ヲ極メタリシガ、明治四十三年五月二十六日紀伊汽船會社ヲ組 織シ、和歌山 大阪 神戸 兵庫等トノ航海ヲ開始セシモ、一ケ年ニシテ同會社ハ解散 スル

ノ悲運ニ陥レリ。コハ地方民後援ノ薄弱ナルニ基因ストナシ。次テ共同汽船會社ヲ 組織シ營 業ヲ開始シタルモ、亦數月ニシテ同會社モ解散スルニ至レリ。故ニ今ハ唯僅ニ 數艘ノ和船ニヨ

リテ、大阪及和歌山トノ間ヲ航海スルモノアルノミ。 熊野街道ニ通スル由良川ニ架橋アリ、由良橋トイヒ東内原村大字原谷ニ通スル。由良川 二 一橋アリ、ミノゴ橋トイヒ其他寺田橋 白田橋等ハ皆由良川ノ本 支流ニ架セルモノ 二 シテ、何レモ車馬ノ通行ハ自在ナリ。

輻 現今本村ニテ使用スル車數ハ、四輪牛車五輛 二輪車一輛 自轉車十五輛 荷車二十一輛 免稅車二十四輛ナリトス。

本村大字里ニ由良郵便電信局アリ。大正三年二月六日ヨリ電話ヲ開始シタル爲メ、通信上一層便利トナレリ。

十五、各種團體

◎本村ニテ日本赤十字社へ始メテ加入セシハ明治二十八年四月二十二日ニシテ、其當時加盟者僅一九名ナリシガ、爾來当局ノ獎勵ノ結果現今ハ三十一名トナレリ。

◎尚武會ハ明治三十年六月ノ創立ニシテ其當時會員二十九名ナリシガ、現今三百七十二名ノ會員ヲ有シ、事業トシテ軍人ヲ慰勞 或ハ獎勵シ、及家族ノ救護等ニ力ヲ盡ス。

◎村農會ハ明治三十三年四月ノ創立ニシテ、其當時ノ會員數ハ三十一名ナリシガ、爾來増加シ現今ハ五百三十四名ノ會員ヲ有ス。事業トシテハ農事ノ改良 進歩 發達ヲ目的トシ、時々講演會ヲ開キ柑橘ノ害虫ヨリ螟虫 浮塵子等ノ驅除 豫防等ニツキ盡力シツヽ

ア

◎青年會ハ明治三十五年四月十日大字畑ニ成立シタルヲ創メトシ、爾後各字ニ成立シタルガ大正五年五月二十日日本縣訓令ニ基キ、從來ノ割拠的情弊ヲ一掃シ一青年會ニ統一セリ。

施設事業トシテハ會員ノ精神修養 貯金 殖林 道路ノ修繕 火災ノ消防 水難救助等ニシテ、會員ノ貯金高五一五五一五 殖林段別二町八段三畝餘歩トス。

◎愛国婦人會ハ明治三十八年六月六日僅力二四名ノ加入者アリシノミナリシガ、現今ハ二十六名達セリ。

◎在郷軍人會ハ明治三十八年十月創立ニシテ、當時會員四十一名ナリシガ、現今ハ七十八名ニ達セリ。事業トシテハ壯丁ノ豫習教育及入退當者ノ送迎 現役者ノ慰問 戰病死者

遺族ノ救護等トス。

各青年會表 明治四十五年四月

大字名	會名	創立年月	創立當時會員	現今ノ會員	貯金高	殖林段別	會長氏名
畑	尚義會	明治三十五年四月十日	七十二	一二三	八五四三〇	一町二段歩	谷口 松三郎

第一條

本會ハ由良村青年會ト稱シ事務所ヲ由良村尋常高等小學校ニ置ク
本會ニ左ノ支會ヲ設ケ事務所ヲ各支會場ニ置ク
阿戸支會 網代支會 江ノ駒支會 南支會 横濱支會 里支會 門前支會 中支會 畑支

會

第三條

本會ハ教育勅語 戊申詔書並ニ軍人勅諭ノ御趣旨ヲ奉体シ忠良ナル國民及健全ナル公民タル素質ヲ養成スルヲ以テ本旨トス

第四條

本會ハ正會員及特別會員ヲ以テ組織ス
一、正會員ハ本村現住者ニシテ滿十二歳以上二十歳以下ノ男子トス
二、特別會員ハ本村現住滿廿五歳以下ノ男子ニシテ會長ノ許可ヲ江タルモノトス

第五條

本會ハ第三條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲナス
一、智徳ノ修養
イ 勅語勅諭奉讀會
儀式會合等ノ場合ニ教育勅語 戊申詔書 軍人へノ勅諭ヲ奉讀 訓諭ヲシテ聖旨ノ服膺ヲ期ス
ロ 農業補習學校入學
正會員ハ必ラズ本校ヲ卒業スベキモノトス

ハ 談話會

毎月一回各支會ニ於テ定日ニ會員相互ノ經驗談又ハ修養談ヲ交換シ又名望家 老農ノ

談話ヲ聞キ會員ノ修養ニ資ス

又年ニ回農業利用聯合會ヲ開ク

ニ 講習 講話會

適當ナル時期ヲ見計ラヒ名士ヲ聘シテ開會シ聖旨ノ普及徹底ニカメ自治精神ノ涵養ヲ

圖ル

ホ 圖書閱覽

郡立圖書館圖書巡回文庫圖書利用文庫設立

新聞雜誌購讀常識修養ヲナス

ヘ 視 察

支會相互又ハ他ノ優良團體等ノ實況ヲ視察シ其運路ヲ察シ相提携シテ發展ヲ期ス

二、風俗矯正

實踐事項ノ協議ヲナシ聖旨ノ服膺實行ヲ期シ陋習ヲ打破シ範ヲ社會ニ示ス

三、身體鍛鍊

遠足 運動會 體操 角力 擊劍 水泳 操舟ノ技ヲ選ビ、体力増進ヲ圖リ眞ニ剛

健尚武ノ氣風ヲ養ヒ兼テ禮節及規律訓練ヲナス

四、産業上ノ智能習得

植林 開墾 稚蚕共同飼育 共同苗代 品評會 實業視察等諸項ヲ選ミ産業上實際ノ智能ヲ修得セシム

五、貯蓄

本會基本財産蓄積 會員共同貯金ヲナス
六、公共心養成

増業毎月會費トシテ出ス製繩ニ從事ス
道路修繕 水難 火災 風害等ノ際ニ於ケル應急事業幫助
少年ヲ保護善導シ出席獎勵 復習指南

七、慈善

軍人ノ軍屬 其他公共事業ニ盡力シタルモノ、遺族、又ハ鰥寡孤獨貧窮者ニ對スル金員又ハ勞力幫助

八、表彰

本會ノ爲メ特ニ功勞アルモノ、又ハ會員中品行方正 勤勉力行ノモノ、衆ノ模範トナスニ足ルモノハ、本會總會ニ於テ表彰ス

第六條

本會ニ左ノ役員ヲ置ク
會長 副會長 各支會長 一名
幹事 本支會 各二名 顧問各支會 一名

第七條

會長ニハ村長ヲ推戴シ、副會長及他ノ役員ハ會長之ヲ囑托ス
役員ノ職務左ノ如シ

第八條

會長ハ本會ヲ指導統督シ會議々長トナル
副會長ハ會長ヲ助ケ會務ヲ處理シ、會長事故アルトキ之ガ代理ヲナス
支會長ハ本會役員ト協心努力 支會ノ指導開發ニ從事ス

第九條

幹事ハ會長 副會長 支會長ノ指導ヲ受ケ、庶務 會計ニ從事ス
顧問ハ重要事項ノ諮問ニ應ジ、又ハ建議シ指導處理ス
役員ハ名譽職トシ會長ヲ除ク外任期ハ二ケ年トシ、任期滿了後ト雖ドモ後任者ノ事務引續迄其職務ヲ行フ

第十條

學識德望アルモノハ推シテ名譽顧問トシ、本會ノ目的ヲ贊助功勞アルモノヲ推シテ名譽贊助員トス
名譽顧問 名譽贊助員ハ會長ノ諮詢ニ應ジテ意見ヲ陳述シ、又ハ之ヲ建議シ其需ニ應ジテ會合

第十一條

本會ハ毎年二回總會ヲ開キ、毎月一回役員會ヲ開ク。組合長ニ於テ必要ト認メタルトキハ臨時ニ際シ出席スルモノトス
總會又ハ役員會ヲ開クコトアルベシ

第十二條

總會及役員會ノ決議ハ過半数ヲ以テ定ム。可否同數ナルトキハ議長ノ決スル處ニヨル
本會ノ經費ハ基本金ノ收益及會員ノ勤勞ニヨリ生ズル收益及ビ其他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第十三條

經費ノ剩余ハ基本金トシテ積立ツルモノトス
會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル。毎年度經費ノ收入 支出ハ役員會

第十四條

決議ニヨリ豫算ヲ以テ之ヲ定メ、収支決算ハ總會ニ於テ報告ス
收入支出ハ會計主任ニ於テ會長ノ決議ヲ經 會長名ヲ以テ執行スルモノトス。會計主任ハ幹事

第十五條

中ヨリ會長之ヲ囑托ス

第十六條 本會ハ會員心得ヲ制定シ會員各自之ヲ遵奉スルモノトス

會員心得ハ會長別ニ之ヲ定ム

第十七條 正會員ニシテ農業補習校ニ入學スルコト能ハザルモノハ、事由ヲ詳具シ會長ニ届出ツベシ

第十八條 退會セントスルモノハ會長ノ許可ヲ受クベシ

第十九條 會員ニシテ不都合ノ行爲アルトキハ、總會ノ決議ヲ經テ除名スルコトアルベシ

第二十條 支會ニハ支會長一名 幹事 名 顧問 名ヲ置キ會長ヨリ囑托ス

第二十一條 支會長ハ會長ノ指揮ヲ受ケ、支會ノ會務ヲ處理ス。其他本會ト同シ

第二十二條 支會ノ會計ニ関シテハ、支會長ヲ以テ會長ト見做シ十三、十四、十五ヲ準用ス

第二十三條 本會則ハ總會ノ決議ヲ經ルニ非ザレバ變更スルコトヲ得ズ

附則

第廿四條 本會則ハ發布ノ日ヨリ之ヲ實施ス

十六、由良村軍人碑

◎ 忠魂碑

陸軍大將正三位勲一等功三級男爵奥保鞏書

◎ 故陸軍歩兵 川瀬重助

釋 勵網靈

明治二八年五月二四日死于滿州草河口

◎ 大阪鎮台第四師團歩兵第八聯隊第十一中隊 中出 松次郎 右同

釋 玄信

明治二八年六月十八日

◎ 故陸軍輜重兵 中田與喜松之墓

明治三十七年八月一五日

◎ 故陸軍歩兵一等卒 花岡市助墓

釋 忠幹

征露役從軍中明治三十七年十二月一日清國青泥窪ニ於テ病死

◎ 日露戰役故海軍二等機関兵 岡本梅松

釋 最通靈

明治三十七年十二月十三日 旅順口戰死

◎ 故陸軍近衛歩兵勲八等 志賀三喜造墓

釋 喜悦

興國寺ニアリ

蓮專寺附墓所

念興寺

蓮專寺附墓所

念興寺

明治四十年一月二十三日

◎水兵 田代三喜造之墓

同所

嗚呼水兵田代三喜造君法諱光円父喜兵衛母原氏初勤常艦后轉明石艦明治三十七年二月與露國交戰也先擊沈敵艦二隻于仁川尋戰于旅順港金洲灣各海蓋平之役君負傷不日而癒卒大連灣頭機械水雷沈設之事也傷痕再痛軍醫診不許服務直除隊後送六月十二日歸鄉矣後久病而翌八年九月十七日竟歿時享年二十又五官叙勲八等賜金二百五十円卹葬以荼毘哀哉

軍隊布教師釋 真龍誌

◎勲八等功七級 稻田栄次郎之墓

大字中ニアリ

周堅義到居士

陸軍上等兵稻田氏者嘉平氏長男而世家中字焉日露戰役ノ起也以豫備步兵應召集始南山之役而到平和之際轉鬪諸所而其功績不尠矣然其間櫛風沐雨之艱遂爲病源長逝於滿州營舍焉嗚呼實明治三十八年八月九日行齡廿有八歲也茲錄此一端以傳不朽云爾

◎勲八等月春祖光座元禪師

興國寺

師者當村小山儀助次男幼而出家爲興國寺徒弟矣年及弱冠遊學西都專修和漢文廿二歲掛塔楞瑞龍專門道場刻苦究明遂撞着于忠臣顯國危之一語優得登其堂焉明治三十七年偶日露間啓兵端也以步兵直上征途矣至其功績則所屬隊長表彰之曰其動作勇敢而沈着眞爲他好模範也此一詞以可知全班爾然該年十月十四日於林盛堡激戰身終殉國難焉行齡廿有三嗚呼

明治天皇戊申秋立焉

林 宗識之

十七、由良村各寺院鐘銘

◎紀州日高郡由良畑村珠石山長谷寺小鐘

體張一口 音聞八絃

式敲式擊 及警及驚

元禄七龍集申戊秋南呂吉祥月

同村住人吉田氏藤左衛門夫妻借施資財鑄造寄附焉

現住小比丘

識(氏名抹殺ノ形跡アリ)

◎日高郡由良之内阿戸村教專寺梵鐘

鐘銘ナシ

元禄十二年八月十八日

施主 善九郎

御坊前北町 金屋治左衛門

◎紀州海士郡由良網代浦念興寺小鐘

無銘

享保十四酉曆再興 念興寺住 了賢

紀州南海士由良網代浦 且中等志

◎紀伊國海士郡阿戸村教專寺鐘

憶念彌陀佛本願自然即時入必定唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩
朝夕のかねのひ、きにさそはれて 南無阿弥陀佛となへみる人

寶曆八戊寅年三月三日

紀南海士郡阿戸村江南山教專寺

釋 聞哲誌

願主 智定

現住 玄竜

妙信要眞

善覺善秀円信玄秀妙英妙要妙智當寺爲父池田平吉教照利介内妙秋爲而親孫七

願主 文左衛門

市兵衛内

粉川住 蜂屋正勝作

◎鷲峯山興國禪寺新鐘銘

夫鐘之爲功也大矣哉口賦叱王殺業無量死在海中爲千頭魚劍輪隨後日夜受苦但聞鐘聲其苦停止禪定
寺僧有兄墮獄維那鳴鐘聲振幽都同受苦徒一時解脫况又大佛頂經集衆共食或遣羅口擊啓阿難蒙祇園
銅鐘目連撞之聲振天下聖衆便臻戒壇院鐘響徹三千一切聖人聞皆證果震旦於樂待律而制律之所生待
鐘而成叢林之於規度亦大鐘資始凡衆所依止之處不可一日無之也矣大日本國南海路紀伊州日高郡由
良庄鷲峯山興國禪寺者大將軍實朝公香花道場而
法燈圓明國師所創也續焰聯芳法風之旺遠及大明季潭口公爲之書関南第一禪林之六字永揭于山門焉
開創已來五百餘年中間數罹兵燹殿堂蕪沒然繼絕興廢代有其人佛殿方丈厨庫山門稍復舊貫擬古莊觀
雖十之一尚不愧未公所書六字矣前住定外禪師嘗昭堂築寶藏衆器皆具二輪並轉因其大鐘多歷年所罅
罅稍兆擇治新之架樓簾之未及上銘而示寂現住默洲禪師以其爲父之執托予作銘道交之厚不能固辞銘
曰

関南勝地

滌篆相續

覺群生夢

悠揚穿雲
住持隨之

海内道場

五百霜星

省行無常

晨昏行香

節彼靈鷲

叢林體具

警六和衆

七擊三擊

來在扶桑

惟紀性網

奉大覺王

入堂下堂

煌々法燈

鏞鐘新鑄

一百八丁

賢聖聞之

永示寂光

規度愈章

煩惱頓亡

齊就獅床

化佛演法 顯蜜審詳 以之報國

天明二年龍集壬寅夏五月

天壽無疆

住天龍桂洲道倫謹銘

安永甲歲前住定外劫古鑄之
天明卯歲現住默洲祖漸書之

願主 由良八十兵衛

法名 龍淵得水信士

施主 當山檀中並末山寺檀

梟氏 日高嶋村 金屋勘八

勒銘工 粉河 蜂屋薩摩

◎紀州日高郡由良中村靈巖山東泉寺小鐘銘

紀南之州 東泉之寺 由良谷幽

不快人意 監寺者誰 但之崇誼

寒夜念佛 扣他檀施 于以新之

下徹阿鼻 頓停苦輪 忽破昏睡

天明五年乙巳冬十二月

靈巖山邃 刹雖叢爾 何缺法器
念茲在茲 與村人議 村人同心
宿志及遂 瀏亮其音 普及群類
暮色送陽 曉天遂吹 鐘雖不洪

小鐘磬口？
募緣從事
上透梵天
其音無已

◎由良之内橫濱光專寺鐘

無銘

寬政八年辰四月

南無阿彌陀佛

興國寺默洲祖漸謹銘
東泉監寺崇誼
中村總檀越

鑄物師 若山 金屋清左衛門
里村橫濱浦
光專寺忍亮 門徒中

◎紀伊國日高郡由良江之駒專福寺梵鐘

無銘

紀伊國日高郡由良之内江之駒浦

文政十一子霜月鑄之直 同浦講中

北星山專福寺現住一道

細工人 若山廣瀨 金屋源助

◎紀伊國海士郡由良網代浦念興寺小鐘

無銘

天保二年六月吹替

◎紀伊國海士郡由良之内畑村長谷寺鐘銘

几於法器功德大者莫加於鐘故院無大小必先置之以警昏睡導群迷也茲大日本國紀州路海士郡由良莊畑村珠石山長谷禪寺者即我開祖法燈圓明國師創建之為靈跡矣尋國師一日為眾陞座說法白日青明中忽地霹靂一聲天地震動於寺之東南畑邑箕谷而雨寶珠三顆云是所以台其地者歟因埋一顆為鎮護也是以山名珠石至今民俗以山號呼唱即無雖幼童不通者矣然其於鐘古有今無所謂不亦缺典乎故現住白堂明塔主一住始向三紀既念之在茲遂發心以謀于檀徒欲再新之矣於是各隨喜而不日成辨實文化改元甲子之秋也就余乞銘即應需書曰

鐘之為器 中虛外圓 惟佛惟祖 演法必先 此有靈地 干南紀天 山称珠石
寺在其巔 舉人所識 闕之歎然 院主發願 宿志弗遷 歲績時到 檀徒隨焉
戮力喜捨 各結勝緣 稟籥功就 聲震大千 瀏亮音韻 山應谷傳 通徹幽顯
脫厄覺眠 施者受者 獲服無邊 成一彈指 彌億萬年 佛運罔極 皇風水扇

文化改元龍集甲子冬十一月
見住鷲峯壞巖祖珍謹銘
再鑄現住 綸廬洲代
天保十四歲次癸卯季春晦日
施主

總檀那中
庄屋 又助
肝煎 喜八
新助 文平
文平 平七

當國鎌垣之庄粉河邑御鑄者師

蜂谷薩摩掾

源 正勝作

◎由良村蓮專寺梵鐘

無 銘

紀州由良港橫濱浦瑞政山蓮專寺

熊野川村徒中 世話人 傳之右衛門
萬金物所 若山新通一丁目 宮崎屋治右衛門

◎由良之内南 蓮專寺鐘

無 銘

瑞政山蓮專寺

嘉永第五壬子春再興
世話方 橫濱浦

濱田甚吉
金澤五兵衛

十八、孝子

◎後藤 久助

後藤久助氏ハ 大字畑後藤伴右衛門氏ノ長男ニシテ、明治二十一年父伴右衛門氏五十五歳ノ時生ル。家素ヨリ貧シク他ニ資財ナキニ拘ハラズ、父伴右衛門氏ハ教育ノ缺クヘカラサルヲ知り、困苦ヲ忍ビ氏ヲシテ就學セシム。氏モ亦父ノ意ヲ體シ学校ニ在リテハ

能ク師命ヲ守リ、勤勵怠ルコトナカリシカバ成績常ニ優等ヲ占メタリ。然ルニ不幸ニ

シテ父伴右衛門氏不圖眼病ニカ、リ、久助氏十一歳ノ時遂ニ失明セリ。故ニ氏ハ畑尋常小學校卒業ノ後、當時義務教育年限四ヶ年 幼少ノ身ヲ以テ、有田郡廣村ノ戸田保太郎氏ニ

仕へ、少シ許リノ賃金ヲ得テ母ヲ助ケカヲ盡シテ孝養セリ。然ルニ天何ソ無

情ナル、氏十

二歳ノ時母亦病ニカ、リ一家殆ンド生計困憊シ、為メニ家屋并ニ宅地等

ハ擧テ債主ニ渡サ

ルヘカラサルノ悲境ニ陥レリ。之ヲ以テ氏思ヘラク山川隔絶シタル

他郷ニ在リテハ少々ノ

勞銀ヲ得ルモ、父ハ失明シテ身自由ナラス。母亦病ムヲ以テ薪

水ヲトルコト能ハサレハ、飢

餓ニ及ハンコトヲ恐レ、十二歳ノ時戸田氏ヲ辞シ郷里ニ歸

リ、近隣ノ小玉鹿次郎氏ニ翌年

ハ碓間喜八氏ニ傭ハレルコト各一年、其ノ翌年ヨリ大

字中、原久吉氏ニ奉公スルコト四年、

次テ大字畑栖原常松氏ニ奉公スルコト三年、其

間晝間ハ 主家ノ為メ表裏ナク忠勤ヲ勵ミ、

夜間モ亦主家ノ為メ一定ノ作業ヲ卒ヘタル

後、當時ハ 一般ニ夜業ヲナシタルモ、現今ハ情

弱ニ流レ農僕ニシテ夜業ヲナスモノナシ

風雨ニ拘ハラス必ズ實家ニ歸リ、父母ノ安否ヲ問

フヲ以テ何ヨリ樂トセリ。殊ニ父ハ

盲目トナリ身ノ自由モ意ノ如クナラサレハ、氏ハ晝間ノ

疲勞ヲモ厭ハス、父ヲ近隣ニ伴

ヒ沐浴セシムルコト、永年一日ノ如クカハルコトナシ。又吉

凶 祝祭日 其他休日等

ニ傭主ヨリ與ヘラレタル膳部ハ、其幾分ヲ持チ歸リ父母ニ贈リ、其

心ヲ慰ムルヲ常ト

ス。實ニ氏ノ如キ孝子ヲ出シタルハ、畑尋常小學校ノ名譽トスル所ニシ

テ、本村ノ活

模範タリ。氏ハ斯ノ如キ家庭ニ在リテ、多年刻苦辛酸ヲ嘗メナカラ尚年々少

々ツ、ノ

貯金ヲナシ、二十二歳ノ時獨立シテ農業ヲ經營スルコト、ナレリ。アハレ天ハ高キ

ニ居

テ卑キヲ聞クトカヤ。氏ノ孝養ノ事イツシカ縣知事ノ聞ク所トナリ、賞金及ビ賞状ヲ

賜ハリ其至孝表旌セラレタリ。又妙心寺派管長ヨリモ、賞金及ヒ賞状ヲ贈ラレタリ。
實ニ氏一家家門ノ名譽ハ言フニ及ハス、我ガ本村ノ大ニ誇リトスル所ナリ。今賞状及
ビ祝詞ノ一ニヲ左ニ掲ゲン。

和歌山縣日高郡由良村

後藤 久助

資性温順父母ニ事ヘテ克ク孝幼時父眼疾ヲ患テ遂ニ失明シ母亦老テ身体健ナラス家貧ニシテ生計ノ
因苦ニ迫リケレハ幼少ノ身ヲ以テ他家ニ奉公シ或ハ農業ヲ営ム等百方勞役ニ從ヒテ糊口ノ資ヲ求メ
辛酸多年一意孝養ヲ怠ラサルハ洵ニ奇特トス仍テ為其賞金五円下賜候事
大正元年九月二十六日

和歌山縣知事正五位勲四等

川村 竹治

紀伊國長谷寺檀徒

後藤 久助

右幼少ノ時父明ヲ失シ母亦老徳シテ家計益困難ニ陥リシニ一少年ノ身ヲ以テ農家ニ傭ハレ拮据勞役
ニ服シテ纒力ニ家資ヲ獲以テ永年一日ノ如孝養ヲ懈ラサルハ洵ニ少年ノ龜鑑トナスニ足ル仍テ爰ニ
金一包ヲ贈リ之ヲ賞ス

大正二年三月三十一日

妙心寺派管長

豊田 毒湛

祝詞

大正元年九月二十七日

那賀郡池田村春日神社々掌

坂上 文臺

孝子後藤氏ニ送ル

親子とも

言へぬ味あり

唐の芋

本村宇佐八幡神社々掌

井原 幸一

◎尚義會ノ美擧

大正元年九月ノ暴風ノ為畑字ニ於テ、家屋ノ倒壊シタルモノ三戸。何レモ家貧窮ニシ
テ、建築ノ資力ナキヲ以テ、尚義會ハ之ヲ再築シ其堵ニ安ンセシム。コノ事縣知事ノ
知ル所トナリ、大正二年表旌セラレタリ。左ニ賞状ノ寫シヲ掲ク。

賞状

日高郡由良村畑

尚義會

大正元年九月二十二日暴風ノ為メ家屋三戸倒壊スルヤ其ノ貧窮ナルヲ以テ本會ニ於テ材料 勞務
ヲ供シ無償再築ヲ為セリ其行為以テ他ノ模範トナスニ足ル茲ニ之ヲ賞ス

大正二年二月二十三日

和歌山縣知事正五位勲四等

川村 竹治

十九、旧家

◎畑 芳養増次郎

平治年間西牟婁郡芳養村ヨリ移住セラレ、依リテ以テ氏トセラレタルモノニテ、大字
畑ニ於テノ旧家ナリ。タゞ惜ムラクハ古記録ノ存スルモノナキヲ以テ、平治年間ヨリ當
時ニ至ル系統及其詳傳ヲ得サルコトヲ。

◎畑 後藤重郎兵衛

姓ハ藤原後藤隱岐守基次ノ末裔ナリ。元和年間大坂落城ノ際基次奮戦シテ死ス。嫡子
基利病ヲ患ヒ由良ニ没落シ、自ラ農ニ歸シ名ヲ又次ト改ム。元禄年間五世ノ孫又左衛
門アリ。後藤家中興ノ祖ニシテ家門大ニ榮ヘ、世々郷庄屋ヲ勤ム。其後數世ノ孫又助
庄屋ヲ勤ムルコト二十八年、汲々トシテ其職ニ盡碎シ、上ニ對シテハ忠 下ニ對シテハ
ニ村民悦服セリ。安政年中チコベ池ヲ新築セリ。其他公益ニ関スル處甚ハタ多シ。 寛
年宇野家ヨリ目錄ヲ添ヘ、上一具ヲ賞與セララル、左ニ其寫シヲ掲ク。 安政二

後藤家ハ中古火災ニカヘリタル為メ、元和年間ヨリ當時ニ至ルテマ、記録ノ存スルモノ
ナキヲ以テ家系等不詳ナリ。

因ニ 柳平十郎氏ハ同家ノ分家ナリ。

目錄

一、上下 一具

右ハ其方儀祖先之代ヨリ不相交納庄屋相勤候ニ付右ノ品相渡可申候以上

安政二年八月十六日

納庄屋 又助殿

◎畑 山塚調五郎

淺野家入國後數代庄屋役ヲ勤メタリト云フ旧家。吉兵衛氏ノ後裔ニテ十數年前マテハ、淺野家ノ定書一通ヲ藏シタリシモ、惜ムベシ祝融ノ見舞フ所トナリ、古記録殘ラズ鳥有ニ歸セリ。故ニ其經歷等ニツキテハ不詳ナリ。左ニ風土記所載ノ淺野家ノ定書寫シヲ掲ケン

定

- 一、當年貢納判升ノ外トリヤリ一切停止之事
 - 一、年貢之儀ハ百姓トシテハカリ渡ヘシ付御米ハ相定ゴトコトク一石ニ付ニ升宛タルベシ。然時ハムシロ付ノ米一切不可出事
 - 一、當年荒ヲヒラキ候所於有之者當春申出ス如ク當年ハツクリトリタルベキ事
 - 一、百姓申分於有之者此方ヘ申ヘシ埋リモナク小百姓一人モハシラセ候向其トコロノオトナ百姓曲事タルヘキ事
 - 一、年貢俵ヲハシカミノ莊ヨリカタ迄ノ内加歌太山江相著ヘシ、ハシカミヨリオクハソノ郡船著マテ可出候付代官給人非分於有之者左衛門佐方マテ可申出事
- 右條々相違有之候テ隱置ニオキテハ百姓為曲事者也仍如件
慶長六年九月二十五日

左京 印 幸長

海士郡百姓中

◎阿戸ノ内網代 楠山四郎右衛門

其祖先ハ楠正儀ニ出ツ。世々河内ニ住セシガ、永祿年間儀太夫正元當國ノ豪族湯川直光ニ臣事シ三好氏等ト會戰セリ。後石山本願寺ニ歸依シ、石山落城ノ後湯川直春ノ麾下ニ屬シ戰功アリタリ。天正年間湯川氏亡ヒタリシカバ、居ヲ由良網代浦ニ定メ子孫數世海ニ漁シ、商ヲ營ミ榮枯盛衰ハ數ノ免レサル處ナリシモ、家系連綿トシテ世々庄屋役ヲ勤メタリ。四郎左衛門ニ至リ酒造ヲ始メ、一方意ヲ村治ニ致シタルヲ以テ藩主苗字帶刀ヲ許サレタリト。同家ノ系統ハ左ノ如シ。

祖先楠山儀太夫正元 …… 儀太夫 …… 勘太夫 …… 曾右衛門 …… 義右衛門 …… 文助 …… 四郎右衛門 …… 四郎右衛門 …… 四郎右衛門 …… 四郎右衛門(當主)

◎阿戸 井原幸一

井原家八門前西方寺建立前ヨリ阿戸ニ居住シタルモノニテ、前述八幡神社ノ記事中記載ノ、北傳太夫氏ハ井原氏ノ先祖ニシテ、當時阿戸ニ居住ノ戸數ノ僅々六戸ナリシト。其ノ頃ヨリ神事ヲ掌リ、今日マテ數百年ノ間連綿トシテ繼續セル稀ニ見ル旧家ニテ、家ニハ古文書及ビ寶物類ヲ藏セシ由ナルモ、上古ヨリ兩三回ノ大海嘯ノ為古記録等ヲ流失シタリ、僅一左ノ古文書一通ヲ存スルノミ。實ニ遺憾ノ極ナリ。

元和年中奉行ヨリノ古文書寫

陸奥國白川領岩瀬郡大宮司
從五位下藤原朝臣國喜

三嶋木紀伊守

東照宮天下諸神社神主等 御書判ヲ以テ 天照太神肖レ掟尊ニ異國ノ怪申ニ間敷事

附氏神產社破脚ノ事

一、諸神社ノ社家禰宜等於 日本國中即文武之士也宜學神國文武之道可奉守御國家者也

一、諸神社別當神主禰宜等其國之領主地頭之家臣ニ候共可為兼職事並神事祭禮之節ハ以吉田家載許可着烏帽子淨衣等事

從往右神主神宮等勿論可為前條事

家康公

御書判

元和元年正月十五日

日本國中諸神社別當神主中

右依仰執達如件

奉行判

同三月朔日

前述ノ如ク井原家ニ関スル古記録モ、流失シタルニ付上古ノ事ハ不明ナル由ナルモ、北傳太夫氏ヨリノ系統左ノ如シ。

祖先北傳太夫 —— 井原傳十郎 —— 直經 —— 九兵衛 —— 九右衛門 —— 幸四郎 —— 千倉
—— 傳十郎 —— 幸一(當主)

附 溜池調査表

名稱	位置	周 圍	面 積	東 西 之 長	南 北 之 長
栗谷池	畑	三町四十七間	一町一段一畝六步	四十五間	五十四間
橋立池	〃	五十二間	一段九步	十間	十八間

羽助池	田首池	白倉池	伏谷池	お亀池	玉石池	泉谷池	平内池	正直谷池	櫻谷池	四ヶ屋敷池	小碓間池	碓間池	柳戸池	ヲ口助池	杵力谷池	梶田池	全平家池	〃	〃	碓池	風穴池	名稱
〃	〃	中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	位置
四十一間	六十一間	五町五十二間	二十一間	三十五間	二十四間	二十五間	二十五間	二十間	十一間	十一間	十五間	三十間	十九間	十九間	二十間	十一間	十一間	十三間	二十七間	二十三間	十八間	周 圍
四畝十二歩	一段二畝三歩	一町三段二畝十二歩	一畝六歩	三畝十二歩	一畝十二歩	三畝廿一步	二畝十五歩	一畝十八歩	二畝三歩	廿七歩	一畝十二歩	三畝十五歩	二畝三歩	一畝十五歩	二畝六歩	一畝歩	十五歩	一畝歩	三畝六歩	二畝廿四歩	一畝十二歩	面 積
十三間	十六間	五十間	五間	二十間	七間	八間	十間	四間	七間	三間	四間	十一間	六間	五間	七間	四間	二間	三間	六間	五間	三間	東西ノ長
十間	十六間	七十間	九間	八間	六間	六間	四間	四間	五間	四間	六間	七間	六間	六間	六間	四間	四間	四間	六間	七間	六間	南北ノ長

木内池	那端池	遠志池	小碓間池	漆谷池	長野池	屋行地池	尾崎池	加辻池	東本池	湯舟池	小井谷池
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
二十間	十七間	十七間	二十五間	十七間	十二間	十三間	十間	二十間	三十二間	七十間	四十八間
二畝歩	四畝歩	一畝九歩	二畝十五歩	一畝三歩	一畝歩	三畝廿一步	一畝十八歩	二畝十五歩	三畝六歩	二段六畝十二歩	一段一畝十五歩
七間	八間	五間	七間	三間	三間	十間	五間	七間	八間	二十間	十五間
六間	八間	五間	七間	七間	三間	七間	六間	七間	七間	十一間	十八間

真谷池	大田和池	護國寺池	白田池	池ノ谷池	竹生谷池	只越池	全路池	吉路池	北山池	枇杷河池	寺田小池	寺田池	佐平前池	片山池	谷池	中谷池	岩ノ谷池	鍛冶屋谷池	森本池	瀧ノ谷池	東大門池	名稱	
〃	〃	里	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	里	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	位置
四十七間	二十八間	二十七間	二十七間	十九間	二十間	二十一間	二十八間	六十九間	十三間	百八十間	百八十二間	四百八十五間	十四間	三十三間	二十一間	一町二間	二十間	二十三間	四十間	十二間	三十間	周	圍
五畝十九步	十四步	廿一步	廿一步	一畝	一畝	一畝	一畝十五步	四畝廿一步	三畝十三步	二段五畝七步	一段九畝十一步	九段七畝廿七步	十六步	二畝	一畝廿七步	一段三畝廿一步	二畝九步	二畝九步	一畝廿一步	廿一步	一畝十八步	面積	積
十三間	二間	三間	二間	五間	五間	五間	四間	五間	十間	四十一間	三十二間	三町二十一間	四間	十間	七間	二十六間	五間	六間	四間	四間	十二間	東西ノ長	
十三間	七間	七間	十間	六間	六間	六間	十一間	二十四間	七間	六十五間	六十二間	五十間	四間	六間	六間	十間	七間	七間	二間	四間	四間	南北ノ長	

西大門池	水谷池	畔地谷池	北池谷ノ池	天神池	赤坂池	南池谷池	阿尾谷池	東谷池	白倉谷池	橋谷池	種田原池
〃	〃	〃	〃	〃	〃	門前	〃	〃	〃	〃	〃
三十間	二町三十二間	一町二十間	七十九間	三町三十六間	二十九間	二十三間	三十二間	三十二間	十七間	二十間	三十一間
三畝	六段二畝十二步	一段八畝	二段一畝九步	五段一畝	一畝廿七步	廿四步	二畝十二步	四畝十二步	一畝	一畝六步	三畝三步
八間	三十六間	十五間	十七間	六十八間	三間	八間	十間	八間	四間	八間	八間
十一間	三十四間	二十四間	二十二間	九間	十三間	四間	二間	十二間	三間	三間	八間

附

郵便物貯金等調査表

本村内ニ於ケルモノ而已掲ケントシタルモ不明ニ付本表ハ由良局区内総体ノモノニ付看者諒之

年 度	通常郵便物数		小包郵便物数		為替受金額	為替拂金額	
	引受	配達	引受	配達		口数	金額
明治四十年	一一三〇九九	一六八六四〇	一〇九七	一六一五	一一八三	一七一〇三	一九九五
全 四一年	一一九五八四	一八二八六九	一一三六	一六六一	一四八七	二〇六六四	一一
全 四二年	一三五三七二	一五三二九六	一一三三	一六四二	二八九	八四九	九二
全 四三年	一二七四八五	一五五一五二	一一八二	二〇〇三	一四四四	二一七五〇	二〇八〇
全 四四年	一一七二〇二	一四七六七七	一一二〇	一九七三	一四一一	二四七七二	一八六七
年 度							
貯金預							
貯金拂							
電報通数							

名稱	位置	周 囲	面 積	東西ノ長	南北ノ長
岩 戸 池	"	二十六間	一畝十五歩	七間	五間
浦 須 賀 池	"	十六間	十二歩	四間	三間
明 々 谷 池	"	二十二間	十八歩	六間	三間
西ノ脇池	"	十六間	十二歩	四間	三間
白木谷池	阿 戸	二町二十九間	六段 廿八歩	四十五間	四十四間
只越池	"	二十三間	二畝 九歩	七間	六間
風呂ノ谷池	"	二十四間	二畝 十二歩	七間	八間
楠木谷池	"	二十五間	二畝 十二歩	六間	八間
坂ノ谷池	"	二十五間	二畝 十二歩	六間	八間
東谷池	"	二十四間	一畝 十八歩	六間	八間
大谷池	江ノ駒	八十間	六段 四畝 廿一部	十三間	二十七間
青ヶ谷池	"	二十三間	一畝 十歩	四間	十間

總計 八十六

附 温度表

二	一		一		一		一		九		八		七		六		五		四		月
	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	
六六	三八	五八	五〇	六五	五三	六八	七〇	八五	七一	八八	八四	八七	七七	八五	七〇	八四	六六	七八	五七	七一	明治三十四年
高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	全
六六	四四	六三	五〇	六五	六〇	七二	六五	七五	六六	八八	八五	八八	七六	八六	七〇	八二	六四	七八	五六	七七	三十五年
高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	全
六〇	四一	五九	四七	六四	五六	七一	六一	八〇	七六	九〇	八六	九〇	七八	八八	七六	八二	六七	八一	六二	七三	三十六年
高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	全
五八	四七	六四	五一	七六	五四	七四	六四	八二	七〇	八七	八五	八九	八二	九一	七五	八八	六四	七八	五一	七七	三十七年
高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	全
六〇	四一	六四	五三	七四	五八	七五	七〇	八三	七二	八九	八〇	八八	八二	九一	七二	八三	六二	八一	五二	七〇	三十八年
高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	全
六二	五〇	六四	五二	六七	五二	七八	七〇	八二	七六	八〇	八四	九一	八〇	九二	七五	八三	六六	八二	六七	七二	三十九年
高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	全
五五	五〇	六〇	五三	六二	五六	七二	六八	七八	七六	八九	八五	八八	七六	八八	七〇	八二	七〇	八二	六七	七八	四〇年

全	全	全	全	明治	
四	四	四	四	四十	
年	年	年	年	年	
五	五	五	五	二	口数
一	一	一	一	二	金額
八	八	八	八	七	口数
九	九	九	九	六	金額
〇	〇	〇	〇	六	発信
〇	〇	〇	〇	六	着信
〇	〇	〇	〇	三	中継

附

郡會議員選舉有權者表 大正四年度

大字 畑 六六 大字 中 一二 大字 門前 二二

三		二		一		一二		一一		一〇		九		八		七		月
低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	明治四一年
四三	六〇	四三	五八	四六	六〇	五〇	六〇	五八	七〇	六二	八〇	七二	八四	八〇	九〇	七七	九〇	
低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	明治四二年
五一	六六	四五	六〇	五〇	六六	五〇	七〇	六〇	七二	六四	八五	八二	九二	八三	九二	七五	九三	
低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	全四三年
五二	七一	四二	五八	五〇	六〇	五二	六三	六〇	七三	七〇	八〇	七〇	八九	八三	九〇	七八	九〇	
低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	平均温度
四九	六七	四五	六〇	四五	六一	五〇	六六	五六	七二	六六	八一	七三	八七	八三	八九	七八	八九	
二	二	一	三	七	八	八	六	七	五	四	〇	一	一	五	六	一	四	

六		五		四		月
低	高	低	高	低	高	明治四一年
七六	八四	六四	七七	五三	七八	
低	高	低	高	低	高	明治四二年
七三	八二	六三	八〇	六〇	七一	
低	高	低	高	低	高	全四三年
七五	八二	六八	八二	五二	七四	
低	高	低	高	低	高	平均温度
七三	八三	六五	七九	五六	七四	
二	二	四	九	七	一	

三		
低	高	低
五三	七二	四五
低	高	低
五〇	六七	四六
低	高	低
五二	六六	五一
低	高	低
五一	六〇	四六
低	高	低
四四	七〇	四四
低	高	低
五四	六六	四五
低	高	低
四二	六四	四四

大字	里	三八	大字阿戸	四六一	大字江ノ駒	九	計	一九三
----	---	----	------	-----	-------	---	---	-----

大字	畑	六四	大字中	一一	大字門前	二三	計	一九八
大字	里	四六	大字阿戸	四三	大字江ノ駒	一一		

衆議院議員選舉有權者表(大正四年)

大字	畑	五三	大字中	五	大字門前	二〇	計	一三四
大字	里	二五	大字阿戸	二七	大字江ノ駒	四		

明治二十二年大風ニテ家屋倒潰表

大字畑之部

尾崎善右工門	本宅ワラ葺	岩田助左衛門	本宅ワラ葺	関口權四郎	本宅ワラ葺
田中多四郎	全	木下長作	全	田中多八	全

竹本楠吉	全	坂本弥兵衛	全	笹裏源左工門	全
細川弥四郎	全	稲田與助	全負傷一	中芝幾右工門	全
上中長兵衛	全	榎地庄左工門	本宅ワラ葺	太田惣助	本宅ワラ葺
山塚孫右工門	全	西山楠左工門	全	橋立太郎右工門	全
山塚調五郎	全	津井定次郎	全	竹中三郎右工門	全
柳平十郎	全	後藤清吉	全	坂口長七	全
柳又藏	全	庄司徳右工門	全	平岡利助	全

大字中ノ部

原楠右工門	二階柴屋瓦葺	原幸三郎	柴屋ワラ葺	原弥右工門	本宅瓦葺
-------	--------	------	-------	-------	------

大字門前ノ部

岸本由左工門	本宅ワラ葺	由良音右工門	本宅ワラ葺	本田幸兵衛	本宅ワラ葺
小山市松	全	岡政五郎	全	山下久助	全
本田弥平	本宅瓦葺	小山伊助	納屋ワラ葺	野田万助	納ヤワラフキ
由良喜三兵衛	本宅ワラ子供庄死	興國寺大門	瓦葺	山下卯吉	全
下嵯兵藏	納屋ワラ牛庄死	杉谷平助	本宅ワラ葺	山中鶴吉	本宅ワラフキ

里ノ部

尾崎由松	本宅瓦負傷	杉本三右工門	本宅ワラ納ヤワラ	竹中平兵衛	納ヤワラ
------	-------	--------	----------	-------	------

南ノ部

計 三
計 十五
計 三
計 二十八

山中儀右子門	納ヤ瓦庄死子供ニ	岩崎儀右子門	本宅ワラ	菅西 角次郎	本宅ワラ葺
--------	----------	--------	------	--------	-------

阿戸ノ部

吉田 コマツ	本宅ワラフキ
--------	--------

網代ノ部

山下 七藏	本宅瓦フキ	夕古 スエ	本宅瓦フキ	松下源右子門	本宅瓦フキ
-------	-------	-------	-------	--------	-------

江之駒ノ部

大江 文三郎	本宅ワラフキ	西 新次郎	本宅瓦	西 キレ	本宅瓦
西 豊吉	全	石橋 傳吉	納ヤ瓦	谷口 吉蔵	ナヤワラ
上出 納吉	ナヤワラ				

流失家屋 阿戸中洲

祐田 虎吉	本宅瓦	伊藤 楠二郎	本宅瓦	田中 富三郎	本宅瓦
片岡 正雄	座シキ瓦				

慶長六年由良之内戸数調

烟	三十六	中	十八	門前	十八
畢横浜南	七十三	阿戸網代江ノ駒	二十五		

記念碑建設費表

名称	建設年月日	経費
忠魂碑	明治三十九年十二月五日	金五〇四円八十六銭
白倉池碑	明治四十一年七月二日	一九六円六十四銭

白倉池碑建設費内別

金八十八円九十七銭八厘
 全二十四円六十四銭参厘
 全 七円九十 銭
 全七十五円十一 銭九厘
 支出合計
 石工池田源松へ支拂
 鉄 柵 代
 舟三ゾー借賃 大引へ原石二個取りニ行ク節網代ニテ借り入レタモノ
 諸 雑 費
 計百九十六円六十四銭
 金百二十九円六十五銭
 六十六円九十九銭
 池掛リ関係ソノ他ヨリ寄附金
 不足

計百七十

計 四

計 七

計 四

計 一

計 三

金三十三円四十九銭五厘ツ、
原彦太郎 分家 ヨリ出金
胤衛 本家

石碑ノ敷地ハ原彦太郎所有地ニテ、由良縦貫ノ道路開通ノ為メ深ク落子込ミタル地ナリシヲ、区民総出ニテ埋立テタルモノニテ、地代ニ相当スル工費ヲ要シタルモ、区民ノ好意ニテ無償成功シタルモノナリ。

各種車数調査表(大正五年度)

四輪車	烟	四門前	一	計	五	
二輪車	烟	一				
自轉車	烟	四門前	二里	計	十五	
荷車	烟	三	中門前	二里	計	二十一
免税車	烟	一	中門前	十二里	計	二十四

合計 六十六

井水調査表 大正五年

大字名	良水	適水	不適	計
烟	一五	一八	五八	九一
中	〇	三	九	一二
門前	四	一九	二三	四六
里	二	三	一二	一七
横浜	〇	一九	四七	六六
南	〇	四	一五	一九
阿戸	一三	七	三五	五五
網代	〇	一	三三	三四
江ノ駒	〇	〇	一七	一七
計	三四	七四	二四九	三五七

◎ 歴史年表

紀元	歴代	天皇	年	號	記	事	欄
八六〇	一四	仲哀			武内宿禰	由良港一泊ス	
一三六一	四二	文武	大寶	元年	文武天皇	由良港一遊幸シ給ヘリ	
一八四六	八二	後鳥羽	壽永	建久ノ頃	修明門院	後鳥羽后ノ領	
一八六〇	八三	土御門	正治	二年	法燈國師	生ル	
一八七九	八四	順德	承久	元年	八幡宮ヲ	名古ノ芝ニ移ス	
一八八七	八六	後堀河	安貞	元年	由良西方寺	興國寺 建立	
一九〇九	八九	後深草	建長	元年	覺心大和尚	渡宗	
一九一四	八九	後深草	建長	六年	覺心大和尚	宋ヨリ帰朝	

紀元	歴代	天皇	年	號	事	欄
二二五八	一〇六	後陽成	慶長	三年	横浜光專寺建立	
二二六〇	全		元和	五年	淺野幸長ノ領地トナル	
二二七五	一〇七	後水尾	元和	元年	畑栗谷池開鑿ス	
二二七九	全		寛永	元年	徳川頼宣ノ領トナル	
二二八四	全		寛永	元年	江ノ駒專福寺建立	
二二九〇	一〇八	明正	天和	七年	網代西光寺建立	
二三四二	一一一	靈元	元和	二年	大早越	
二三四九	一一二	東山	元禄	二年	光專寺鐘樓ヲ建ツ	
二三五五	全		全	四年	白倉池開鑿ス	
二三五四	全		全	七年	長谷寺梵鐘鑄造	
二三五九	全		全	十二年	西光寺ヲ念興寺ト改ム	
二三八八	一一三	中御門	享保	十四年	教專寺梵鐘鑄造	
二四一八	一一五	桃園	寶歴	八年	念興寺鐘鑄造	
二四二三	一一六	後櫻町	全	十三年	長谷寺本堂再建ス	
二四三四	一一七	後桃園	安永	三年	興國寺新鐘ナル	
二四四五	一一八	光格	天明	五年	東泉寺梵鐘ナル	
二四五二	全		寛政	四年	東泉寺現今ノ位置ニ移轉 本堂再建ス	
二四六四	一一八	光格	文化	二年	光專寺鐘鑄造	
					教專寺本堂 僧坊 鐘樓建立ス	

一九一八	全	後宇多	正嘉	二年	西方寺ヲ禪刹ニ改ム
一九三六	九一	伏見	建治	二年	八幡宮ヲ簾山ノ麓平石ニ移ス
一九五〇	九二		正應	三年	長谷寺建立
一九五一	全		全	四年	箕谷ノ寶珠ヲ雨ラス
一九五六	全		永仁	四年	八幡宮ヲ網掛ニ移ス(現在地)
一九五八	全		全	六年	法燈國師御遷化
二〇〇〇	九七	後村上	興國	元年	西方寺ヲ興國寺ト改ム
二〇五四	九九	後小松	應永	年中	山名義理網代ニ來住
二〇九八	一〇一	後花園	永享	十年	畠山入道鹿背城ヲ攻メ落ス
二一四五	一〇二	後土御門	文明	十七年	南蓮專寺建立
二一七四	一〇三	後柏原	永正	十一年	教專寺建立
二二二四	一〇四	後奈良	永祿	七年	織田信長ノ臣佐久間信盛ナルモノ興國寺僧坊ヲ焼ク
二二四五	一〇五	正親町	天正	十三年	羽柴秀長ノ領トナル
			自天正至慶長		東泉寺建立

紀元	歴代	天皇	年號	記事欄
二五二九	一一一	明治	明治二年	和歌山藩トナル
二五三一	全		四年	和歌山縣トナル
二五三二	全		五年	一小区役所ヲ横浜ニタツ
二五三三	全		六年	學区制頒布サル
二五三四	全		七年	地券ヲ制シ地價百分ノ三ヲ租トス
二五三五	全		八年頃	光專寺ヲ假用小學校トス
全	全			区役所ヲ横浜ニ設ク
全	全			捕亡吏出張所ヲ横浜ニ設ク
全	全			珠石小學校ヲ開ク
全	全			中村小學校ヲ開ク
全	全			畑中門前合、石山小學校
全	全			阿戸分離 阿戸小學校ヲ設
全	全			地租二分五厘トナル
全	全			大字中二戸長役場ヲ置ク
全	全			本村日高郡へ編入
全	全			横濱二戸長役場ヲ置ク
全	全			旧會議所ヲ小學校トス
全	全			横濱分署新築ス
全	全			郡役所ヲ置ク
全	全			阿戸分離シテ阿戸二戸長役場ヲ置ク

全	全		全	阿戸西谷池嵩置
全	全		慶應元年	念佛寺本堂改築
全	全		元治元年	將軍徳川慶喜由良港上陸 教專寺ニテ休息
全	全		文久三年	白倉池増築
全	全		六年	專福寺本堂再建
全	全		安政元年	大地震海嘯
全	全		六年	大旱魃
全	一一〇	孝明	嘉永五年	蓮專寺鐘ナル
全	全		全十四年	長谷寺鐘鑄造
全	全		二年	念興寺小鐘ナル
全	全		天保元年	里寺田池増築
全	一一九	仁孝	文政十一年	專福寺梵鐘ナル
全	全		全四年	念興寺本堂 僧坊再建
全	全		全	南ヨリ佃二戸移住

紀元	歴代天皇	年號	記事欄
全	全	全	熊野街道開鑿
二五五二	全	全二五年	畑分教場ヲ開ク
二五五三	全	全二六年	水谷池嵩置竣功
全	全	全	御坊区裁判所由良出張所ヲ設ク
二五五四	全	全二七年	栗谷池嵩置
二五五五	全	全二八年	始テ赤十字社加入
二五五六	全	全二九年	小包郵便ヲ開始ス
二五五七	全	全三〇年	尚武會加入
二五五八	全	全三一年	由良尋常高等小學校ト改ム
全	全	全	畑分教場ハ獨立シテ畑尋常小學校トナル
二五六〇	全	全三三年	村農會創立
全	全	全	大字畑ニ植林ヲナス
二五六一	全	全三四年	電信ヲ開始ス
二五六二	全	全三五年	畑尚義會創立
二五六五	全	全三八年	在郷軍人會ナル
全	全	全	天理教會ヲ設ク
全	全	全	愛国婦人會ナル
二五六六	全	全三九年	寺田池嵩置ニ着手
全	全	全	<i>Sphagnum Kiensis</i> Brth ヲ白倉溪ニテ発見ス
二五六六	全	全	興國寺ニ忠魂碑ヲタツ

二五四三	全	全	大旱害
全	全	全	水谷池嵩置着手
二五四四	全	全	門前分離シテ温良小學校ヲ開ク
全	全	全	里村外五ヶ村役場ヲ里ニ置ク
全	全	全	阿戸・門前・中里合併シテ里小學校ト称ス
二五四五	全	全十八年	由良小學校ト改ム
全	全	全	門前岡常吉氏渡米ス 但シ本村ニテ渡米者ノ嚙矢トス
全	全	全	郵便貯金ヲ始ム
二五四七	全	全二〇年	横濱分署撤廢
全	全	全	興國寺ハ妙心寺派ノ本寺ニ編入ス
全	全	全	由良尋常小學校ト改ム
二五四八	全	全二一年	大風害 大門倒ル
二五四九	全	全二二年	町村制實施由良ノ内ヲ合シ由良村ト称シ里ニ由良村役場ヲ置ク
全	全	全	大水害

二五七六	全	全	全	紀元	
二五七五	全	全	全	歷代天皇	
二五七四	全	全	全	年號	各字青年會ヲ統一ス
					隔離病舎新築
					寺田池増築ス
					記事欄

二五七四	全	全	全	全	三年	電話ヲ開始ス
二五七三	全	全	全	全	二年	尚義會表旌サル
全	全	全	全	全	元年	孝子後藤久助氏本縣ヨリ賞ヲウケル
二五七二	全	全	全	全	大正元年	風濤ノ爲阿戸中洲ノ海岸ニテ家屋流失
全	全	全	全	全	全	中洲埋立
全	全	全	全	全	全	紀伊汽船株式會社解散
二五七一	全	全	全	全	四四年	水害
全	全	全	全	全	全	御坊区裁判所由良出張所新築ナル
全	全	全	全	全	全	各大字ノ神社ヲ横濱ノ宇佐八幡神社ニ合祀
全	全	全	全	全	全	紀伊汽船株式會社ナル
二五七〇	全	全	全	全	四三年	熊野街道廢道トナル
二五六九	全	全	全	全	四二年	畑植林碑ヲタツ
二五六八	全	全	全	全	四一年	白倉池碑ヲタツ

一、本書は端書のように原胤衛氏の編するところで、胤衛氏没後も原家に大切に保管せられてゐたが、畑小幸校長田端辰夫氏の盡力によつて、借覧することが出来た。

一、原本は美濃罫紙に毛筆をもつて記されてゐる。製本の都合で上下二冊としたが、もともと一冊のものである。

昭和二十八年三月二十六日寫之

清水 長一郎

一、今回活字化した『日高郡由良村郷土誌』は毛筆で書き写し上下二巻に製本していた。使用の用紙は毛筆の為か、一度使用した書類の裏面ではなしに、新品の習字用半紙を使い奇麗に二つ折りして製本していた。

一、毛筆の為割合字が大きく楽に活字化出来ると思つたが、百二十ページ余りの大作となつた。しかし楷書で書いてある分解読不能な字は少なかったが、旧字が多く電子辞書や手書き入力で字を探し、JISコードで入力したのと、送り仮名がカタカナの為、

平仮名をカタカナに変換したので凄く時間を費やした。

一、百二十頁余りと膨大であるが為 1.3MB のフロッピーには通常では保存出来ず、圧縮して退避した。

平成十六(二〇〇四)年二月四日

清水章博

追記

本年に入り由良町中央公民館の小出潔氏に写本を進呈したところ、公民館所蔵の原本と照合の上再校正いただきました。たくさんの誤写が見つかり、これでやっと人前に出せる写本になりました。小出様に厚く御礼申し上げる次第です。

平成十七(二〇〇五)年四月二十二日

清水章博

使用ワープロソフト『一太郎 Ver.12』 Windows 98&Me